

糸数城跡

—蔵屋敷地区発掘調査報告書—

2017年 3月

沖縄県南城市教育委員会

序 文

本調査報告書は、平成 18 年度から平成 25 年度に実施した国指定史跡糸数城跡の蔵屋敷地区の発掘調査で得られた成果をまとめたものです。

調査は、本城である糸数城を支えた人々の集落がひろがっていたと伝わる蔵屋敷跡の屋敷囲いの石積み部分を中心に、糸数城と蔵屋敷跡を分断するかのように所在する堀切状遺構を含めて、遺跡の内容を確認し、今後進めていく蔵屋敷地区の保存・整備事業にむけて事前に行われたものです。

今回の調査は、蔵屋敷地区に限られた範囲で行われましたが、考古学的に多くの成果が得られています。得られた資料は蔵屋敷地区の内容解明や今後の整備・活用方法に大きく貢献できるものになると期待しております。

本書に記した調査の成果が、南城市に所在する多くのグスクの調査研究に寄与するとともに、南城市の歴史を学ぶ多くの方々にご活用いただければ幸いです。

結びになりましたが、発掘調査にあたりご指導、ご協力を賜りました諸先生方、文化庁及び沖縄県教育庁関係者、糸数区をはじめとした地域の方々に心から御礼を申し上げます。

平成 29 年 3 月
沖縄県南城市教育委員会
教育長 山城 馨

例 言

1. 本報告書は、平成 18 年度から平成 25 年度に実施した発掘調査の成果を収録している。
2. 発掘調査は、文化庁及び沖縄県より補助金を受けて実施した。
3. 本報告書では、堀切状遺構が存する地域について堀切地区という名称を採用している。しかし、今後の調査・研究によっては名称を変更することがある。
4. 出土遺物の分類及び整理については、勢理客智也が行った。また、本報告書の執筆は、勢理客智也、西平剛の協力を得て、第 1 章・第 2 章第 1 節～第 6 節・第 3 章は山里昌次、第 2 章第 7 節は横山幸平、第 2 章第 8 節は津波陽子が執筆を行い、全体の編集・構成を山里昌次が行った。
5. 遺構図の一部はデジタルトレース支援委託業務の成果品を編集して掲載した。
6. 実測遺物及び写真図版の番号は共通している。
7. 遺物実測図の展開は、3面を実測している場合、左側から外面－断面－内面、2面を実測している場合、外面－断面の順で行っている。
8. 遺物の縮尺は 1/3、遺構図面の縮尺は 1/50 又は 1/60 としている。
9. 発掘調査で得られた遺物、実測図及び写真の記録は、すべて南城市教育委員会で保管している。

目 次

序 文 例 言

第1章 発掘調査の前に	1
第1節 遺跡の位置と環境	1
1. 南城市の位置と環境	1
2. 糸数城跡(蔵屋敷地区)周辺の位置と環境	6
第2節 発掘調査の経過	8
1. 調査に至る経緯	8
2. 調査体制	8
3. 調査の経過	10
第2章 発掘調査の成果	15
第1節 調査の方法	15
第2節 基本的層序	15
第3節 平成18・19年度の成果	16
1. 平成18年度	16
2. 平成19年度	16
第4節 平成20年度の成果	19
1. F2・3、G2・3グリッド発掘区	19
2. F13・14、G13・14グリッド発掘区	23
第5節 平成21年度の成果	29
1. F2・3グリッド発掘区	29
2. F・G8グリッド発掘区	37
3. F・G13グリッド、F14グリッド東側、G14グリッド西・北側発掘区	43
第6節 平成22年度の成果	53
1. F5・6グリッド発掘区	53
2. F10・11グリッド発掘区	54
3. B・C・D8グリッド発掘区	56
4. I8グリッド発掘区	57
5. K・L・M8グリッド発掘区	61
6. O・P8グリッド発掘区	62
7. R・S8グリッド発掘区	64
8. P5グリッド発掘区	66
9. P10グリッド発掘区	68
第7節 平成23・24年度の成果	74
1. D2・3グリッド発掘区	74

2. I2グリッド発掘区	76
3. P2・3グリッド発掘区	78
4. H・I10・11(平成23年度)、J10・11、H・I・J12(平成24年度)グリッド発掘区	82
第8節 平成25年度の成果	103
1. 堀切トレンチ1	103
2. 堀切トレンチ2	107
3. 堀切トレンチ3	112
4. 堀切トレンチ4	116
5. 堀切トレンチ5	120
第3章 まとめ	129
1. 蔵屋敷跡	129
2. 堀切地区	130
3. まとめ	130
【発掘調査報告書抄録】	

挿図目次

第1図 南城市位置図	第20図 K・L・M8グリッド平面図及び層序図
第2図 南城市地形図	第21図 O・P8グリッド平面図及び層序図
第3図 指定範囲図及び周辺遺跡図	第22図 R・S8グリッド平面図及び層序図
第4図 発掘グリッド設定図	第23図 P5グリッド平面図及び層序図
第5図 H19遺物実測図	第24図 P10グリッド平面図及び層序図
第6図 G2・3グリッド平面図及び層序図	第25図 H22遺物実測図①
第7図 H20遺物実測図①	第26図 H22遺物実測図②
第8図 H20遺物実測図②	第27図 D2・3グリッド平面図及び層序図
第9図 F2・3グリッド平面図及び層序図	第28図 I2グリッド平面図及び層序図
第10図 F2・3グリッド遺物実測図	第29図 P2・3グリッド平面図及び層序図
第11図 F・G8グリッド平面図及び層序図	第30図 H23遺物実測図
第12図 F・G8グリッド遺物実測図①	第31図 H・I10・11グリッド平面図及び層序図
第13図 F・G8グリッド遺物実測図②	第32図 J10・11グリッド平面図及び層序図
第14図 F・G14グリッド層序図	第33図 H・I・J12グリッド平面図及び層序図
第15図 F・G13グリッド、F14グリッド東側、 G14グリッド西・北側平面図及び層序図	第34図 建物跡プラン想定図
第16図 F・G13・14グリッド遺物実測図①	第35図 H23・24遺物実測図①
第17図 F・G13・14グリッド遺物実測図②	第36図 H23・24遺物実測図②
第18図 F10・11グリッド平面図及び層序図	第37図 H23・24遺物実測図③
第19図 I8グリッド平面図及び層序図	第38図 H23・24遺物実測図④
	第39図 堀切状遺構周辺平面図

第40図 堀切トレンチ1平面図及び層序図
第41図 堀切トレンチ2平面図及び層序図
第42図 堀切トレンチ3平面図及び層序図
第43図 堀切トレンチ4平面図及び層序図

第44図 堀切トレンチ5平面図及び層序図
第45図 H25遺物実測図①
第46図 H25遺物実測図②

挿表目次

第1表 H19実測遺物観察表
第2表 H20実測遺物観察表①
第3表 H20実測遺物観察表②
第4表 H20実測遺物観察表③
第5表 H21実測遺物観察表①
第6表 H21実測遺物観察表②
第7表 H21実測遺物観察表③
第8表 H21実測遺物観察表④
第9表 H21実測遺物観察表⑤
第10表 H22実測遺物観察表①

第11表 H22実測遺物観察表②
第12表 H23実測遺物観察表
第13表 H23・24実測遺物観察表①
第14表 H23・24実測遺物観察表②
第15表 H23・24実測遺物観察表③
第16表 H23・24実測遺物観察表④
第17表 H25実測遺物観察表①
第18表 H25実測遺物観察表②
第19表 出土遺物一覧表

挿図版目次

図版1. TP1完掘状況(南側より)
図版2. TP2調査区設定状況(北西側より)
図版3. TP2完掘状況(北側より)
図版4. TP3完掘状況(東側より)
図版5. TP4完掘状況(西側より)
図版6. TP5完掘状況(北東側より)
図版7. H19 出土遺物 表
図版8. H19 出土遺物 裏
図版9. G2・3グリッド完掘状況(南西側より)
図版10. G2グリッド完掘状況(北西側より)
図版11. G3グリッド完掘状況(南西側より)
図版12. G3グリッド完掘状況(北東側より)
図版13. H20 出土遺物① 表
図版14. H20 出土遺物① 裏
図版15. H20 出土遺物② 表
図版16. H20 出土遺物② 裏
図版17. H20 出土遺物③ 表

図版18. H20 出土遺物③ 裏
図版19. F2・3グリッド完掘状況(北東側より)
図版20. F2グリッド完掘状況(南東側より)
図版21. F3グリッド完掘状況(南西側より)
図版22. F2・3グリッド埋め戻し状況(北東側より)
図版23. F2・3グリッド出土遺物 表
図版24. F2・3グリッド出土遺物 裏
図版25. F・G8グリッド完掘状況(北西側より)
図版26. F8グリッド完掘状況(南西側より)
図版27. G8グリッド完掘状況(北西側より)
図版28. G8グリッド完掘状況(北東側より)
図版29. F・G8グリッド出土遺物① 表
図版30. F・G8グリッド出土遺物① 裏
図版31. F・G8グリッド出土遺物② 表
図版32. F・G8グリッド出土遺物② 裏

- 図版33. F・G13・14グリッド完掘状況(南西側より)
- 図版34. F13グリッド完掘状況(北東側より)
- 図版35. F13グリッド完掘状況(北西側より)
- 図版36. G13グリッド完掘状況(北東側より)
- 図版37. F・G13・14グリッド出土遺物① 表
- 図版38. F・G13・14グリッド出土遺物① 裏
- 図版39. F・G13・14グリッド出土遺物② 表
- 図版40. F・G13・14グリッド出土遺物② 裏
- 図版41. F10グリッド完掘状況(南西側より)
- 図版42. F11グリッド完掘状況(南西側より)
- 図版43. I8グリッド完掘状況(北東側より)
- 図版44. K8グリッド完掘状況(南東側より)
- 図版45. L8グリッド完掘状況(北東側より)
- 図版46. L8グリッド石積み状況(南東側より)
- 図版47. M8グリッド完掘状況(南東側より)
- 図版48. O・P8グリッド完掘状況(南東側より)
- 図版49. O8グリッド完掘状況(南東側より)
- 図版50. P8グリッド完掘状況(南西側より)
- 図版51. R8グリッド完掘状況(南西側より)
- 図版52. S8グリッド完掘状況(南西側より)
- 図版53. P5グリッド完掘状況(南西側より)
- 図版54. P10グリッド完掘状況(南西側より)
- 図版55. H22 出土遺物① 表
- 図版56. H22 出土遺物① 裏
- 図版57. H22 出土遺物② 表
- 図版58. H22 出土遺物② 裏
- 図版59. D2グリッド設定状況(北東側より)
- 図版60. D3グリッド設定状況(南西側より)
- 図版61. D2グリッド完掘状況(北東側より)
- 図版62. D3グリッド完掘状況(南西側より)
- 図版63. I2グリッド完掘状況(北東側より)
- 図版64. I2グリッド完掘状況(南西側より)
- 図版65. I2グリッド石積み内側西セクション(南東側より)
- 図版66. I2グリッド完掘状況(北東側より)
- 図版67. P2・3グリッド完掘状況(北東側より)
- 図版68. P2・3グリッド完掘状況(南西側より)
- 図版69. H23 出土遺物 表
- 図版70. H23 出土遺物 裏
- 図版71. H・I・J10・11・12グリッド完掘状況(南西側より)
- 図版72. H・I・J10・11・12グリッド完掘状況(北西側より)
- 図版73. H11グリッド完掘状況
- 図版74. H10グリッド完掘状況
- 図版75. I11グリッド完掘状況
- 図版76. I10グリッド完掘状況
- 図版77. H12グリッド完掘状況
- 図版78. I12グリッド完掘状況
- 図版79. J12グリッド完掘状況
- 図版80. J11グリッド完掘状況
- 図版81. J10グリッド完掘状況
- 図版82. H・I・J10・11・12グリッド完掘状況
- 図版83. H23・24 出土遺物① 表
- 図版84. H23・24 出土遺物① 裏
- 図版85. H23・24 出土遺物② 表
- 図版86. H23・24 出土遺物② 裏
- 図版87. H23・24 出土遺物③ 表
- 図版88. H23・24 出土遺物③ 裏
- 図版89. H23・24 出土遺物④ 表
- 図版90. H23・24 出土遺物④ 裏
- 図版91. H23・24 出土遺物⑤ 表
- 図版92. H23・24 出土遺物⑤ 裏
- 図版93. 堀切トレンチ1完掘状況(南西側より)
- 図版94. 堀切トレンチ1完掘状況(北東側より)
- 図版95. 堀切トレンチ1完掘状況(東側より)
- 図版96. 堀切トレンチ1完掘状況(西側より)
- 図版97. 堀切トレンチ2完掘状況(東側より)
- 図版98. 堀切トレンチ2完掘状況(西側より)
- 図版99. 堀切トレンチ2石積み下部東セクション
- 図版100. 堀切トレンチ3完掘状況(北側より)
- 図版101. 堀切トレンチ3完掘状況(南東側より)

- 図版102. 堀切トレンチ3石積み下部
南セクション
- 図版103. 堀切トレンチ3石積み下部
北セクション
- 図版104. 堀切トレンチ4完掘状況(北東側より)
- 図版105. 堀切トレンチ4完掘状況(南東側より)
- 図版106. 堀切トレンチ4石積み下部
北セクション
- 図版107. 堀切トレンチ4石積み下部
南セクション
- 図版108. 堀切トレンチ5石列検出状況
(東側より)
- 図版109. 堀切トレンチ5完掘状況(西側より)
- 図版110. 堀切トレンチ5完掘状況(東側より)
- 図版111. H25 出土遺物① 表
- 図版112. H25 出土遺物① 裏
- 図版113. H25 出土遺物② 表
- 図版114. H25 出土遺物② 裏
- 図版115. H25 出土遺物③ 表
- 図版116. H25 出土遺物③ 裏

第1章 発掘調査の前に

第1節 遺跡の位置と環境

1. 南城市の位置と環境(第1・2図)

本市は沖縄島南部の東側に位置し、県庁所在地である那覇市から南東に約12km、北緯26°11′55″～26°07′34″、東経127°55′41″～127°43′46″に位置しており、東西18km、南北8km、面積49.70km²を測る。市の北西側に与那原町・南風原町、南西側に八重瀬町が接しており、北東側から南側にかけては中城湾及び太平洋に面している。市内には都市部と各地域間とを結ぶ主要道路として、海岸線に沿って走る国道331号線を始め、県道77号線、48号線、86号線などが整備されている。

地形を概観すると、東部及び南部の海岸部の後方には、なだらかな傾斜地と比較的急峻な岩石の断崖部がみられ、海岸線に沿うように豊かな緑に覆われた琉球石灰岩の丘陵地がひろがっている。北東部の丘陵地から西部にかけては漸次傾斜していき、60m～100m前後の小丘状の地形が断続的に所在する平野部となっている。

地質は、第三紀島尻層群のシルト質泥岩、砂岩、凝灰岩、第四紀琉球層群の砂質石灰岩、石灰岩、第四紀の沖積層、海浜堆積層からなる。石灰岩丘陵には琉球層群、海岸に面した地に沖積層、琉球層群を取り巻くように第三紀島尻層群が分布する。土壌は、石灰岩丘陵上にはその風化土である赤土の島尻マージ、それ以外には島尻層群が広く覆っている。島尻層群は粘性があり、肥沃で、不透水性の粘土質であるため保水性に富んでおり、農業地として自然環境に恵まれた地域である。

石灰岩丘陵からの湧水は豊富であり、井泉は国指定の仲村渠樋川をはじめ垣花樋川、知念大川など数多く点在し、河川は主要な河川である饒波川、報得川、宮平川、雄樋川、長堂川等が市域内を源流とし、南西側へと流れている。

海洋は、太平洋の面した外洋部に発達したサンゴ礁やイノーが南側から北側の富祖崎付近まで続き、中城湾に面した佐敷海岸では干潟と砂嘴が展開している。

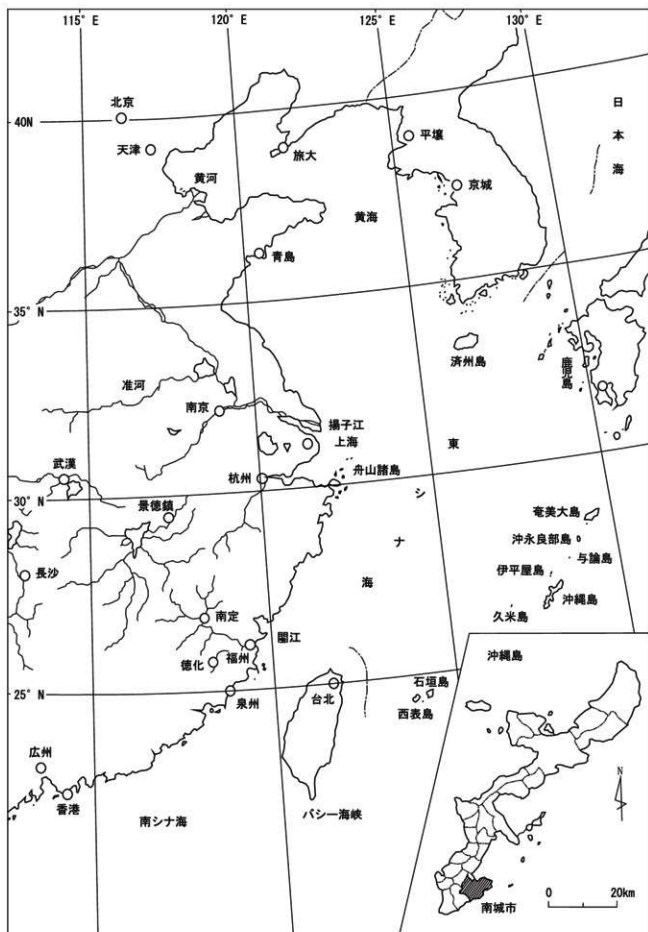
気候は亜熱帯性で、年平均気温は22.4℃と四季を通じて温暖である。雨量は春から夏にかけて多く、梅雨明けとともに、暑い夏が続く。年間降水量は1,800～2,500mm程である。

集落は、東部の海岸線の比較的平地に形成され、南部では石灰岩台地上に集落が形成されている。それらの頂上部には広い台地がひろがり、集落や耕地が形成されている。

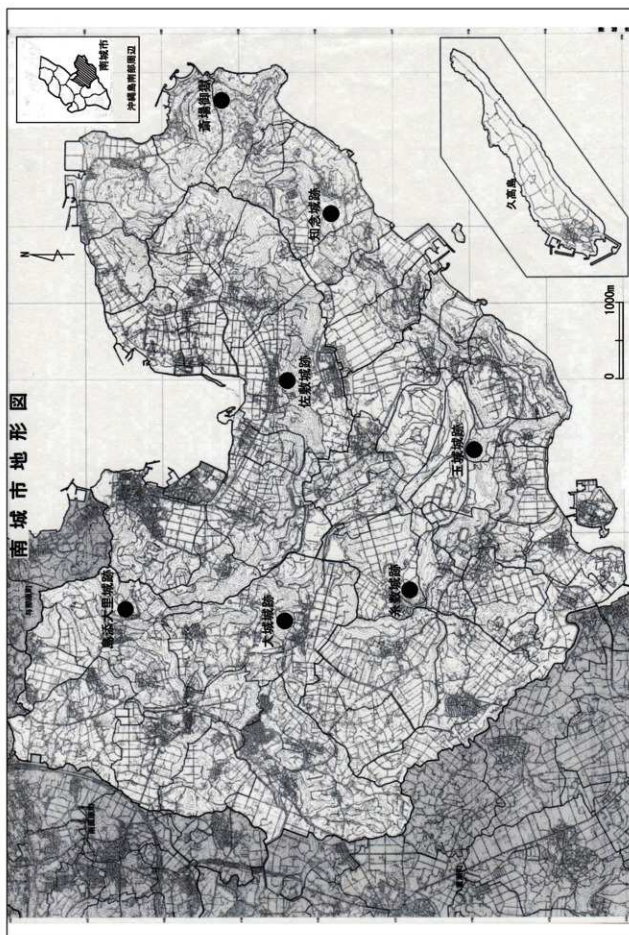
歴史的には、近世の頃から琉球王府により東方(東四間切)として一つの行政区とされた。また、首里王府が国家安泰と五穀豊穡を祈願するため行われた「東御廻り」に関する多くの拝所が残る場所として、古くから関わりの深い地域である。

「東御廻り」に代表されるように本市においては、琉球開闢の神話が数多く残っている。神の島である久高島をはじめ、ヤハラツカサ・浜川御嶽・ミントングスクなどの拝所、稲作発祥の伝承を残す受水・走水や知念大川(井泉)が現存しており、現在も多くの人が本市を訪れている。

一方、本市の歴史を遺跡からたどってみると、先史時代(沖縄貝塚時代)の遺跡が45か所、グスク時代の遺跡が71か所、近世以降の遺跡が33か所確認されており、周知の遺跡総数は149か所である。



第1図 南城市位置図



第2図 南城市地形図

旧石器時代は、宇前川に所在するサキタリ洞遺跡が、近年の発掘調査において、旧石器時代頃から弥生時代まで続く遺跡であったとされている。

縄文時代早・前期は、雄樋川沿いの堀川遺跡や宇和川原平洞穴遺跡、真手川原遺跡、武芸洞遺跡が挙げられる。真手川原遺跡の主体はグスク時代であるが、その下層から、縄文時代前期(沖縄貝塚時代早期)の条痕文土器をはじめ、縄文時代中期の仲泊式土器、古我知原式土器が出土している。また、武芸洞遺跡からは墓が確認されている。

つづく縄文時代後期(沖縄貝塚時代前期)は、16か所の遺跡が確認されている。石灰岩地帯を中心に百名第2貝塚、熱田原貝塚、久高貝塚などが各地に分布する、久高島などの離島にまで人々が生活を始め、先史時代における交流が活発化する時期である。中でも熱田原貝塚は当時期を代表する遺跡であり、獣形貝製品など豊富な装飾品が出土している。

縄文時代晩期(沖縄貝塚時代中期)は6か所の遺跡が確認されている。遺跡は石灰岩台地上に所在しており、下上原遺跡や中山小祿原遺跡が確認されている。

弥生時代から平安時代(沖縄貝塚時代後期)は29か所の遺跡が確認されている。この時期の発掘調査報告書を調べた新田重清氏によれば、当時期の遺跡の1割近くが南城市で確認されているとのことである。

グスク時代は島添大里城跡や玉城城跡などのほか、集落遺跡や生産遺跡など関連遺跡が確認され、遺跡数では本市において最も多い。また、各地の主要なグスクを中心に集落遺跡が近接して確認されることから、グスクと集落が一体的に発展したことが想定されている。

各地にグスクが割拠するグスク時代の本市は、佐敷小按司(尚巴志)の登場によって大きな展開を迎える。尚巴志は、三山統一にあたり島添大里城跡を急襲して倒し、それを足がかりとして三山を統一、琉球王国を立てた。

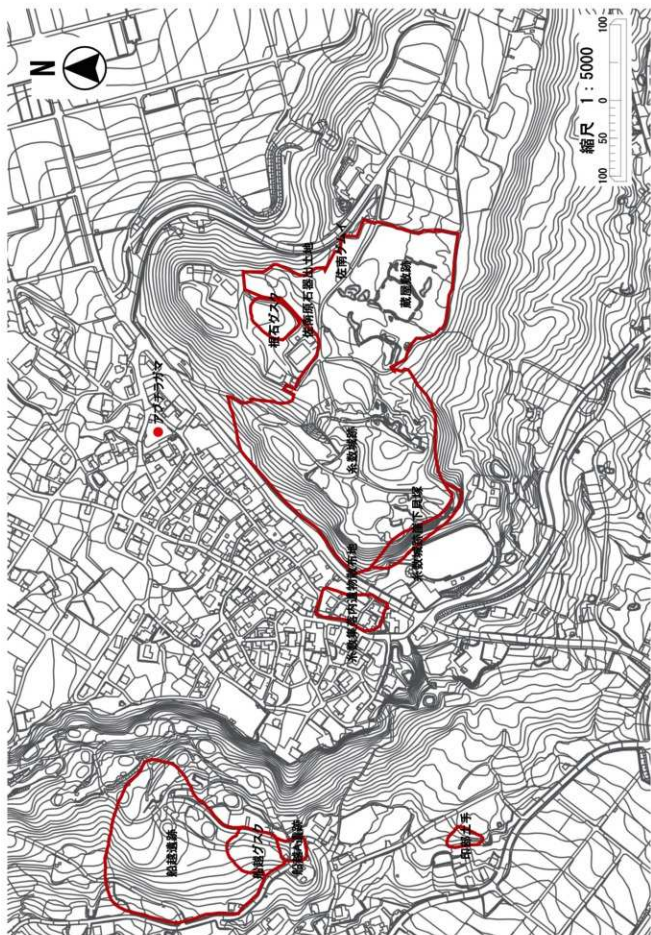
その後、第一尚氏王統第5代尚金福の死後、世子の志魯と王弟の布里による王位継承をめぐる争いが起こり、布里は首里を追われ玉城宇当山村(現當山)に隠棲したと伝わる。また、第7代尚徳即位時には、兄弟で、第6代尚泰久の子らが首里から移り住んでいる。

本市域は、先述のとおり琉球王府時代を通して、王府が直轄する祭祀儀礼と密接に結びついており、国王が巡幸する「東御廻り」や琉球最高のノロである聞得大君の就任式である「御新下り」が行われた。現在では「東御廻り」が民間にまで広がっており、市内に点在する拝所へ多くの人々が訪れている。

近世期は、地方行政の区画として間切制度が用いられており、本市は大里・佐敷・知念・玉城の4つの間切に区分されており、明治の村制施行に伴って、大里村・佐敷村・知念村・玉城村となった。

太平洋戦争末期の沖縄戦時下には、旧日本軍によって陣地化が進み、眺望の良い島添大里城跡や糸数城跡には戦闘指揮所やトーチカなどが構築された。

戦後、避難収容所があった知念地区に知念市が誕生したが、避難民の帰村による人口減少のため、自然解消した。1946年10月には米国軍政府が玉城村に設置され、沖縄民政府も石川から佐敷村新里の高台に移転し、以後、約3年間、沖縄の政治と行政の中心地となった。1949年与那原、上与那原、板良敷、大見武が大里村より分離し与那原町が発足、1972年に日本国に復帰、1980年に佐敷村が町制に移行、2006年1月に4町村が合併し、南城市が誕生した。



第3図 指定範囲図及び周辺遺跡図

2. 糸数城跡(蔵屋敷地区)周辺の位置と環境 (第3図)

糸数城跡が所在する玉城地区を地形的にみると、地区中央部から標高約 150m前後の琉球石灰岩台地がおおよそ東西に、知念半島の東端まで延びており、南東側は海岸部まで舌状地がせりだしている。南西側にかけては八重瀬町との境を流れる雄樋川流域まで緩やかな傾斜地となっており、比較的なだらかな平坦地の多い沖縄島南部にあつて、全般的に起伏の激しい地形を呈している。

地質は、全体的に琉球石灰岩もしくはその風化土である島尻マージ層によって被覆されており、一部地域に島尻層群が分布している。

海岸は、奥武島やその対岸地域には内湾一転石城、八重瀬町港川から知念半島にかけてサンゴ礁域(イノー)がひろがるほか、雄樋川の河口部は、かつては干潟・マングローブ域と想定され、多種多様な魚貝類の生息地であつたと考えられる。

本市を東西に横断する標高 120～150mの琉球石灰岩丘陵上には、北西端に島添大里城跡が位置し、そこから東に大城城跡、糸数城跡、玉城城跡、垣花城跡、佐敷城跡、知念城跡などが点在し、東端には、世界遺産「斎場御嶽」が所在する。また、稲福遺跡、垣花遺跡などのグスク時代の遺跡も台地上や尾根筋、あるいは中腹に数多く形成されている。

本市に所在するグスク群の中で、糸数城跡は上述の石灰岩丘陵上のほぼ中央部、南城市玉城字糸数小字竹の口原及び西赤津川原に所在している。今回報告する調査地区については、本城である糸数城跡の東側にひろがる平場であり、通称蔵屋敷跡と呼ばれている地域である。当地域は、平成 8 年 1 月 22 日に史跡糸数城跡に追加指定された地域であり、糸数城跡が使用されていたときの集落がひろがっていたとされている。

地形は、若干の起伏がみられるものの、概ね平坦面を呈しており、広い平場には石積みで囲まれた 2 つの区域がみられる。この 2 つの石積みで囲まれた区域が蔵屋敷跡であつたと考えられていることから、当地域を蔵屋敷地区と呼称している。

蔵屋敷地区の南側は崖状をなしており、北側には根石グスクや佐南グマイが、糸数城跡を望む西側には堀切状遺構が所在する。根石グスクは、糸数城跡築城前の居城であつたとされており、堀切状遺構は糸数城跡と平坦面でつながる本地域からの防御のために築かれた可能性が指摘されている。

本地域は、糸数城跡が城本来の機能が失われた後から戦後までの間、集落地が現在の糸数城跡の西側丘陵中腹に移転した後は、畑地として使用されていた。また、堀切状遺構については、別称として戦車壕とも呼ばれており、太平洋戦争時には米軍の戦車の侵入を防ぐために改めて造成されたとの証言も残っている。

糸数城跡は、糸数城跡の東側に所在する玉城城跡に居られた玉城按司が玉城城跡を守るため、西の守りとして、次男を大城城跡(大里字大城)に、三男を糸数城跡に派遣して築城させたといわれている。糸数城跡は東側を除き、三方を断崖又は急斜面で、特に南側は最も高い断崖となっている。東側は、糸数城跡から玉城城跡までの間の丘陵上がほぼ平坦地となっており、視界が良く、両グスクを遮るものはみられない。そのため、糸数城跡では防備の弱い東側に高い城壁を築くとともに、正門も父のグスクである玉城城跡に向けて、両グスクの連携を図っていたと考えられる。その糸数城跡の東側に隣接する形で蔵

屋敷跡のひろがる平場があり、佐南村と呼ばれていた。この地には先述した糸数城跡築城までの居城であったとされる根石グスクが所在しており、その麓に佐南村の村立ての祖霊を祀る拝所である「根石城之嶽」がみられる。「根石城之嶽」は現在でも糸数集落が村落祭祀にあたって最初に拝む拝所であることから、糸数集落の最高の聖地といえ、本地域が現在の糸数集落の基礎をなしていたことが確認できる。

『中山世鑑』や『中山世譜』によれば、玉城王の治世下に国が三つに分かれ、大里按司が大里・佐敷・知念・玉城・具志頭・東風平・島尻・喜屋武・摩文仁・真壁・兼城・豊見城を討ち、自らを山南王と称したことから、玉城城跡からの西の守りとして築城された糸数城跡は、その役割を担うことができず、大里按司の侵攻を許し、三山鼎立の頃には山南王の支配下にあったと推測される。また、伝承によると兵頭役の「比嘉ウチョー」という人物が、グスク増築のため、国頭へ資材を購入しに行った際の際を狙って、上間按司が大軍を率いて攻撃してきたため落城したという話が伝わっている。

蔵屋敷地域には、サナン・クルーク・イトウカジ・メーバル・シキナ・アゲンロ・ヤカンなどの血縁小集落が存在しており、それらを糸数按司が東ね、グスクの城下集落としていた。落城後、城跡が使用されなくなった後も集落はそのまま営まれていたが、明治19年の天然痘の流行により多くの人が命を落としたため、当地域を放棄し、現在の城跡西側に転居したといわれている。

第2節 発掘調査の経緯

1. 調査に至る経緯

糸数城跡は、昭和34年12月16日、琉球政府文化財保護委員会による指定を受け、そして日本復帰に伴って、昭和47年5月15日に日本国の史跡指定を受けている。昭和51年度に国指定史跡保存管理計画書を策定し、土地公有化事業を実施した。昭和61年度より保存修理事業を実施している。平成2年度には「糸数城跡及び周辺整備構想(基本構想)」を策定。平成8年1月22日に本地区を含む地域は、国指定史跡「糸数城跡」の関連遺跡として、追加指定された。その後、平成8年度～11年度にかけて、土地公有化のための国庫補助事業を受けて土地を取得。平成11年度3月に「糸数城跡整備実施計画」を策定し、昭和61年度から実施されている糸数城跡の保存修理事業の第1期終了予定年度にあわせて、第2期保存修理事業予定地である本地区の事前確認調査が文化庁の国庫補助を受けて実施された。

実施にあたっての現況は、本地区が耕作放棄地となっていたため雑草が生い茂っているほか、古タイヤなどの不法投棄があったことから、平成16年度より2年間をかけて発掘調査に向けた伐採事業を実施し、併せて平成17年度に本地区の平面測量を実施した。翌年の平成18年度～25年度まで発掘調査が行われ、併行して資料整理事業が平成18年度～28年度まで行われた。

本地区の調査は、あくまでも史跡整備に伴う事前確認のための発掘調査であることから、本地区全体の面的な発掘調査を行わず、トレンチ又はグリッド掘りなどの点による内容確認のための調査を行っている。検出された遺構についても同様に完掘することなく、最小限の調査にとどめた。

本報告書は、上記発掘調査に基づいた成果を記したものである。

2. 調査体制

本報告書に係る平成18年度～平成28年度の調査体制は、下記のとおりである。

事業主体	南城市教育委員会	教育長	高嶺 朝男 (平成18年度～平成25年度)
			山城 馨 (平成26年度～平成28年度)
事業所管	生涯学習課	課長	伊敷元一郎 (平成18年度)
	文化課	課長	長嶺 清喜 (平成19年度～平成21年度)
			伊敷元一郎 (平成22年度)
			森田 松吉 (平成23・24年度)
			大城 秀子 (平成25年度～平成27年度)
			親川 義一 (平成28年度)
	生涯学習課	副参事	長嶺 清喜 (平成18年度)
		係長	大城 秀子 (平成18年度)
	文化課	係長	大城 秀子 (平成19年度～平成22年度)
			上原 忠敬 (平成22年度～平成24年度)
			仲里久美子 (平成23年度～平成25年度)

		知念 準 (平成 25・26 年度)
		山里 昌次 (平成 27・28 年度)
調査担当	主任主事	西平 剛 (平成 18～20 年度)
	主任主事	勢理客智也 (平成 21 年度～27 年度)
	主 事	津波 陽子 (平成 28 年度)
調査補助	主 査	山里 昌次 (平成 19 年度～22 年度)
	主任主事	勢理客宣子 (平成 21 年度～24 年度)
	主任主事	喜瀬斗志也 (平成 23 年度～26 年度)
事務補助	主 事	国吉 尚 (平成 20 年度～22 年度)
	主 事	佐久本太樹 (平成 23 年度～25 年度)
	主 事	横山 幸平 (平成 28 年度)

調査助言 當間嗣一、池田榮史、上原静、明石善彦、手塚直樹、三木靖、山本信夫、坂井秀弥、上田秀夫、西平剛、山里昌次(敬称略)

文化庁・沖縄県文化財課・沖縄県立埋蔵文化財センター職員

糸数城跡・玉城城跡保存整備委員会委員、南城市文化財保護審議会委員

糸数区の方々、琉球大学法文学部考古学研究室

発掘作業員

平成 18 年度 當山エミ子、當山政子、當山昌子、大城米子、中村智子、城間裕子、嶺井幸恵、山田雅幸

平成 19 年度 當山エミ子、當山政子、當山昌子、大城米子、中村智子、城間裕子、嶺井幸恵、中村稔、新城啓八

平成 20 年度 當山エミ子、當山政子、當山昌子、大城米子、山田雅幸、中村稔、仲里美花、玉那覇清勇、長友政次、我喜屋千秋

平成 21 年度 當山政子、當山昌子、大城米子、山田雅幸、中村稔、玉那覇清勇、長友政次、糸数カヨ子、稲福正、嶺井猛、知念光枝

平成 22 年度 當山政子、當山昌子、大城米子、中村稔、長友政次、糸数カヨ子、稲福正、嶺井猛、知念光枝、新垣久美子、宮崎雅臣、玉那覇美野、新垣一也、新垣瑠美子

平成 23 年度 當山昌子、中村稔、糸数カヨ子、稲福正、嶺井猛、知念光枝、新垣久美子、玉那覇美野、玉寄まりこ、玉城光子、幸地美千子、渡名喜元和、城間信芳、上原辰也、平山健二、島袋未樹、南勇輔、新垣ちひろ、久永雅宏、横手伸太郎、秋元めい、早田晴樹、津波陽子、保久盛陽

平成 24 年度 糸数カヨ子、稲福正、新垣久美子、玉那覇美野、幸地美千子、渡名喜元和、城間信芳、上原辰也、平山健二、外間正子、津波古充昭、新垣瑠美子、親川睦美

平成 25 年度 新垣久美子、玉那覇美野、幸地美千子、城間信芳、有光智彦、大城正夫、有光綾子、

我那覇昭子

資料整理作業員

- 平成 18 年度 城間裕子、嶺井幸恵、中村智子
平成 19 年度 城間裕子、嶺井幸恵
平成 20 年度 仲里美花
平成 21 年度 知念怜華、小波津由加里、福地直美、山田雅幸
平成 22 年度 外間由紀乃
平成 23 年度 外間由紀乃、小松ミサエ、當眞朝子、幸地麻美、仲里美智代、屋良久美子、當山和美、宮城友美、仲里千秋、當山満子、白鳥和代、金城美樹、前原奈満、兼本弘子、目島直美、仲村好美
平成 24 年度 幸地麻美、仲里千秋、當山満子、白鳥和代、金城美樹、前原奈満、目島直美、金城理恵、上原美穂
平成 25 年度 當山満子、白鳥和代、金城理恵、宮城友美、屋良久美子、當山和美、糸数千里
平成 26 年度 當山満子、白鳥和代、金城理恵、宮城友美、糸数千里、我那覇美野、小波津由加里、大村由美子、上原美穂
平成 27 年度 當山満子、糸数千里、小波津由加里、大村由美子、仲里梨絵、比嘉登美子
平成 28 年度 糸数千里、小波津由加里、仲里梨絵、比嘉登美子、目島直美

3. 調査の経過

先述のとおり、本地区は糸数城跡の保存整備事業の一環で行われており、平成 16・17 年度にかけて雑草木伐採と不法投棄物の撤去が行われた。発掘調査は、糸数城跡の城壁修復工事と併行する形で、平成 18 年度より行われている。

平成 18 年度

昨年度まで実施した伐採等作業後に繁茂した調査地区の草刈りを実施するとともに、蔵屋敷跡とされる 2 つの屋敷囲い石積みがみられ、西側を A 地区、東側を B 地区と仮称した。本年度は、A 地区の石積みに覆いかぶさる雑草や土砂の除去を行う。除去後、石積みの南北端角部に 2 か所のテストピットを設定し、発掘調査を行った。テストピットからの遺物の検出はなかった。

また、昨年度作成した平面測量図を使用して、調査地区の石積みに沿うように 5m×5m の範囲でグリッド設定を行なった。

平成 19 年度

昨年度にひきつづき、調査地区の伐採後、B 地区の雑草や土砂の除去を行った後、石積み内側に接して東西に各 1 か所、また A 地区の北側石積みの外側に 1 か所、合計 3 か所のテストピットを設定し、発掘調査を行った。テストピットから出土した遺物については、発掘終了後に整理作業を行った。

平成 20 年度

A 地区の北側中央石積み部分に 2 つの調査区(F2・3・G2・3 グリッド、F13・14・G13・14 グリッド)を設定し、発掘調査を行った。石積み部分は浅く、すぐに石積みが露出した。石積みの内側にはグスク時代の包含層のほか、小穴が数基検出された。発掘終了後、出土遺物の整理作業を行った。

平成 21 年度

A 地区で発掘調査を実施した。F・G8 グリッドのほか、昨年度に引き続き、F2・3 グリッド、F・G13 グリッド、隣接する G14 を L 字にし、G14 に接する F14 の東側・南北辺の発掘調査を実施し、G13 グリッドから南側石積みの外側の確認を行った。本発掘区からは地山面より、グスク時代相当期と考えられる複数の小穴が検出されたほか、戦後の耕作の際に使用した重機のバケット痕が多く検出されている。出土した遺物については、発掘調査中並び終了後、整理作業を行った。

平成 22 年度

本年度は、A・B 地区における層序の内容を確認することを第一義として、調査グリッドを 2m×5m の範囲で設定し、発掘調査を行った。F5・6 グリッド、F10・11 グリッドではグリッド東側を、P5 グリッド、P8 グリッド、P10 グリッドではグリッド西側を、B・C・D8 グリッド、I8 グリッド、K・L・M8 グリッド、O8 グリッド、R・S8 グリッドではグリッド南側の調査を行った。昨年度同様、重機のバケット痕が多く検出されたほか、小穴などグスク時代相当期と考えられる遺構も検出されている。小片ながら多数の遺物も出土しており、発掘調査中並び終了後、出土遺物の整理作業を行った。

平成 23 年度

A 地区の南東側石積みに隣接する形で発掘区(H・I10・11 グリッド)を設定したほか、北側石積みを横断する形で、D3 グリッドと D2 グリッド一部では西側を、I2 グリッドでは東側を、B 地区の P2 グリッドと P3 グリッドの一部では西側を 2.5m の幅で発掘調査を行った。H・I10・11 グリッドからは多数の小穴が検出されており、建物跡のプランも想定されているほか、北側石積みの造成についての知見も得ている。小片ながら多数の遺物も出土しており、発掘調査中並び終了後、出土遺物の整理作業を行った。

平成 24 年度

昨年度調査を行った A 地区の H・I10・11 グリッドの東側と南側を L 字状にひろげた発掘区(J10・11・H・I・J12 グリッド)を設定し、発掘調査を行った。昨年度と同様に多数の小穴が検出されており、建物跡についてもその繋がりを確認することができた。小片ながら多数の遺物も出土しており、発掘調査中並び終了後、出土遺物の整理作業を行った。

平成 25 年度

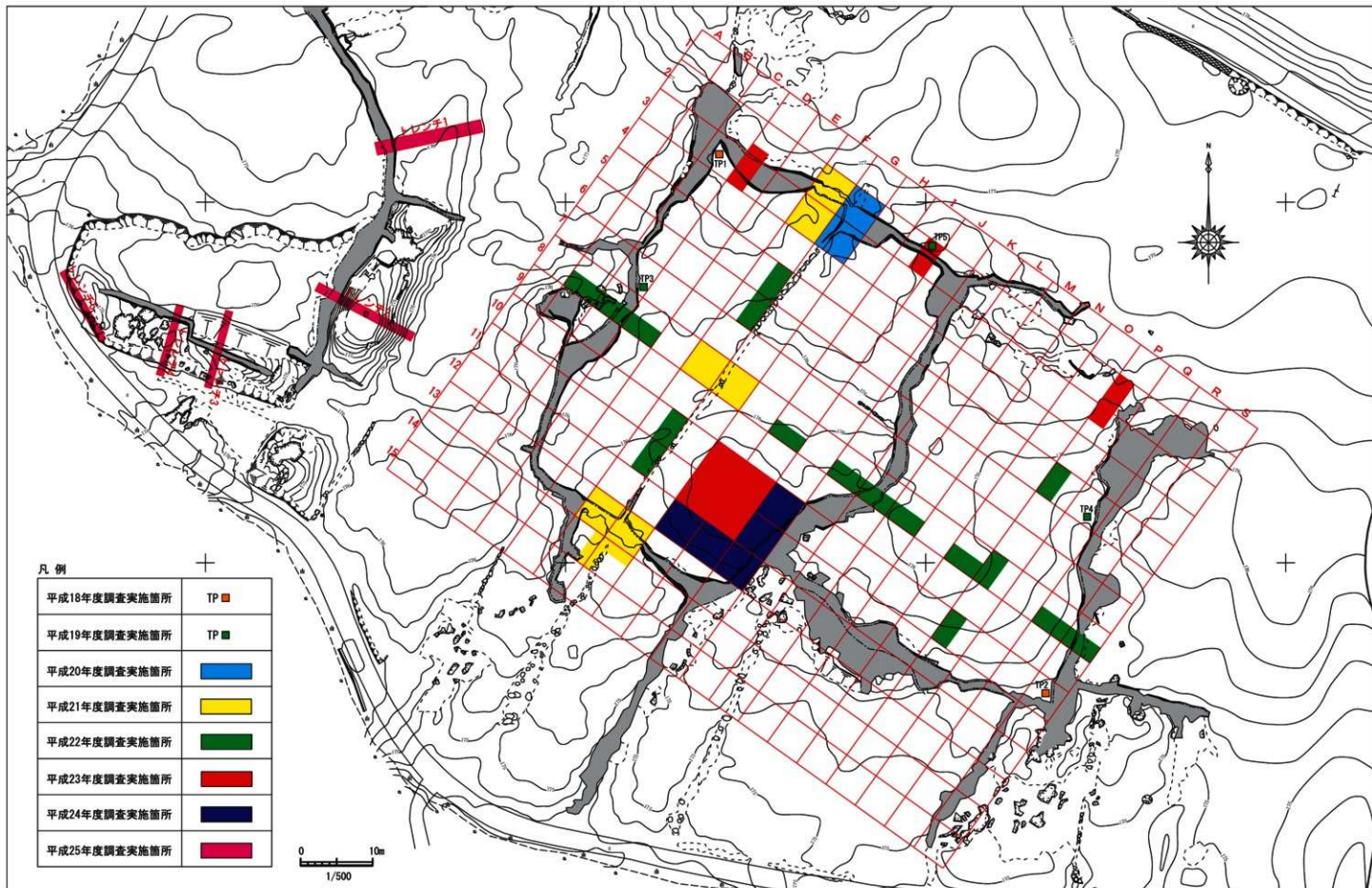
蔵屋敷跡の西側にみられる堀切状遺構に 5 つの発掘区を設定し、発掘調査を行った。一部で堀切の

掘り方が検出されたほか、小穴も検出されている。また、堀切上部に石積みが確認されており、そこを境として、層序が異なることを確認している。小片ながら多数の遺物も出土しており、発掘調査中並び終了後、出土遺物の整理作業を行った。

今回実施した本地区の発掘調査に関しては、今年度をもって終了した。

平成 26～28 年度

平成 18 年度～25 年度までに出土した遺物に関する整理作業(洗浄・注記・実測・拓本・トレース・写真撮影)を行ったほか、図面の整理作業を行った。その後、調査成果をまとめた原稿執筆や図版の版組を行い、報告書を作成した。



第4図 発掘グリッド設定図 (S=1/500)

第2章 発掘調査の成果

第1節 調査の方法

調査については、追加指定範囲が33,000㎡程に及ぶことから、蔵屋敷跡とされる石積みで囲まれた地区を中心に実施することとし、石積みに沿う形で5m×5mの範囲で発掘グリッドを設定した。発掘グリッドについては、北東方向から南西方向を縦軸、北西方向から南東方向を横軸とし、縦軸は算用数字、横軸はアルファベットをあて、南東杭を基準としてグリッド名とした。(第4図)

本地区での調査前の状況は、雑草が茂っていたため、はじめに伐採を行った後に発掘調査を実施していくこととした。また、蔵屋敷跡の石積み囲いについては、将来的な整備に向けて石積みに覆いかぶさる雑草や土砂を除去し、石積みから若干離れた形で前方に落ちている石材についても除去し、写真測量を実施した。発掘調査に関しては、石積みを壊さないことを前提としていることから、重機などの機械力は用いず、人力のみで地山面までの掘り下げを実施した。検出された遺構についても、今後の整備に向けた確認調査であることから、完掘することなく、最小限の掘り込みを一部の遺構で行っている。

第2節 基本的層序

本調査地における層序は、平成18年度～24年度まで実施した蔵屋敷跡の調査区に関しては、ほぼ層序が共通していることから、下記のとおり基本的な層序を記述する。

平成25年度に調査した堀切状遺構については、若干の相違があるため、後述の発掘の成果において別途記述する。

第1層：暗褐色土層。表土層であり、腐植土である。畑として使用されなくなった後に堆積した層。土質は弱いが、粘り気はみられた。遺物は、グスク時代相当期から近現代のものまでが含まれている。

第2層：にぶい黄褐色土層。褐色と橙色がマール状のまだら又はモザイク状に混ざっている層。土質は全体的にやわらかく、サラサラしているが、一部固く、粘り気のあるところもみられる。戦後の耕作土であり、バックホウなどの重機による戦後の攪乱層である。遺物は、グスク時代相当期から近現代のものまでが含まれている。

第3層：褐色土層。岩盤と岩盤の間に挟まれて検出される層であり、戦後の耕作による攪乱を受けていないプライマリな層と考えられる。土質は若干固めであり、粘り気も若干みられる。遺物は、あまりみられないが、グスク時代相当期から近世期のものが含まれている。

第4層：黒褐色土層。グスク時代相当期の包含層。地山面から検出された小穴などの覆土である。土質はしまりがあり、固く、粘り気みられる。遺物は、グスク時代相当期のものが含まれている。

第5層：黄褐色土層。地山漸移層。土質はしまりがあり、固く、粘り気みられる。遺物は、ほとんど含まれていない。

第6層：明褐色土層。地山層。土質はしまりがあり、固く、粘り気は強い。遺物は、含まれていない。

第3節 平成 18・19 年度の成果

平成 18・19 年度については、屋敷囲いの石積みの雑草や土砂を除去し、石積みの現況を確認する作業を行うとともに、今後の発掘調査の参考とするため、平成 18 年度には屋敷囲い石積みの南北の角に 2 か所、19 年度には石積みの中央側東西 2 か所及び石積みの北側外側に 1 か所のテストピットを設定し、調査を実施した。

1. 平成 18 年度

蔵屋敷地区において 2 か所のテストピットを設定し、発掘調査を実施した。

テストピット 1 は、A 地区の北側角の内側(C3 グリッド)にあたる。北側に延びる石積みは高く・厚く積み上げられており、石面も明瞭に残っているが、西側に延びる石積みは高いものの、崩れた状態であり、石面も明瞭ではなく、発掘地点においては岩盤に張りつくように残っていた。そこに 1m×1m 程のテストピットを設定した。

発掘を進めると、30cm 程で岩盤が検出された。層序に関しては、1・3・5 層が確認された。検出された岩盤は平坦面を呈しているものの、整形したものとの断定はできなかった。西側の石積みについては、崩れてはいるものの、石面を意識して積まれていることが確認された。北側・西側の石積みは、ともに 5 層から積み上げられており、建設時期については同一期であった可能性が高いと思われる。遺物の出土はみられなかった。

テストピット 2 は、テストピット 1 の対角で、B 地区の南側角の内側(S10 グリッド)にあたる。南側・東側に伸びる石積みは、高く積み上げられている。石面を意識して積まれているが、若干内側にはらんでおり、一様ではない。発掘地点については、東側が張り出した石積みが丸みを帯びて南側と接する地点であり、そこに 1m×1m 程の範囲で設定した。

発掘を進めると、岩盤が検出されたが、岩盤を挟んで西側と東側では層序に違いがみられた。西側の平場側は 1～3 層、東側の石積側は 1・3 層が確認された。石積み部分には戦後の耕作土が及んでいないことが分かった。東側石積みは崩れており、下部の石面は一定方向を向いていなかった。遺物の出土はみられなかった。

2. 平成 19 年度 (第 5 図 1～8、第 1 表 1～8、図版 7・8、1～8)

蔵屋敷地区において 3 か所のテストピットを設定し、発掘調査を実施した。

テストピット 3 は、A 地区西側石積みの中央内側(C6 グリッド)にあたる。ここは、石積みの外側が東側へと張り出していく場所であり、それに伴って内側に何らかの遺構があった可能性が考えられることから、1m×1m 程の範囲で設定した。

発掘を進めると、同じ石積みが連なるテストピット 1 同様に、30cm 程で岩盤が検出された。層序は 1・3 層が確認された。石積みについては、3 層面から積み上げられており、テストピット 1 とは若干の違いがみられた。遺物については、1 層からグスク土器 1 点、青磁 3 点、青花 1 点、褐釉陶器 2 点、3 層からグスク

土器 4 点、白磁 2 点、青磁 24 点(1)、青花 1 点、褐釉陶器 2 点、沖縄産陶器 2 点、焼土 1 点が出土している。

テストピット 4 は、B 地区東側石積みの中央やや北側の内側(Q5 グリッド)にあたる。この地点は、東側石積みが一度内側に屈曲したのちに、外側へと開いていく場所にあたる。ここに、1m×1m程の範囲で設定した。

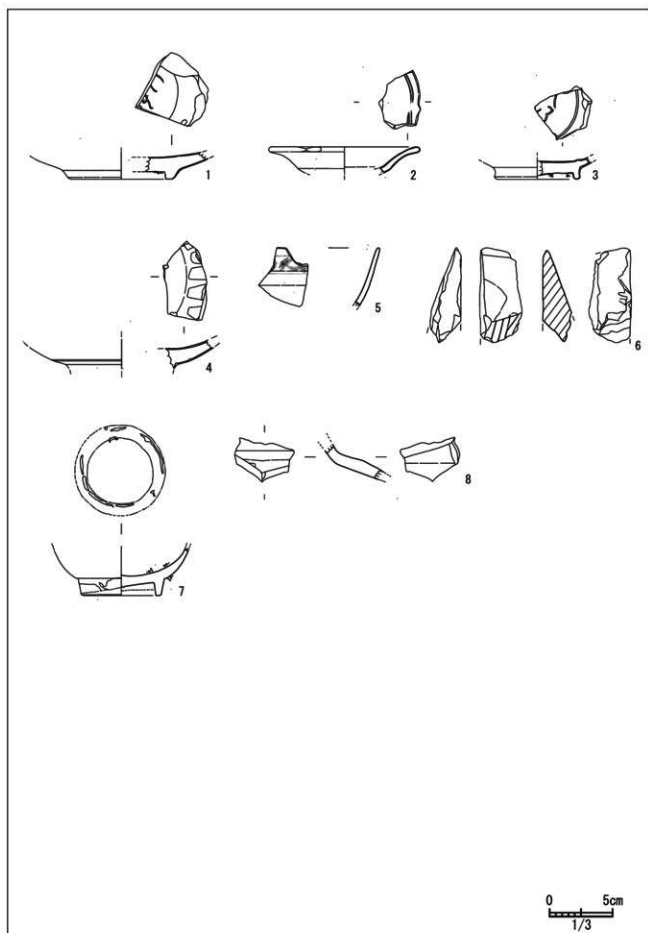
発掘を進めると、20cm 程で地山面が検出された。層序はテストピット 2 同様で、岩盤から平場側は 1～3 層、石積み側は 1・3 層が確認されている。遺構は検出されなかった。石積みについても 3 層から積み上げられていた。遺物については、1 層からグスク土器 1 点、青磁 4 点(2～4)、青花 1 点(5)、石製品 1 点(6)、沖縄産陶器 5 点(7)、2 層からグスク土器 3 点、青磁 3 点、褐釉陶器 3 点(8)、沖縄産陶器 1 点が出土している。

テストピット 5 は、A 地区北側石積みの東側の外側(I2 グリッド)にあたる。北側石積みの外側にあたり、内側とのつながりを確認するため、ここに 1m×1m程の範囲で設定した。

発掘をはじめ、1 層を剥ぎ、2 層を掘り進めたが、これまでと異なり、ある程度の深さまで掘っても岩盤や地山が検出されなかったことから、テストピットを半裁し、2 層をさらに掘り込み、60cm 程で地山面が検出された。石積み下部からも 2 層のみが確認されている。地山面での遺構の検出はみられず、地山まで掘り込んだ西側セクションには地山で凹凸が等間隔で確認されたことから、重機のバケット痕である可能性が考えられた。石積み外側は、内側より比高が高いことから、戦後の耕作によって土を盛られた可能性も考えられる。遺物については、1 層から褐釉陶器 1 点、焼土 1 点、2 層からグスク土器 2 点、青磁 1 点、沖縄産陶器 1 点、鉄片 1 点、焼土 1 点が出土している。

第1表 H19 実測遺物観察表

図/番号	出土区	出土層位	遺物種別	分類	観察事項	復原径 cm	胎土混入物	色調
第5図 1	TP3	2層	青磁盤底部	-	やや唇筒状の底部。畳付きの一部を軸剥ぎし、高台内の軸を蛇の目にかけている。また、高台が写り移り地有り。見込みに印花文と圈線が施される。	底:8.0	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(5Y7/1) 輪:オリーブ灰(10Y6/2)
第5図 2	TP4	1層	青磁皿口縁部	-	桜花皿。胴部から口縁部に外反している。内面口縁部には2～3条の圈線が施される。やや貫入あり。	口:11.4	黒色粒	胎:灰白(5Y7/1) 輪:オリーブ灰(2.5GY 6/1)
第5図 3	TP4	1層	青磁皿底部	-	見込みに圈線と印花文が施される。高台内の軸を蛇の目に剥いでいる。	底:6.5	黒色粒	胎:灰白(5Y8/1) 輪:明オリーブ灰(5GY 7/1)
第5図 4	TP4	1層	青磁盤底部	-	外縁部下半に圈線、内面胴部へラ線の遺存文が施される。	-	白色粒 黒色粒	胎:灰白(2.5Y7/2) 輪:オリーブ灰(10Y6/2)
第5図 5	TP4	1層	青花碗口縁部	-	直口口縁。外面がアバク状を呈す。内面もややアバク状。外面に2条の圈線と、その間に文様が施される。	-	黒色粒	胎:灰白(2.5Y7/1) 輪:灰白(5Y7/1)
第5図 6	TP4	1層	石製品	-	上部が欠けており、欠損部以外は全面砥面のハミ形石斧と考えられる。刃部に一部使用による欠けがみられる。	-	-	-
第5図 7	TP4	1層	沖縄産施釉陶器碗底部	-	高台部まで軸を掛け、高台から高台内は露胎している。見込みを蛇の目輪剥ぎしている。畳付きにアルミナを塗布しており、見込みに重ね焼きの痕がみられる。	底:6.0	黒色粒	胎:にぶい黄緑(10YR 6/4) 輪:外面黒釉(10YR 2/2)、内面黄緑(2.5Y 6/1)
第5図 8	TP4	2層	褐釉陶器蓋頸部	-	ロクロ成形。頸部が外側に「く」の字に屈曲する。	-	白色粒 褐色粒	胎:にぶい黄緑(10YR 6/3) 輪:黒褐色(10YR2/2)、内面に細かい白色粒が多量付着する。



第5図 H19遺物実測図(S=1/3)

第4節 平成 20 年度の成果

平成 20 年度は、A 地区の南北石積み部分に 2 か所の発掘区を設定した。

F2・3・G2・3 グリッドの 4 グリッドを北側石積みの確認のための発掘区とし、F13・14・G13・14 グリッドの 4 つのグリッドを南側石積みの確認のための発掘区として設定した。

1. F2・3、G2・3 グリッド発掘区 (第 6 図)

本地区は、A 地区北側石積みの中央部分、石積みが一部途切れる場所に位置する。石積みが途切れる場所には A 地区を縦に切るように低い石列が南側まで延びており、耕作地として使用していた際の境界を示していたと考えられる。石積みが途切れていることから、石積みの工法や建設時期を確認することができると考え、調査区として設定した。

発掘をはじめたところ、F2・3 グリッドについては、岩盤と想定された面が現れたため、現状で止め、G2・3 グリッドのみを掘り進めることとした。南北にのびる石列を検出したところで、赤土などが混じる 2 層が全面にひろがっていることが確認できたため、G2・3 グリッド東側に幅 1m のサブトレンチを設定し、層序の確認を行うとともに、G3 グリッドの西側 1m も同様にサブトレンチを入れ、石積みに接する面にいたったところで、石積みに沿って東側へ同様に掘り下げた。サブトレンチを地山面まで掘り下げたところ、小穴が多数検出されたことから、境界の石列部分を残して、両グリッドを地山面まで掘り下げ、遺構の検出を行った。遺構確認後、遺構の掘り下げを行い、完掘後、現場の図面作成並び写真撮影を行い、発掘を終了した。

F2・3 グリッドについては、本年度で調査を終了することができなかったことから、来年度改めて発掘することとし、現況のままブルーシートで保護した。

[1] 層序

層序は、第 2 節にて基本的層序を記しているのので、本節以降の層序については、その堆積状況について記したい。

本地区からは、6 枚の層が確認されている。

1 層: グリッド全体に薄くひろがっている。

2 層: グリッド全体に 20～25cm と厚く堆積している。石積みの外側(北側)が内側に比べると若干厚く堆積している。

3 層: G2 グリッドの石積み手前や G3 グリッドの岩盤検出の間など限定的に確認されている。

4 層: G2 グリッドの石積み部分の下部に落ち込むように確認されている。基本的には小穴など遺構の覆土と同一と考えられる。

5 層: G2 グリッド南側や G3 グリッド北側にひろがるほか、G2 グリッド石積み下層からも確認されている。

6 層: 地山層。

[2] 遺構

遺構には石積みと小穴が確認されている。

(1) 石積み

石積みは、屋敷囲いの北側石積みである。発掘前は途切れていたが、調査によって基礎部分と考えられる石積みが確認されている。このあたりの石積みが途切れている理由として、土地境界のため使用した石列の石材として使用されたことと、A 地区への進入口として開けた可能性が考えられる。石積みの下部にはグスク時代の包含層と考えられる4層が潜り込んでいることから、石積みの建設時期の考察の一助となるのではないかと考える。

(2) 小穴（第7図9～13、第2表9～13、図版13・14、9～13）

小穴は、18基検出されている。その大きさは、上場が35～40cm前後であり、深さは25cm前後である。深さについて後世の攪乱もあることから、当初の深さを示すとは限らない。小穴の覆土は黒褐色土であり、前述のとおり4層に該当するものと考えられる。遺物としては、P1よりグスク土器4点、青磁1点(10)、褐釉陶器2点(12)、土製品1点、焼土1点。P9より褐釉陶器1点。P10より緑釉陶器1点(13)。P11より焼土1点。P12より青磁1点(11)、磁器1点。P13より褐釉陶器1点。P15より焼土1点。小穴様より青磁2点(9)が出土している。

9は雷文の施された青磁碗、10は外反口縁碗、11は口折皿、12は褐釉壺の底部片。13は緑釉壺の胴部片であり、外面に線彫りの蓮弁文と花文が描かれている。

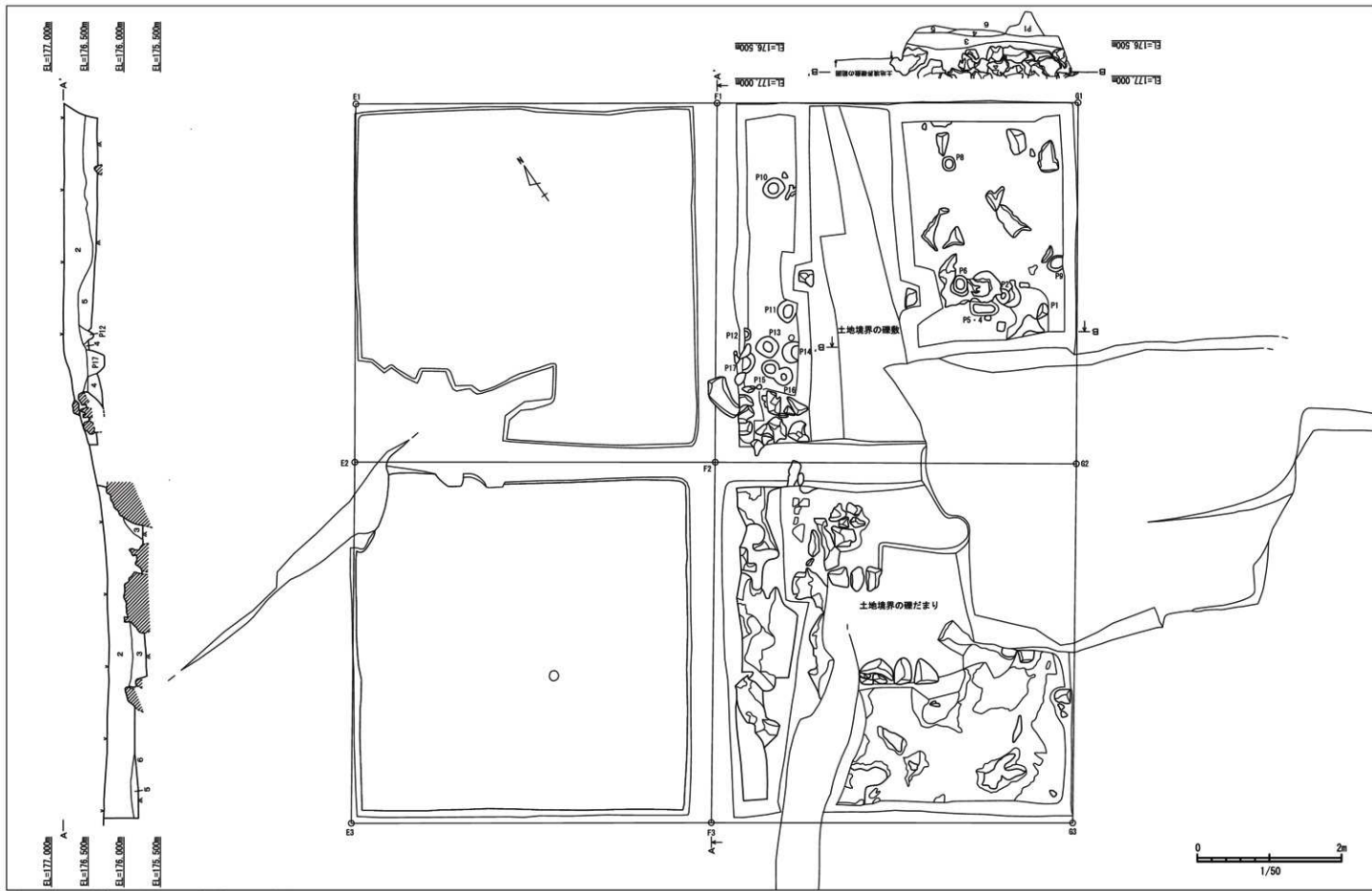
今回、検出された小穴は、石積みの下部付近からのみであったことから、戦後の耕作において、当地がその対象となっていなかったことを示すものと考えられ、石積みについては、グスク時代相当期から近世の間に建設された可能性が高いと考えられる。

[3] 遺物（第7・8図14～38、第2・3表14～38、図版13～16、14～38）

遺物としては、グスク時代相当期から近現代までのものが出土している。

1層からは、グスク土器97点(14、15)、カムイヤキ8点、白磁21点(16)、青磁187点(17～26)、青花21点(27～31)、染付1点、褐釉陶器59点(32)、緑釉陶器1点、陶器3点、石器・石材7点(33)、鉄製品1点、土製品1点、獣骨42点、魚骨4点、陸産貝1点、沖縄産陶器124点(34・35)、不明磁器6点、近現代磁器18点、赤瓦13点、鉄片3点、砲弾片3点、銭貨1点、炭化物1点、焼土100点が出土している。

14は鍋形土器の口縁片であり、口縁部に瘤状把手が貼り付けられている。15は丸みを帯びた底部片である。16は白磁の高台片であり、高台や内底部は露胎となっている。17～21は碗であり、17は蓮弁文、18は雷文が施されている。19・20は底部片、21は内面にスタンプによる文様が施されている。22・23は杯であり、22は口折口縁であり、外面に蓮弁文が施されている。23は底部片。24・25は稜花皿の口縁片。26は盤であり、鐔口縁を呈している。27～29は青花の碗。30は稜花口縁の大皿、31は底面片であり、十字花文が描かれている。32は壺の口縁片であり、口縁は折り曲げられ、口唇は平坦を呈する。33は扁平片刃の石斧片である。34・35は沖縄産陶器の碗底部片であり、34は灰釉、35は褐釉が施されている。



第6図 62・3グリッド平面図及び層序図(S=1/50)

2層からは、グスク土器1点、白磁1点、青磁6点、褐釉陶器2点、石材1点、沖縄産陶器4点、焼土6点が出土している。

また、隣接するH3グリッドからは、グスク土器1点、白磁1点、青磁6点(36)、褐釉陶器2点(37)、石器1点(38)、沖縄産陶器2点、焼土6点が表採されている。

36は青磁皿の底部片。37は褐釉陶器の平底底部片であり、露胎を呈している。38は使用により大きく割欠した敲き石片である。

2. F13・14、G13・14グリッド発掘区

本地区は、上記発掘区の反対側、南側石積みを跨ぐ形で設定した。本地区も上記発掘区同様に石積みを取り除かれ、根石と考えられる部分が石列のように連なり、境界のために設置されたと考えられる石列が石積みの外側まで延びていた。

発掘は、上記発掘区の調査を優先したため、1層途中まで掘り進めた段階でいったん止め、それ以降の調査については来年度に実施することとして終了した。そのため、遺構を検出するまでにはいならず、遺物については調査を終えた1層のみについて記述する。

[1] 遺物（第8図39～54、第3・4表39～54、図版17・18. 39～54）

遺物としては、グスク時代相当期から近現代までのものが出土している。

グスク土器14点(39)、カムイヤキ4点(40)、白磁11点(41～43)、青磁30点(44～47)、青花14点(48～52)、褐釉陶器20点(53)、磁器(中国産)1点、瓦器1点、石器・石材6点(54)、獣骨1点、海産貝1点、沖縄産陶器35点、近現代磁器2点、赤瓦1点、鉄片1点、焼土16点が出土している。

39は底部片であり、丸みをもって立ち上げている。40は肩部片であり、ナデ肩を呈する。

41・42は白磁碗の底部片、43は皿の底部片であり、ともに高台は露胎を呈し、内面釉掻きが行われている。

44～46は青磁碗の底部片であり、44は見込みが一段低く、平坦面に仕上げられている。45はやや高めの高台片、46は底面が厚く作られている。47は青磁皿の底部片である。

48・49は青花碗の口縁片であり、48は外反口縁、49は直口口縁であり、両面に文様が描かれている。50は高台が欠けた底部片であり、外面には竹櫛様の文様が描かれている。51は腰部片であり、内面に圏線がみられる。52は碁笥底の青花皿であり、見込みに文様がみられる。

53は褐釉壺の平底底部片であり、外面に一部釉垂れがみられる。

54は全面が滑らかであることから、砥石として使用されたものと考えられる。

そのほか、本年度の表採資料として、青磁1点、沖縄産陶器1点、石材1点、近現代磁器1点、焼土1点が出土している。

第2表 H20 実測遺物観察表①

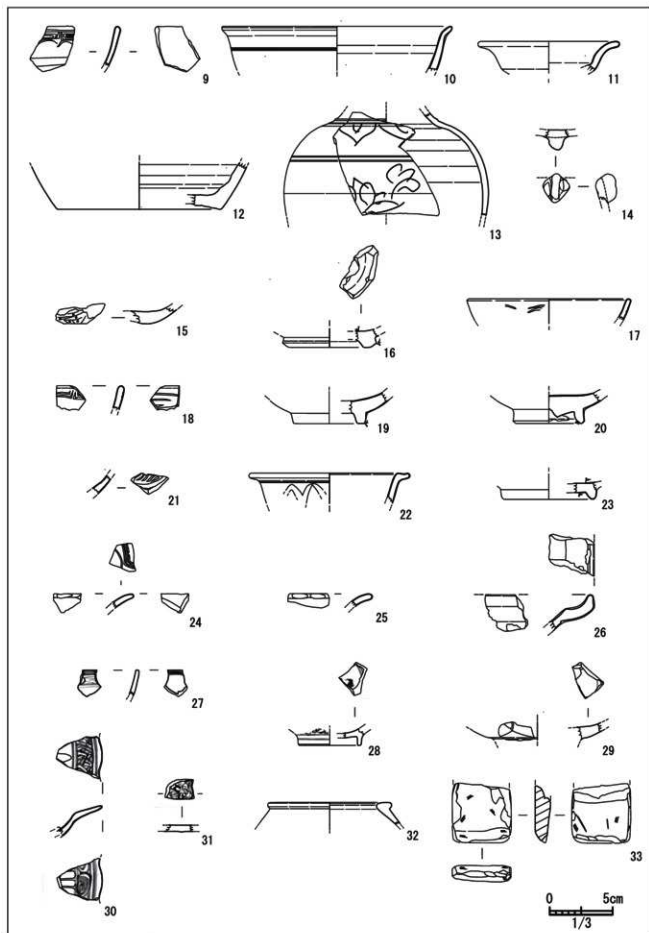
図/ 番号	出土区	出土 層位	遺物 種別	分類	観察事項	復原径 cm	胎土 混入物	色 調
第7図 9	G2	柱穴様 pit	青磁碗 口縁部	上CII	直口口縁、外面口縁部に雷文帯が施されている。内外面の一部に粗い貫入有り。	-	褐色粒	胎:灰白(N7/) 軸:オリーブ灰(10Y6/2)
第7図 10	G2	pit1	青磁碗 口縁部	上DII	外反口縁。外面胴部に2条の圓線有り。口唇部に砂目詰みのような跡がみられる。	口:18.0	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5Y7/1) 軸:明オリーブ灰(5GY7/1)
第7図 11	G2	pit12	青磁皿 口縁部	-	外反口縁皿。腰部が屈曲している。内外面無文。やや貫入有り。	口:10.6	白色粒 黒色粒 褐色粒	胎:灰白(5Y8/1) 軸:灰白(10Y7/2)
第7図 12	G2	pit1	褐釉陶器 壺 底部	-	底面からの立ち上がりは直線的で、外側に開き気味に胴部へ移行する。内面はロクロ成形。外面へラ状工具による凹線調整。底部が上げ底状で外面に砂目地有り。	底:12.8	黒色粒 褐色粒	胎:にぶい橙(2.5YR8/3) 軸:梅灰(7.5YR5/1)
第7図 13	G2	pit10	緑釉陶器 壺 胴部	-	玉垂巻瓶。頸部と胴部にそれぞれ2条の圓線有り。肩部に如意頭文、胴部に宝相華文草文が縁飾。	-	褐色粒	胎:浅黄橙(10YR8/4) 軸:綠釉。外面のみに、白化粧の上から施す。
第7図 14	G3	1層	グスク土器 口縁部	-	銅形土器の口縁部。口縁部に楕円把手を嵌め込んでいる。指圧やナデで粗めに仕上げている。	-	黒色粒	胎:にぶい橙(7.5YR7/4)
第7図 15	G2	1層	グスク土器 底部	底I	内外面ナデ。やや上げ底気になると思われる。	-	黒色粒 褐色粒 透明釉	胎:にぶい黄橙(10YR6/3)
第7図 16	G3	1層	白磁 底部	-	外面高台を斜めに削っている。見込みと唇付きから高台内が露出している。	底:6.6	黒色粒 褐色粒	胎:浅黄橙(10YR8/3) 軸:灰オリーブ(5Y6/2)
第7図 17	G2	1層	青磁碗 口縁部	-	外面に蓮弁文を施す。貫入有り。	口:12.6	褐色粒	胎:灰白(2.5Y8/2) 軸:灰白(10GY7/2)
第7図 18	G3	1層	青磁碗 口縁部	上CII	直口口縁。外面口縁部に雷文帯、内面に花文が施されている。貫入有り。	-	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5Y8/2) 軸:灰オリーブ(7.5Y6/2)
第7図 19	G3	1層	青磁碗 底部	-	唇付きから高台内が露出しているが、一部に暗褐色の軸が付着。細い貫入有り。	底:5.6	褐色粒	胎:灰白(5Y7/1) 軸:緑灰(7.5GY5/1)
第7図 20	G3	1層	青磁碗 底部	-	高台内側から高台内の一部に粗い軸が掛かる。高台内中央部の角が粗い仕上げ。貫入有り。	底:5.2	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5YR/1) 軸:オリーブ灰(10Y6/2)
第7図 21	G2	1層	青磁碗 胴部	-	内面に葉のような文様の一部分が描かれている。	-	黒色粒	胎:灰白(5YR8/2) 軸:オリーブ灰(10Y6/2)
第7図 22	G2	1層	青磁杯 口縁部	-	蹄端部を若干狭み、凹み。外面胴部に片切彫による無縁蓮弁文が施される。	口:12.4	褐色粒	胎:灰白(2.5Y7/1) 軸:オリーブ灰(10Y6/2)
第7図 23	G3	1層	青磁杯 底部	-	見込み、高台内輪割ぎ。見込みの輪割ぎと施軸の境目に圓線有り。	底:7.0	黒色粒	胎:淡橙(5YR8/4) 軸:にぶい黄橙(10YR6/4)
第7図 24	G3	1層	青磁皿 口縁部	-	口縁部が外反する桜花皿。内面に雷文帯のような文様が描かれている。やや貫入有り。	-	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(10YR7/1) 軸:オリーブ灰(10Y6/2)
第7図 25	G2	1層	青磁皿 口縁部	-	口縁外反皿。口縁部が桜花。	-	褐色粒	胎:灰白(10YR8/2) 軸:明緑灰(7.5GY8/1)
第7図 26	G2	1層	青磁盤 口縁部	-	口縁部を「く」の字状に外反させ、さらに端部を上へ引き上げている。	-	褐色粒	胎:灰白(2.5YR/1) 軸:オリーブ灰(10YR5/2)
第7図 27	G2	1層	青花碗 口縁部	-	内面口唇部に圓線が施り、外面に文様の一部分が描かれている。	-	褐色粒	胎:淡黄(2.5YR/3) 軸:灰白(7.5YR/1)

第3表 H20 実測遺物観察表②

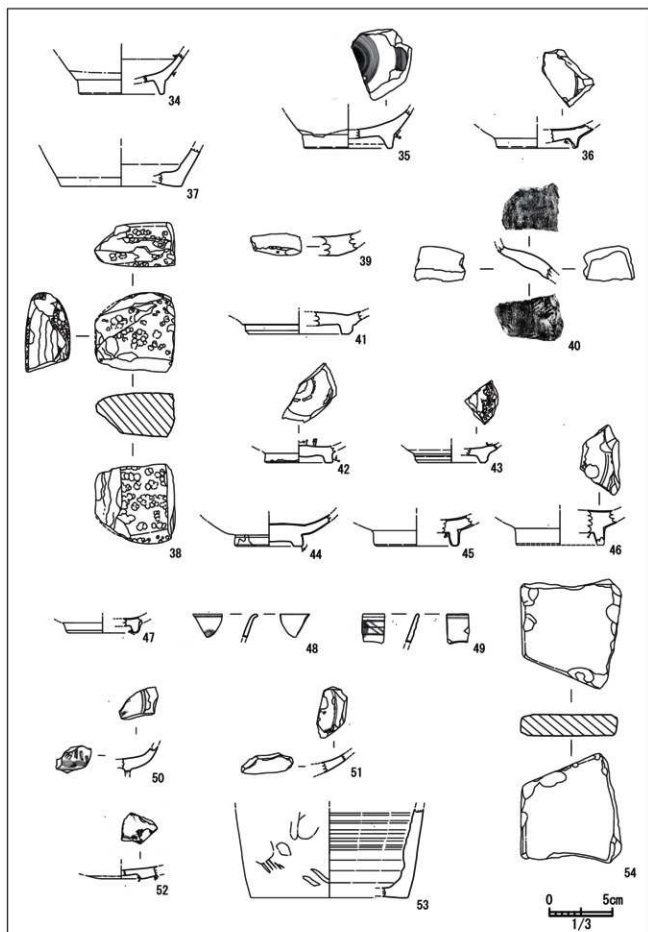
図/ 番号	出土区	出土 層位	遺物 種別	分類	観察事項	復原径 cm	胎土 混入物	色 調
第7図 28	G3	1層	青花碗 底部	-	見込みに2条の圈線と、文様の一部、外面胴部に草花文、高台に2条の圈線が引かれている。	底:4.8	褐色粒	胎:浅黄橙(10YR8/3) 釉:灰白(5GY8/1)
第7図 29	F2	1層	青花碗 底部	-	見込みに圈線有り。	-	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(5Y8/1) 釉:灰オリーブ(10Y8/1)
第7図 30	F3	1層	青花皿 口縁部	-	縁折れの大皿(盤)。口縁部は破花、内面に菱形文、外面に渦巻文が引かれており、内外面胴部にヘラ削りの遺棄文が施される。	-	褐色粒	胎:灰白(2.5YR/2) 釉:明緑灰(10GY8/1)
第7図 31	G2	1層	青花皿 底部	-	見込みに十字花文?が描かれている。	-	褐色粒	胎:淡黄(2.5YR/3) 釉:灰白(10Y8/1)
第7図 32	G2	1層	褐釉陶器 壺 口縁部	-	頸部から内傾する口縁。口縁部は外へ粘土を折り曲げて肥厚させる。口唇平坦。	口:8.4	白色粒 褐色粒	胎:にぶい橙(2.5 YR 6/4) 釉:灰黄褐(10YR4/2)
第7図 33	G2	1層	石斧	-	ノミ形石斧。上部を欠損している。全体的に磨き有り。刃部に使用による欠けがみられる。	-	-	-
第8図 34	G3	1層	沖罫窯 灰釉 碗 底部	-	内面胴部、外面高台脇まで施釉。高台断面三角形を呈す。見込みに重ね焼き時の砂目が見える。	底:6.4	黒色粒 褐色粒	胎:にぶい黄橙(10YR 7/4) 釉:灰オリーブ(5Y5/2)
第8図 35	G2	1層	沖罫窯 施釉陶器 碗 底部	-	外面は高台際まで掛し掛けによる施釉。見込みに鉄粒で丸文と圈線が施される。高台から最付きには白土を塗布している。	底:6.6	褐色粒	胎:灰白(2.5Y8/1) 釉:灰オリーブ(5Y6/2)
第8図 36	H3	1層	青磁皿 底部	-	高台が軸刺ぎされている。見込みに圈線有り。	底:6.0	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(7.5Y8/1) 釉:オリーブ灰(10Y6/2)
第8図 37	H3	1層	褐釉陶器 壺 底部	-	ロクロ成形。底部からの立ち上がりは外側に開き気味の胴部へ移行する。外面底部に砂目地有り。	底:9.6	白色粒 黒色粒 褐色粒	胎:灰(5Y5/1)
第8図 38	H3	1層	磁石	-	敲き痕有り。使用による欠けがみられる。	-	-	-
第8図 39	G14	1層	グスク土器 底部	-	外面ナデ。底部からの立ち上がりは、丸みを持ちながら胴部へ移行する。	-	白色粒 黒色粒 透明粒	胎:外面橙(2.5YR6/6)、 内面にぶい橙(10 YR 6/3)
第8図 40	G13	1層	カムイキ 肩部	-	内面ナデ調整。下部に当て具痕有り。外面ナデ。上部にヘラ状工具による凹み調整がみられる。	-	褐色粒	胎:灰(10YR6/1)、芯部 にぶい赤褐(2.5YR5/3) 釉:明緑灰(7.5GY8/1)
第8図 41	F13	1層	白磁碗 底部	-	ロクロ成形。内外面磨削しており、焼成の際に一部明赤褐色に着色している。高台外面を斜めに削り、角を持つ。	底:8.0	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5YR/2) 釉:2mm程度の灰白(10 Y7/2)の釉が見込みに1カ所付着している。
第8図 42	F14	1層	白磁碗 底部	-	見込みに蛇の目軸刺ぎ。外面は、最付きから高台内が露胎する。高台内を括る段の跡が見える。高台外面を斜めに削る。貫入有り。	底:5.2	白色粒 黒色粒	胎:明黄橙(10YR6/6) 釉:灰白(10Y7/2)
第8図 43	G13	1層	白磁皿 底部	新・磨	外面は露胎している。見込みに軸刺ぎされているが、僅かに軸が残り、重ね焼き時の砂が付着している。高台外面を斜めに削る。	底:5.4	褐色粒	胎:灰白(2.5Y8/1) 釉:灰オリーブ(5Y6/2)
第8図 44	F14	1層	青磁碗 底部	-	釉が薄く高台の仕上げが粗雑。最付きから高台内が露胎する。高台内の削りがやや浅く、最付きが平坦である。	底:5.2	褐色粒	胎:灰オリーブ(7.5 Y 6/2) 釉:灰オリーブ(5Y6/2)
第8図 45	G14	1層	青磁碗 底部	-	高台が円軸刺ぎまたは蛇の目軸刺ぎがみられる。	底:6.2	褐色粒	胎:灰白(5Y8/1) 釉:オリーブ灰(10Y6/2)
第8図 46	F14	1層	青磁碗 底部	-	見込みに圈線有り。高台内を蛇の目軸刺ぎしている。高台内側に軸刺ぎ有り。	-	白色粒 黒色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5Y8/1) 釉:オリーブ灰(10Y5/2)

第4表 H20 実測遺物観察表③

図/ 番号	出土区	出土 層位	遺物 種別	分類	観察事項	復原径 cm	胎土 混入物	色調
第84図 47	F14	1層	青磁皿 底部	—	全面施釉後に、高台内側から高台内を軸刺ぎ。	底:5.5	褐色粒	胎:灰白(2.5YR/2) 軸:明緑灰(10GY7/1)
第84図 48	G14	1層	青花碗 口縁部	—	外反口縁部、内面口唇部に圈線が有り、外面にも圈線と文様の一部が描かれている。	—	褐色粒	胎:灰白(2.5YR/1) 軸:灰オリーブ(5Y6/2)
第84図 49	F14	1層	青花碗 口縁部	—	直口口縁。外面口縁部へラ脊あり、呉須の発色が鈍く、内外面ややアバタ状を呈す。	—	褐色粒	胎:灰白(2.5YR/2) 軸:灰白(10Y8/1)
第84図 50	F14	1層	青花碗 底部	—	見込みと高台縁にそれぞれ2条の圈線有り。見込みに印花文、外面胴部に文様の一部が描かれている。	—	黒色粒	胎:灰白(10YR8/2) 軸:明緑灰(7.5GY8/1)
第84図 51	G14	1層	青花碗 胴部	—	見込みに2条の圈線と文様の一部が描かれている。	—	褐色粒	胎:灰白(5YR/1) 軸:灰白(2.5YR/2)
第84図 52	F14	1層	青花皿 底部	—	基底部の底部、畳付き軸刺ぎ。見込みに文様の一部が描かれている。	底:3.4	褐色粒	胎:灰白(10YR8/2) 軸:明緑灰(7.5GY8/1)
第84図 53	F14	1層	褐釉陶器 底部	—	内面はクロコ成形、一部指ナデ有り。外面はへラ脊ありで、一部指押さえが残る。軸だれが有り、胴部下半内近まで施釉あり、外面底部に砂目地有り。	底:12.4	白色粒 黒色粒 褐色粒	胎:(10YR6/1)、芯部 はにぶい赤褐(2.5YR 5/3) 軸:灰褐(5YR4/2)
第84図 54	F14	1層	磁石?	—	4面積面、周辺に破損面や剥離痕有り、側面の一部に磨き有り。	—	—	—



第7图 H20遺物実測図①(S=1/3)



第8図 H20遺物実測図②(S=1/3)

第5節 平成 21 年度の成果

平成 21 年度は、昨年度に 1 層途中のみで終了した F2・3 グリッド、F・G13 と F・G14 グリッドの 2 つの発掘区と、今年度新たに 2 つの発掘区の間中に位置する F・G8 グリッドの 3 か所の発掘区を設定した。

1. F2・3 グリッド発掘区（第 9 図）

本地区は、昨年度調査を行った G2・3 グリッドに隣接し、北側石積みが両グリッドの中央部分に位置している。昨年度は表土層のみを発掘したところで終了したので、今年度改めて発掘調査を実施した。

発掘を進めるとすぐに 2 層が検出されたため、層序の確認のため、F2・3 グリッド東側にサブトレンチを設定し、地山面まで掘り進めたところ、地山と想定される土層で小穴が確認されたことから、地山面検出のため、グリッド全体を掘り進めた。両グリッドともに地山面には、重機のバケット痕が検出されたことから、石積み周辺まで戦後の耕作が行われたことが確認できた。また、F2 グリッドからは、東西に延びる溝状遺構が検出されたほか、両グリッドからは複数の小穴が検出された。

[1] 層序

層序は、5 枚の層が確認されている。

1 層：全面に薄くひろがるが、昨年度の調査において検出済みである。

2 層：全面に厚く堆積している。戦後の耕作土であることから、ほぼ全体に地山面上部までひろがっている。

3 層：岩盤が検出された F3 グリッドの北側から西側にひろがっている。

5 層：3 層同様、岩盤部分から検出されている。

6 層：地山層。

[2] 遺構

遺構には石積み、小穴、溝状遺構が確認されている。

(1) 石積み

石積みは、両グリッドの中央位置しており、石積み囲いの幅は最大で 1.6m 程、グリッド西側 40cm 程までは当初の石積みが残っているが、そこから西側 3m 程までは F2 グリッド側に 1・2 石程が連なる形で残っている。この石積みの下層には 2 層の耕作土がみられることから、南北に延びる石列同様、戦後の耕作の際の境界として、残存する石積みにあわせて、改めて設置されたものと考えられる。

残存石積みの高さは、最も高いところで 1.2m 程であるが、石面は整えられておらず、取り除いたときの現況が残ったものと考えられる。

石積み内からは、グスク土器の小片が 1 点出土している。

(2) 小穴 (第10図 55・56、第5表 55・56、図版 23・24、55・56)

小穴は、F2グリッドからは7基、F3グリッドからは7基検出されている。小穴の深さは20～25cm程を測り、その覆土は黒褐色土で、グスク時代の包含層である4層に該当するものと考えられる。F2グリッドから検出された小穴は、石積み側(南側)に集中していることから、これまでの調査と同様に重機による転地返しや石積み付近では行われていなかったことを示すものとなっている。F3グリッドでは、石積みから若干離れているものの、岩盤周辺より検出されていることから、重機の影響を受けなかったものと考えられる。今回検出された小穴と昨年度発掘調査したG2・3グリッドから検出された小穴とのつながりについては確認できず、建物跡のプランなどを想定することはできなかった。ただ、後述する溝状遺構の延長部に位置するG2グリッドからは小穴が集中して検出されており、何らかのつながりがみられる可能性がある。

遺物については、F2グリッドのP1より青磁1点、褐釉陶器1点、焼土2点。P2よりグスク土器4点、青磁1点、骨片1点、焼土3点。P4より骨片2点、焼土1点。P5より焼土9点。P6より焼土12点。P7より焼土2点、炭化物1点が出土している。

F3グリッドのP1よりグスク土器1点、青磁1点、土壁片?5点、焼土14点。P2よりグスク土器2点、焼土8点、炭化物1点。P3より焼土6点、炭化物2点。P4より土壁片?5点、焼土9点、炭化物3点。P5より土壁片?7点、鉄片1点、焼土23点、炭化物4点。P7よりグスク土器2点、白磁1点(55)、青磁2点(56)、褐釉陶器3点、石材1点、土壁片?21点、焼土4点が出土している。

55は白磁口禿碗の口縁片であり、56は青磁盤の口縁片である。盤の口縁は鏝縁状を呈し、端部は稜花を呈している。

(3) 溝状遺構

溝状遺構は、F2グリッドから東西に延びる形で検出された。その幅は1.5～0.7mを測り、東側が狭まっている。深さは地形的に南側から北側へと傾斜していることから、南側からだど20cm程、北側からだど10cm程となっている。底面は幅40cm程となっており、若干の丸みを帯びている。覆土は、2層の耕作土が入りこんでいるが、南北の上場ラインが重機のバケットで削られていることから、重機を使用した戦後の耕作以前には造成されたものと考えられる。

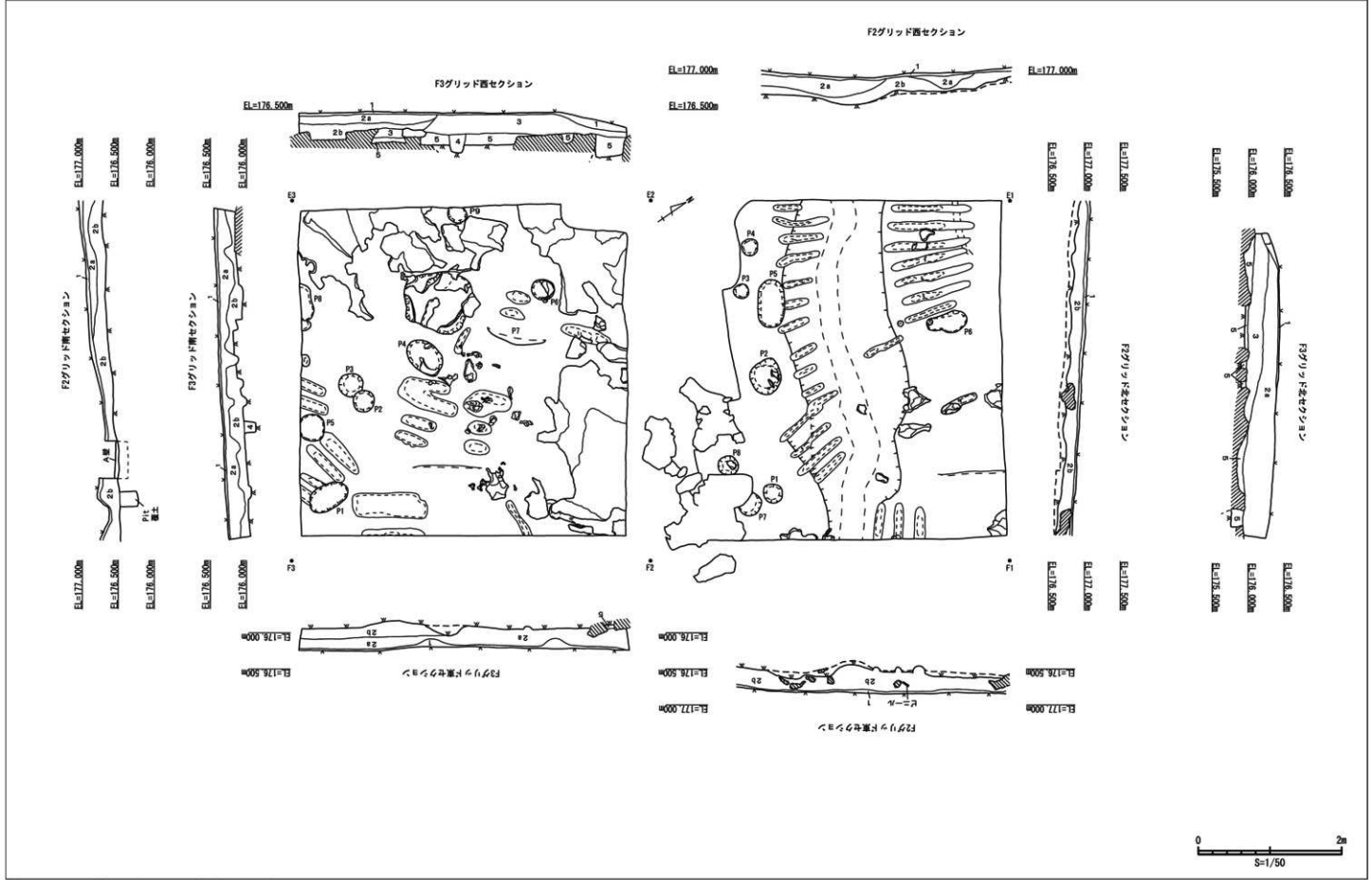
遺物については、当初より2層の掘り込みと判断したため、選別しておらず、確認できなかった。

[3] 遺物 (第10図 57～63、第5表 57～63、図版 23・24、57～63)

遺物は、グスク時代相当期から近現代までのものが出土している。

2層からは、グスク土器123点、カムイヤキ1点、白磁10点(57)、青磁233点(58～60)、青花24点、褐釉陶器67点(61)、東南アジア産陶器3点、黒釉陶器1点、緑釉陶器1点、磁器(中国産)1点、石器・石材11点(62)、滑石片1点、古銭1点(63)、獣骨3点、陸産貝2点、沖縄産陶器64点、近現代磁器4点、木片1点、土壁片?91点、赤瓦6点、鉄片28点、丸釘2点、現代遺物1点、ガラス瓶片1点、砲弾片4点、焼土569点、炭化物6点、不明2点が出土している。

57はベタ底を呈した白磁皿片であり、口禿皿の底部片と考えられる。



第9図 F2・3グリッド平面図及び層序図(S=1/50)

58 は青磁の高台が厚く成形された底部片であり、露胎を呈している。59 は盤の口縁片、鈔縁で端部は稜花を呈しており、P7 から出土した青磁盤の口縁片と同一片と考えられる。60 は青磁外反皿の口縁片。

61 は褐釉陶器の底部片であり、上げ底を呈し、露胎である。

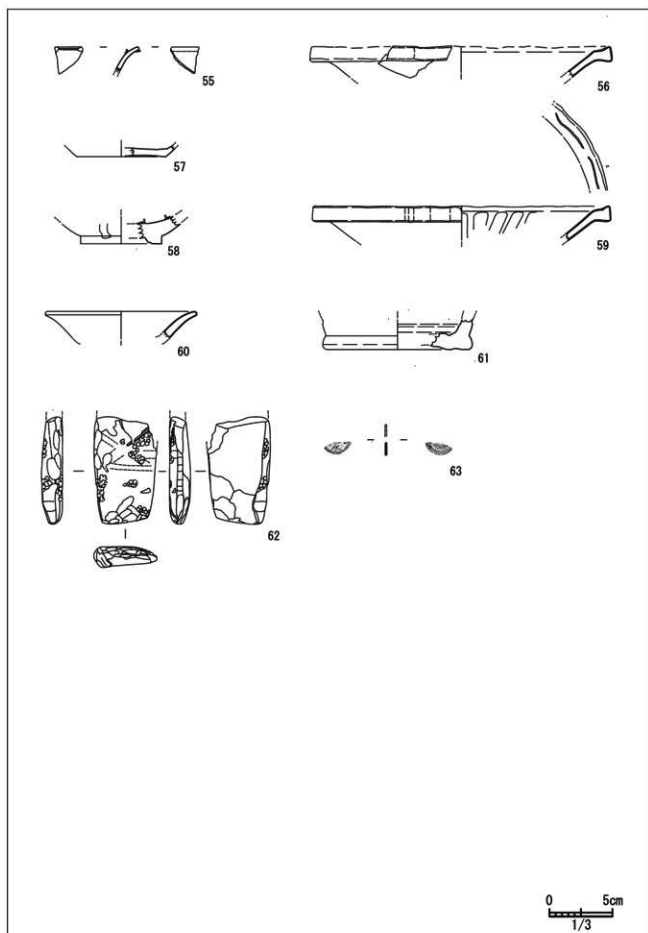
62 は石斧の刃部であり、裏面以外は丁寧に磨かれており、平滑である。刃部は使用により欠けている。

63 は寛永通宝の古銭片と考えられ、「永」字が明瞭に残っている。

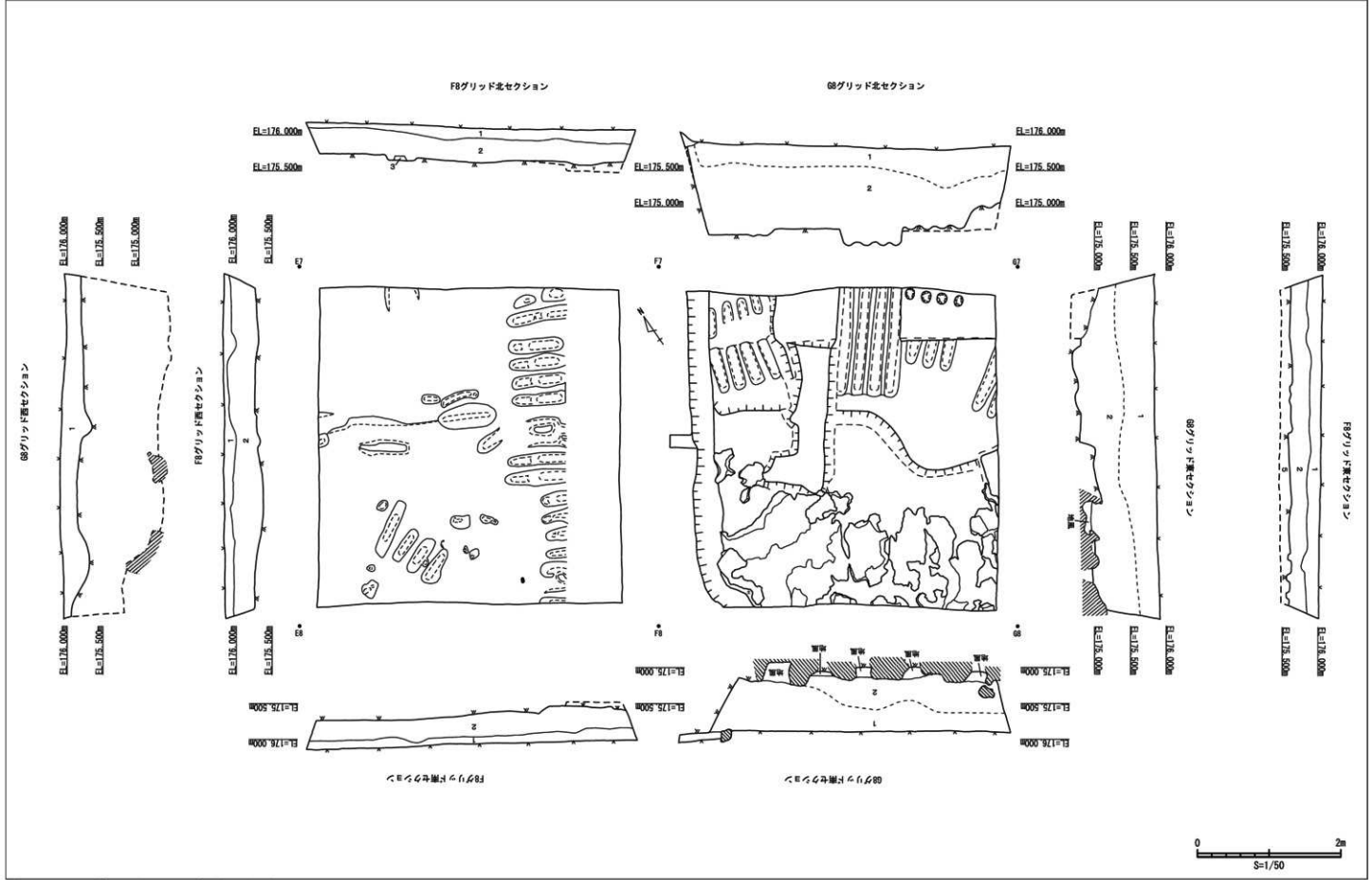
3層からは、グスク土器5点、青磁1点、褐釉陶器1点、沖繩産陶器1点、焼土7点が出土している。また、層序不明の遺物として、グスク土器5点、青磁7点、褐釉陶器4点、沖繩産陶器1点、焼土6点、鉄片3点が出土している。

第5表 H21 実測遺物観察表①

図/ 番号	出土区	出土 層位	遺物 種別	分類	観察事項	復原径 cm	胎土 混入物	色調
第10図 55	F3	Fk7	白磁碗 口縁部	—	内外面施釉。口縁内面上部は釉剥 ぎ。白磁口秀疵。焼成良好。	—	褐色粒 黒色粒	胎:灰白(2.5Y8/1) 釉:灰白(10Y8/1)
第10図 56	F3	Fk7	青磁盤 口縁部	—	鈔縁盤。高台から直線的に口縁に至 ると思われる。鈔縁は平坦で端部を稜 花とする。貫入有り。焼成良好。	口:22.6	白色粒 黒色粒 褐色粒	胎:橙(2.5YR6/6) 釉:オリーブ灰(10Y6/2)
第10図 57	F2	2層	白磁 口秀皿 底部	大宰府 IX類	ベタ底の比較的浅い皿。高台内がや やアノウ状を呈す。焼成良好。	底:7.0	褐色粒	胎:灰白(2.5Y8/1) 釉:灰白(7.5Y7/1)
第10図 58	F3	2層	青磁碗 底部	越州 窯系	内面見込み蛇の目輪刺ぎ。外面体下 半以内に施釉無したが、一部釉が掛 る。畳付きが平坦。焼成良好。	底:6.4	褐色粒	胎:淡黄(2.5Y8/3) 釉:灰オリーブ(7.5 Y 6/2)
第10図 59	F2	2層	青磁 稜花盤 口縁部	—	全面に施釉。高台から直線的に口縁 に至る。鈔縁は平坦で端部が稜花。内 面にへら削りの垂弁文。焼成良好。	口:23.5	黒色粒	胎:灰白(N8/) 釉:灰オリーブ(10Y6/2)
第10図 60	F3	2層	青磁皿 口縁部	—	外反口縁皿。全面に施釉。ロクロ成 形。内外無文。焼成良好。	口:12.0	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5Y7/1) 釉:オリーブ灰(10Y6/2)
第10図 61	F2	2層	褐釉陶器 壺 底部	—	上げ底状の底部。外面の底部から胴 部へ段がみられる。底部のみ光沢のある 粒が混入する。ナデによる粗い調整。 焼成不良。	底:11.4	白色粒 黒色粒 褐色粒	胎:灰白(2.3Y7/1)
第10図 62	F2	2層	石斧	—	上部を欠く。全体的にミガキ有り。刃 部に使用による欠け有り。	—	—	—
第10図 63	F3	2層	古銭	—	寛永通宝。	—	—	—



第10図 F2・3グリッド遺物実測図(S=1/3)



第11図 F・G8グリッド平面図及び層序図(S=1/50)

2. F・G8 グリッド発掘区 (第11図)

A地区の石積み囲いのほぼ中央部分、昨年度・本年度とあわせて、F・Gグリッドに設定した。

発掘を進めたが、他の2つの発掘区と同程度の深さまで掘り進めても地山面が検出されなかったことから、F8グリッドの南側にサブトレンチを設定し、層序の確認を行った。2層の耕作土を50cm程掘り進めたところで、地山面が検出されたことから、F8グリッド全体にひろげて地山面を検出した。遺構は検出されず、重機のバケット痕のみが多数検出された。F8グリッドの調査成果に基づいて、G8グリッドを4分割し、2層の耕作土をF8グリッドと同じ深さまで掘り進めたが、地山面を検出することができず、さらに掘り進めたところ、1～1.2m程で地山面が検出された。地山面からはF8グリッド同様、遺構の検出はできず、多数の重機のバケット痕のみが検出された。このことから、本発掘区は、戦後の重機使用による耕作土の転地返しによって大きく掘削されたものと考えられる。

[1] 層序

層序は、3枚の層が確認されている。

1層:全体に比べてやや厚く堆積している。

2層:重機による掘削が大規模に行われており、地山層が深くまで掘り込まれている地点も確認できた。

6層:地山層。

[2] 遺物 (第12・13図64～97、第6・7表64～97、図版29～32、64～97)

遺物は、グスク時代相当期から近現代までのものが出土している。

1層からは、グスク土器102点(64)、カムイヤキ5点、白磁11点、青磁125点、青花11点、褐釉陶器42点(65)、緑釉陶器2点、東南アジア産陶器5点、石器・石材14点(66)、獣骨3点、陸産貝4点、沖縄産陶器38点、近現代磁器2点、土壁片?2点、赤瓦3点、鉄片4点、丸釘1点、現代遺物1点、焼土97点、炭化物1点が出土している。

64はグスク土器の底面であり、外底面に木葉痕がみられる。

65は褐釉陶器の底部片であり、上げ底を呈し、内面には薄黄褐色釉が施され、外面は露胎を呈する。

66は使用により大半が欠失しているため、明確ではないが、端部が使用により欠けていることや薄手であることから、石斧として使用した可能性が考えられる。

2層からは、沖縄貝塚時代前期土器2点、グスク土器370点(67～69)、カムイヤキ10点(70・71)、白磁47点(72～75)、青磁430点(76～84)、青花69点(85)、褐釉陶器155点(86)、黒釉陶器4点、緑釉陶器1点(87)、瑠璃釉陶器1点、東南アジア産陶器18点、陶器4点(88)、瓦質陶器1点、石器・石材43点(89～91)、獣骨62点、魚骨1点、海産貝4点、古銭2点(92・93)、簪1点(96)、沖縄産陶器190点(94・95)、近現代磁器17点、土壁片?79点、赤瓦2点、鉄片43点、丸釘1点、砲弾片2点、現代遺物10点、焼土800点、炭化物4点、コールタール1点、漆喰1点が出土している。

67は口縁に向かって内傾する鐮形土器の口縁片であり、口縁内側に粘土の折り返しがみられる。68は胴部から内傾し、頸部で折れ、若干内側に傾きながら直口する鉢型土器の口縁片である。69は底面から丸みをもって立ち上がるタイプである。

70 は壺形の口縁片である。胴部から口縁に向かって内傾し、口縁手前でナデ上げて口縁部を成形しており、口唇部は平坦を呈する。71 は胴部片であり、外面は平滑で、内面には粘土の繋ぎ目が明瞭に残っている。

72 は白磁碗の底部片である。内面を円形に掻いており、不明瞭ながら印花文が施されている。徳花窯系。73 は口禿皿の口縁片。74 は森田 E 類の白磁皿。75 は森田 D 類の小杯の底部片であり、高台に 4 か所の挟りが成形されている。

76～78 は青磁碗であり、76 は外面に細蓮弁文・内面に雷文が施されている。77 は口縁部分に不明瞭な雷文が施されている。78 は無文の直口口縁片であり、若干雑な作りとなっている。79 は底部片であり、底面が厚く、内底中央がくぼんでいる。80 は胴部片であり、内面に印花文が施されている。81～83 は皿であり、81 は直口口縁で、内面に叉状工具を用いた蓮弁文が施されている。82 も直口口縁であり、外面に蓮弁文、内面に丸掘りの蓮弁文が施され、口縁は稜花に成形している。83 は外反口縁であり、外面に蓮弁文が施されている。84 は青磁壺の身の口縁片である。

85 は青花皿の底部であり、見込みに圓線と何らかの文様が描かれている。

86 は褐釉陶器のすり鉢胴部片であり、内面に 5 条の掻き目がみられる。

87 は三彩陶器の袋物であり、外面部分の文様から鳥の形態をした袋物の一部と考えられる。

88 は陶器片の底部片であり、高台径から想定して小型品の器種が想定される。また円形を呈していることから、円盤状製品として使用した可能性も高い。

89～91 は石製品である。89 は側面に敲打痕が残ることから、敲き石の可能性が考えられる。90 はガラス質であることから、玉の可能性が考えられる。91 は方形に成形されているが、その用途は不明である。

92 は 2 つの古銭が接着して出土しており、93 は「寶」の文字が判読できる。

94 は灰釉碗の底部片。95 は褐釉が施された壺の底部片。

96 は青銅製の簪である。

層序不明は、グスク土器 3 点、青磁 5 点、青花 1 点、褐釉陶器 2 点、沖繩産陶器 4 点、焼土 14 点が出土している。

また、隣接地の F7 グリッドからグスク土器 3 点、白磁 2 点(97)、青磁 3 点、石材 1 点、近現代磁器 1 点、土壁片? 1 点、G9 グリッドから青磁 1 点、褐釉陶器 1 点が表採されている。

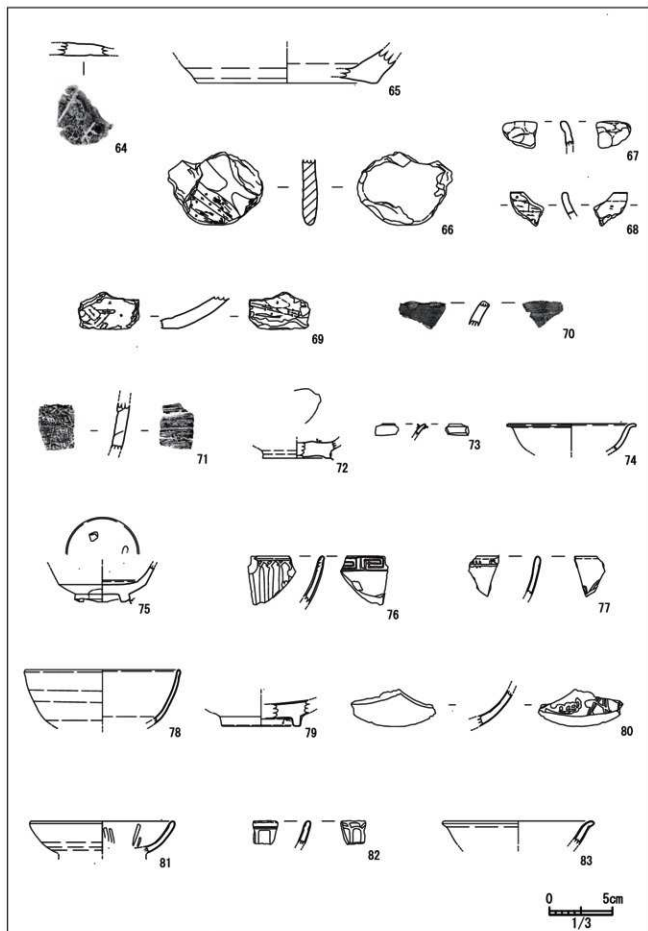
97 は底面が外側の削りが浅く、厚く成形され、高台が低い。見込みは蛇の目状に釉掻きされている。

第6表 H21 実測遺物観察表②

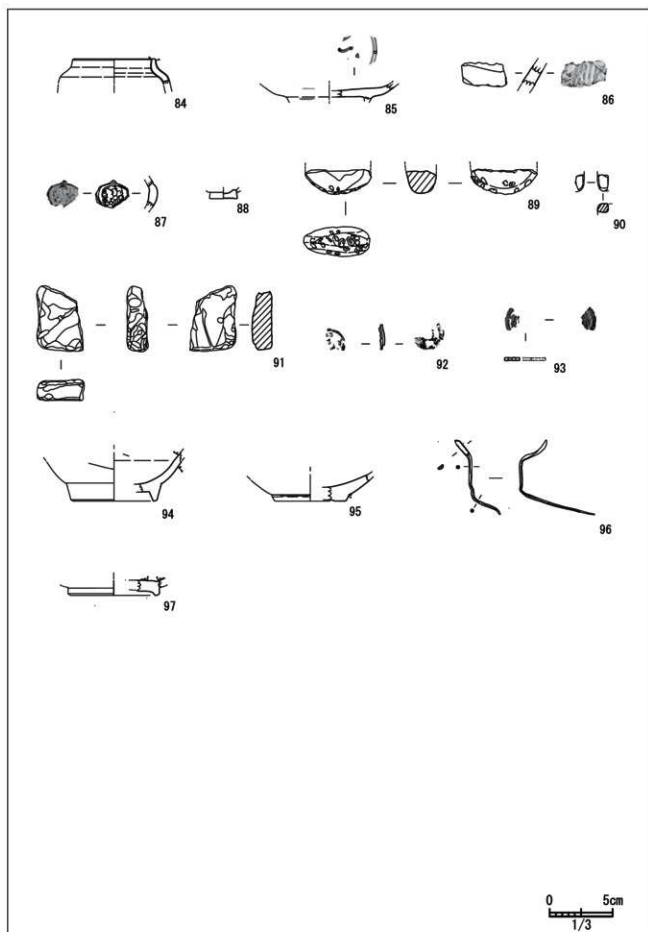
図/ 番号	出土区	出土 層位	遺物 種別	分類	観察事項	復原径 cm	胎土 混入物	色 調
第12図 64	F8	1層	グスク土器 底部	—	内外面粗いナデ。外：一部ケズリ有 り、内：部分的に黒褐色が付着。焼成不 良。	—	白色粒 褐色粒	胎：橙(5YR6/8)
第12図 65	F8	1層	樽輪陶器 底部	—	やや上げ底状。底面からやや緩や かに立ち上がる。内外面ナデ。焼成は 良好。混入物土粒・砂子。	底：14.2	白色粒 黒色粒 褐色粒	胎：浅黄橙(7.5YR8/6)
第12図 66	G8	1層	石製品	—	両面研削、使用により欠損している。 泥岩。	—	—	—
第12図 67	F8	2層	グスク土器 口縁部	鍋 I C または II B?	内外面とも指押さえ後にナデが施さ れている。	—	白色粒 黒色粒 褐色粒	胎：橙(2.5YR6/8)
第12図 68	G8	2層	グスク土器 口縁部	鉢： I×IV	口縁部がやや内側に屈曲する。口唇 は平坦。焼成不良。	—	白色粒 黒色粒 褐色粒	胎：淡橙(5YR8/4)
第12図 69	G8	2層	グスク土器 底部	—	底面から緩やかにな立ち上がり。内面 は指ナデで整えており、外面はヘラ削 り後ナデ。一部、煤が付着している。	—	白色粒 褐色粒	胎：赤橙(10R6/8)
第12図 70	G8	2層	カムイヤキ 口縁部	—	口縁部は外反する。内外面ヘラ状工 具による回折調整。口唇部付近ナデ。	—	白色粒 褐色粒	胎：灰(7.5Y5/1)芯部は にぶい赤褐(5YR4/4)
第12図 71	G8	2層	カムイヤキ 胴部	—	外面粗いナデ一部指押さえ。内面粗 いヘラ有勢。	—	白色粒 黄褐色粒	胎：暗灰(N3/)
第12図 72	G8	2層	白磁碗 底部	—	見込み中央部を軸刺ぎ。量付きから 高台内が露出している。高台内の有勢 が浅く、粗い仕上げ。貫入有り。	底：5.4	褐色粒	胎：灰白(10YR8/3) 軸：灰白(5YR8/1)
第12図 73	F8	2層	白磁皿 口縁部	大塚町 IX類	直口口縁。口縁部を軸刺ぎする口売 げ風。	—	褐色粒	胎：灰白(2.5Y8/1) 軸：黄緑灰(10GY8/1)
第12図 74	G8	2層	白磁皿 口縁部	—	全面に施釉。襷反口縁皿。ロクロ成 形。焼成良好。	口：9.9	褐色粒 黒色粒	胎：灰白(2.5Y8/1) 軸：透明釉
第12図 75	G8	2層	白磁杯 底部	森 D	見込みから高台外面まで施釉。細か い貫入が入る。高台を4〜5カ所強固に 挟み込みを入れる。見込みに重ね焼き の砂目詰みの跡が残る。	底：3.6	黒色粒 褐色粒	胎：浅黄橙(10YR8/4) 軸：灰白(2.5Y8/2)
第12図 76	G8	2層	青磁碗 口縁部	上 B III	直口口縁。外面に弁弁と弁が分離し た蓮弁文、内面口縁部に雷文帯が施さ れている。	—	黒色粒 褐色粒	胎：灰白(5Y8/1) 軸：オリーブ灰(10Y6/2)
第12図 77	G8	2層	青磁碗	上 C II?	直口口縁。外面口縁部に雷文帯を片 切彫、内面胴部に刻花文?が彫られて いる。	—	白色粒 褐色粒	胎：灰白(5Y8/1) 軸：明オリーブ灰(2.5GY 7/1)
第12図 78	G8	2層	青磁 口縁部	上 E	直口口縁。軸が薄くやや粗い施釉。 外面にロクロ痕が残る。	口：12.2	黒色粒 褐色粒	胎：灰白(N8/) 軸：オリーブ灰(10Y6/2)
第12図 79	G8	2層	青磁碗 底部	—	高台内途中から軸刺ぎがみられる。 高台断面四角形。量付き平坦。やや貫 入有り。	底：6.2	白色粒 褐色粒	胎：灰白(N8/) 軸：オリーブ灰(10Y5/2)
第12図 80	G8	2層	青磁碗 胴部	—	全面に施釉。ロクロ成形。内面に草 文。貫入有り。焼成良好。	—	黒色粒 褐色粒	胎：灰白(2.5Y8/1) 軸：灰白(10Y7/2)
第12図 81	G8	2層	青磁皿 口縁部	—	直口口縁蓮弁文風。全面に施釉。ロ クロ成形後、内面にヘラ削りて間隙を開 く蓮弁を描く。焼成良好。	口：11.4	褐色粒	胎：灰白(5Y7/1) 軸：黄緑灰(10GY7/1)
第12図 82	G8	2層	青磁皿 口縁部	—	直口口縁で、口縁部をやや部み波状 につくる。外面は口縁部に施釉が有り、 その下に蓮弁文を施す。内面にも蓮弁 文を施す。	—	褐色粒	胎：灰白(5Y8/1) 軸：オリーブ灰(10Y6/2)

第7表 H21 実測遺物観察表③

図/ 番号	出土区	出土 層位	遺物 種別	分類	観察事項	復原径 cm	胎土 混入物	色 調
第12図 83	F8	2層	青磁皿 口縁部	-	外反口縁皿。	口:11.6	白色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5Y8/1) 軸:オリーブ灰(10Y5/2)
第13図 84	G8	2層	青磁小壺 口縁部	-	口唇部輪割ぎ。内面唇部で軸が薄くなる。貫入有り。	口:6.4	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5Y8/2) 軸:明オリーブ灰(5GY 7/1)
第13図 85	F8	2層	青花 底部	小B1 またはE	見込みに目跡のようなものがみられる。また、2条の圈線と草花文が彫かれている。外面胴部と高台も、圈線有り。	-	白色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5Y8/2) 軸:やや青みのかる灰色
第13図 86	F8	2層	褐釉陶器 すり鉢 胴部	-	外面ナデ調整。粗い仕上げで、すり鉢の外面胴部にかき目が5条入る。焼成不良。	-	褐色粒	胎:浅黄橙(10YR8/3)
第13図 87	G8	2層	三彩袋物 胴部	-	外面緑釉施軸。黄色釉で絵付け。外面に文様の一部が施されている。内面ナデ。焼成良好。	-	褐色粒	胎:浅黄橙(10YR8/4) 軸:緑釉、黄色釉
第13図 88	G8	2層	陶器	-	陶器円盤状製品?突出部打伏して円盤状に仕上げている。糸切りの跡あり。焼成良好。	-	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(10YR8/1)
第13図 89	G8	2層	磁石片	-	上部欠損。たたき痕有り。	-	-	-
第13図 90	G8	2層	石製玉?	-	全体的に磨かれている。破断面に穿孔と思われる痕跡有り。	-	-	半透明
第13図 91	G8	2層	石製品	-	2面砥面。破損しており、使用による欠けや滑りが見られる。	-	-	-
第13図 92	G8	2層	古銭	-	豊元通宝と考えられる。折れ重なってくっついている。	-	-	-
第13図 93	G8	2層	古銭	-	「寛」のみ判読	-	-	-
第13図 94	G8	2層	湧田焼 底部	-	内外面胴部下半から露胎している。高台断面が三角形で腰部がやや丸みを帯びる。	底:6.6	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5Y8/1) 軸:灰白(7.5Y7/2)
第13図 95	G8	2層	沖崎産 施釉陶器 壺 底部	-	内面と外面胴部に施軸。高外から高台が露胎。底部は立ち上がり部分を斜めに削りだして高台をつくるが、外底の内側がなま。	底:5.6	黒色粒 褐色粒	胎:にぶい黄橙(10YR 6/3) 軸:黒褐(10YR3/1)
第13図 96	G8	2層	甕	-	杯状の胴部。破断面は六角形。	-	-	-
第13図 97	F7	表採	白磁皿 底部	-	直口浅皿か?見込みは蛇の目輪割。残存部の高台から高台内が露胎。外底の滑りは浅い。ロクロ成形で焼成は良好。	底:6.8	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(5Y8/1) 軸:灰白(5GY8/1)



第12図 F-G8グリッド遺物実測図①(S=1/3)



第13図 F-G8グリッド遺物実測図②(S=1/3)

3. F・G13グリッド、F14グリッド東側、G14グリッド西・北側発掘区（第14・15図）

本地区は、昨年度1層途中で調査を終えた地点である。こちらも北側の石積み同様、既存の石積みを取り外しており、地表面に石列状に残る様相であった。取り外した石積みについては、南側に延びる形で石灰岩の集積がみられることから、境界の石列に使用しない分については、そのまま帯状に廃棄した可能性が考えられる（重機を使用して移動させた可能性も考えられる）。

本年度は、南側石積みが残存するF・G13グリッド、F14グリッド西側から1m、G14グリッド西側・北側をL字状にそれぞれ1mの幅で発掘区を設定した。

調査は、層序を確認するためにG13グリッド西側にサブトレンチを設定し、掘り進めたところ、20cm前後で地山面が検出されたことから、F・G13グリッド全面を地山面まで掘り下げた。地山面には重機のバケット痕が検出されたほか、小穴が複数確認されている。

F・G14グリッドについては、上述のとおり1m幅のトレンチを設定し、同様に地山面まで掘り進めた。本発掘区では、岩盤のひろがり顕著であり、狭い範囲ではあるものの、重機のバケット痕は確認できなかったが、岩盤を縫うように小穴が複数確認されている。

[1] 層序

層序は、6枚の層が確認されている。

1層：昨年度の発掘調査でグリッド全面にひろがっていることが確認されている。

2層：2層は2つに細分できた。

a：戦後の耕作土であり、混ざりが少ない暗茶褐色土である。G13グリッドの南西側を除き、F・G13グリッド内にひろがっている。

b：同様に戦後の耕作土である。重機を使用して転地返しを行った際の土であり、暗茶褐色土と明褐色土がマーブル状に混ざる層である。こちらもF・G13グリッド内にひろがっている。

3層：F・G13グリッド南側石積み付近からF・G14グリッドにかけてひろがっている。

4層：F13グリッドの南側、検出された岩盤の間に僅かにひろがっている。

5層：3・4層の下部にひろがっている。

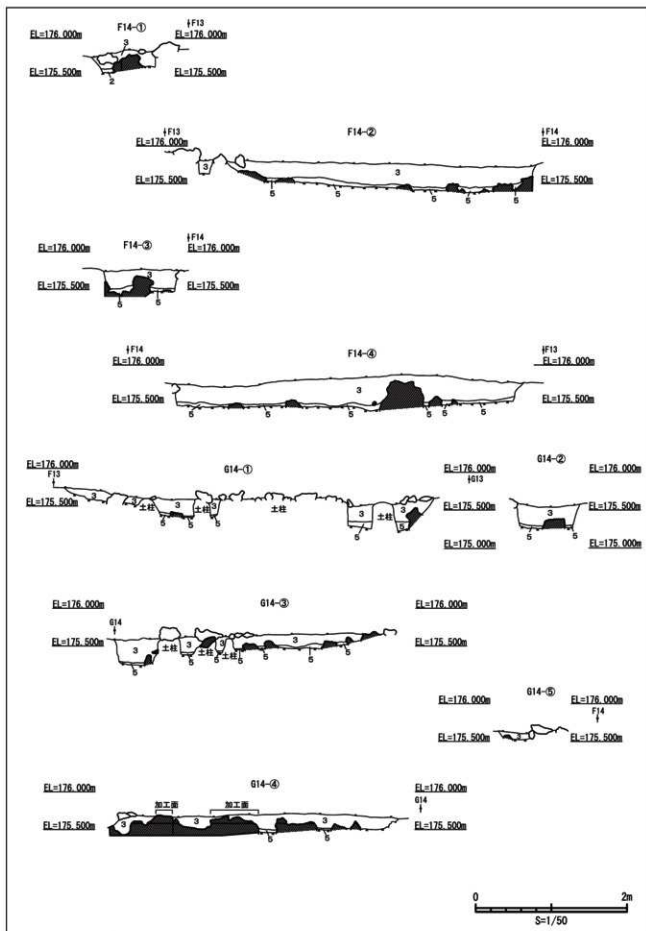
6層：地山層。

[2] 遺構

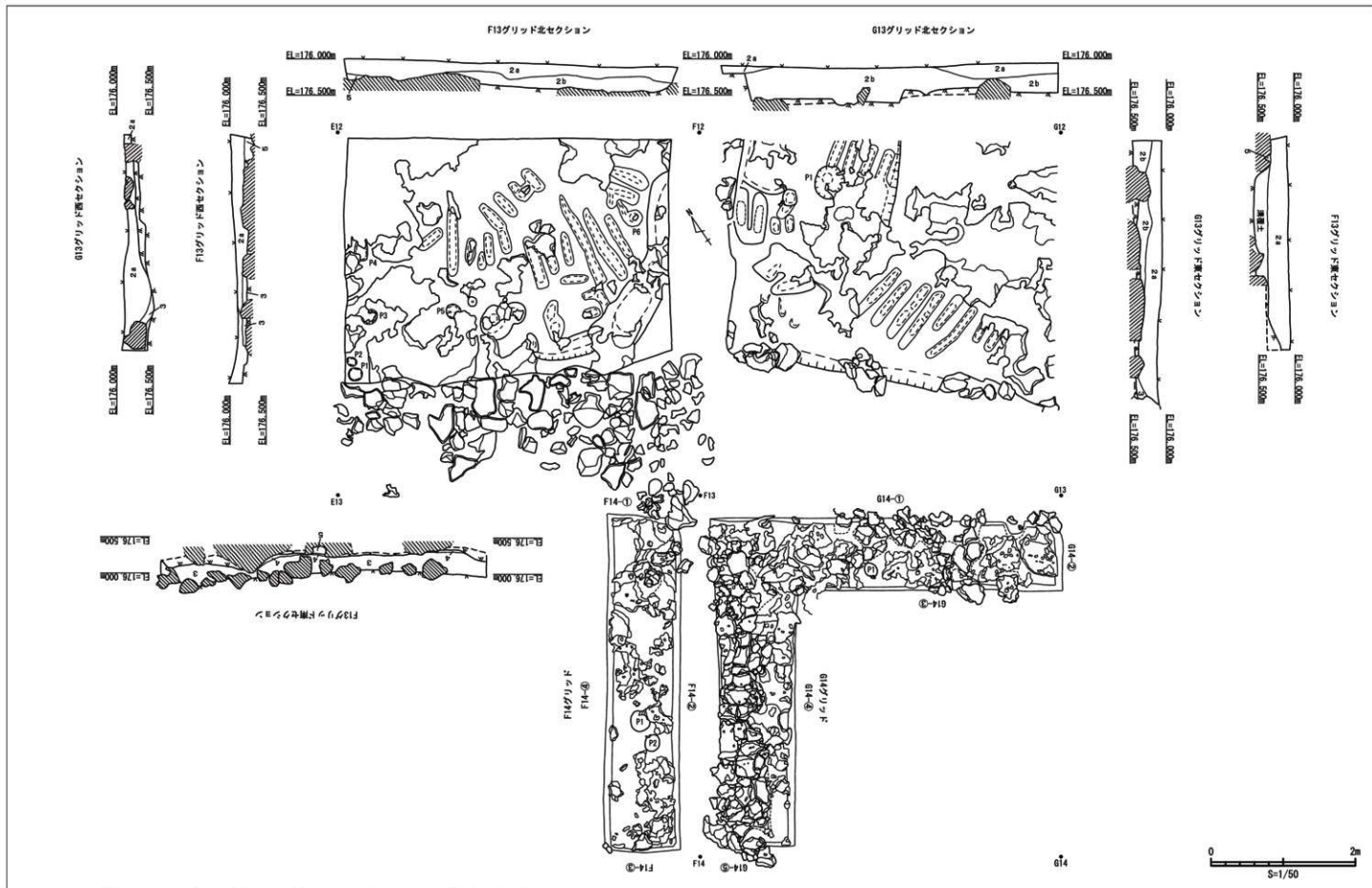
遺構については、石積み、小穴、溝状遺構が確認されている。

(1) 石積み

石積みは、F・G13グリッド南側から検出された。上述のとおり、石積みは取り外されており、現況としては地表面に石列状に置かれた状態であった。幅は1～1.5m程を測り、F13グリッドに残存する石積みの内側については移動の影響が少なく、整形された石灰岩が石面をそろえた状態で確認されている。G13グリッドの石積みについては、石面が整えられた石灰岩は取り除かれており、中込め石が露出する状態



第14図 F・G14グリッド層序図(S=1/50)



第15図 F・G13グリッド、F14グリッド東側、G14グリッド西・北側平面図及び階序図 (S=1/50)

で確認されている。石積み下部からは3層以下が確認されており、戦後の耕作土である2層のひろがりはみられなかった。

(2) 小穴

小穴は各グリッドより検出されている。F13グリッドからは6基、G13グリッドからは1基、F14グリッドからは2基、G14グリッドからは1基検出されている。F・G14グリッドについては掘り込んでいないため、その様相を確認することはできない。F・G13グリッドの成果から、大きさは20cm前後であり、深さは30～40cmを測る。覆土は黒褐色土であり、グスク時代の包含層である4層に該当すると考えられる。遺物は、みられなかった。

(3) 溝状遺構

F13グリッドから1基検出されている。溝状遺構は、グリッドの東側から南側中央に弧状に延び、石積み下へと続くものと考えられ、延長部にあたるG13グリッドでは溝状遺構を明確に確認することができなかったものの、当該箇所が深く落ち込んでおり、土壌状の広がりをもつ可能性も考えられるが確認することはできなかった。幅は50cm程、深さは20cm程を測る。覆土は黒褐色土であり、小穴同様、グスク時代の包含層である4層に該当すると考えられる。遺物は、みられなかった。

[3] 遺物 (第16・17図98～130、第8・9表98～130、図版37～40、98～130)

遺物については、グスク時代相当期から近現代までのものが出土している。

2層からは、沖縄貝塚時代前期土器1点、グスク土器272点(98)、カムイヤキ11点(99)、白磁72点、青磁316点(100・101)、青花160点(102～104)、褐釉陶器159点、緑釉陶器4点、東南アジア産陶器10点、磁器1点、陶器1点、石器・石材34点(106～108)、土製品2点、瓦製品1点(105)、獣骨9点、魚骨1点、海産貝1点、陸産貝1点、古銭1点(109)、煙管1点、沖縄産陶器262点(110～116)、近現代磁器16点、土壁片?34点、赤瓦2点、鉄片13点、砲弾片1点、現代遺物1点、焼土296点、炭化物1点が出土している。

98は口縁部に瘤状の突起を貼付けた鍋形土器の口縁片である。

99は薄手の胴部片であり、外面は平滑に仕上げられ、内面は綾杉文の当て具痕が残っている。

100は青磁碗の口縁片であり、外面に雷文、内面に花文が施されている。101は皿の底部片であり、見込みに何らかの文様が描かれている。

102～104は青花皿の底部片である。102は外面に唐草文、内面に花文が描かれており、103・104については内面に何らかの文様が描かれている。

105は瓦を利用した製品と考えられるが、その用途については不明である。

106は全面が磨かれた片刃の石斧片であり、使用による刃部の欠失が僅かにみられる。107は表裏面が平滑に磨かれていることから砥石の可能性が考えられる。108は側面に敲打痕がみられることから敲き石と考えられる。

109は「嘉祐元寶」である。

110・111 は碗であり、110 は緑釉で外面に花文が施されている。111 は灰釉碗の底部片である。112・113は鉢の口縁片である。112は口縁手前を撫でて一旦削った後に口縁を外側へ突出され、平坦に成形している。113は若干の丸みをもちながら外傾して立ち上がり、口縁を平坦に成形している。114は壺の底部片。115は蓋片。116は胴部片であり、内面に轆轤痕が明瞭に残る。

3層からは、グスク土器 114 点、カムイヤキ 4 点、白磁 15 点、青磁 76 点 (117)、青花 45 点 (118・119)、染付 1 点 (120)、褐釉陶器 58 点 (121・122)、緑釉陶器 2 点 (123)、東南アジア産陶器 4 点、磁器 1 点 (124)、陶器 1 点、石器・石材 8 点、獣骨 15 点、陸産貝 3 点、古銭 1 点 (125)、簪 1 点 (126)、沖縄産陶器 97 点 (127～129)、近現代磁器 4 点、土壁片? 38 点、赤瓦 4 点、鉄片 10 点、丸釘 1 点、焼土 188 点が出土している。

117 は皿の底部であり、高台は丸みを帯びている。

118 は碗の底部片であり、見込みに花文が、外底に何らかの文様が描かれている。119 は小杯の口縁片であり、外面に草花文が描かれている。120 は染付の直口口縁片であり、外面に僅かな筆描きの文様が描かれている。

121 は小壺の肩部片である。薄手であり、怒り肩を呈する。122 はすり鉢の底部片であり、内面に 6 条の掻き目によるすり面が施されている。

123 は袋物の平底底部片である。外面には彫り込みによる文様がみられる。

124 は磁器の底部片である。畳付けを広くした太い高台を成形しており、両面ともに露胎を呈している。

125 は「寛永通寶」である。

126 は青銅製の簪である。若干小型である。

127 はやや大振りの碗の底部片。128 は皿状に成形された蓋片と考えられる。129 は香炉の底部片であり、底部に三足の貼付部が施されている。

4層からは、グスク土器 16 点、白磁 2 点、青磁 6 点、青花 11 点、褐釉陶器 13 点、東南アジア産陶器 2 点、磁器 1 点、陶器 1 点、石器・石材 1 点、獣骨 57 点、海産貝 1 点、沖縄産陶器 20 点、土壁片? 6 点、焼土 32 点が出土している。

層序不明は、グスク土器 1 点、白磁 1 点、褐釉陶器 2 点、東南アジア産陶器 1 点、沖縄産陶器 5 点、土壁片? 1 点、焼土 4 点、現代遺物 1 点が出土している。

また、隣接地の G15 グリッドからグスク土器 7 点、カムイヤキ 1 点 (130)、白磁 1 点、青磁 2 点、青花 2 点、褐釉陶器 3 点、石材 1 点、沖縄産陶器 10 点、焼土 3 点 が表採されている。

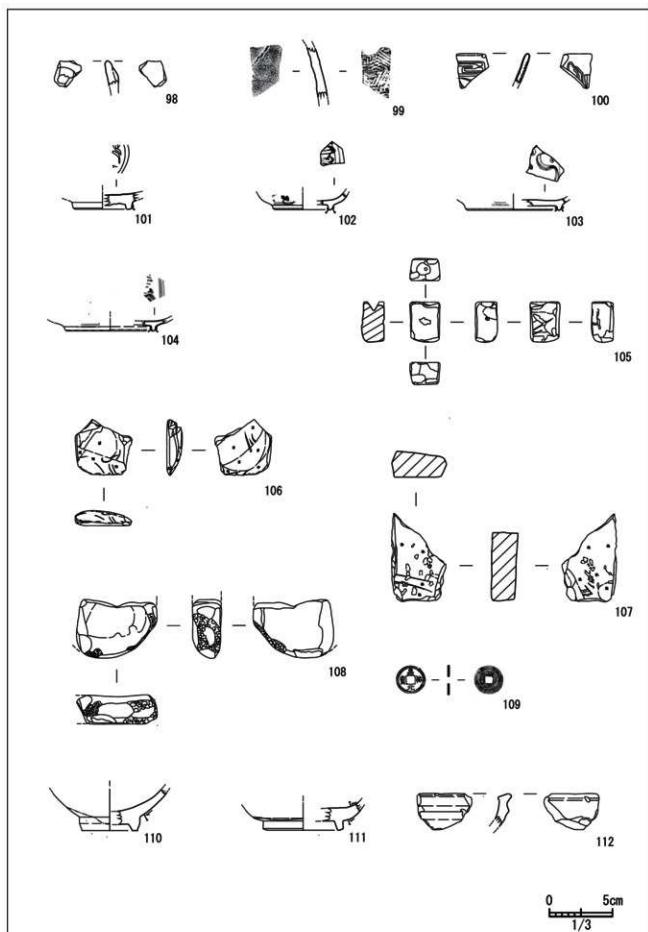
130 は胴部片であり、外面は平滑に仕上げられ、内面は綾杉文の当て具痕が残っている。

第8表 H21 実測遺物観察表④

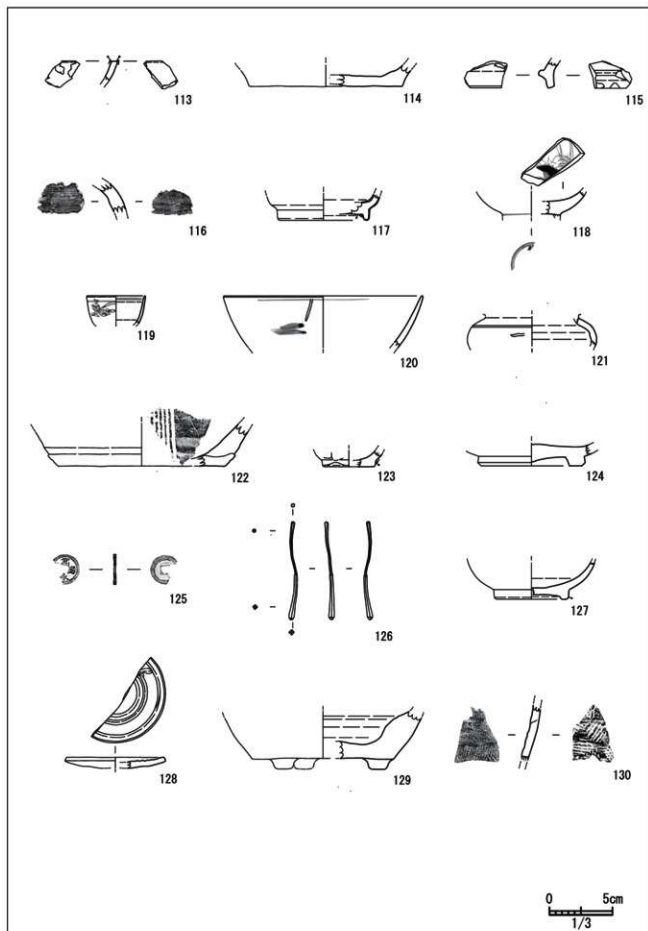
図/ 番号	出土区	出土 層位	遺物 種別	分類	観察事項	復原径 cm	胎土 混入物	色 調
第16図 98	G13	2層	グスク土器 銅形	-	口縁部に横みの浅い瘤状把手が貼 付られている。	-	黒色粒 灰色粒	胎: 橙(2.5YR6/8)
第16図 99	F13	2層	カムイキ 胴部	-	外面はヘラ状工具による回転調整。 内面は当て具痕の痕ナデ消し。	-	白色粒 褐色粒	胎: 灰(N5/)芯部は にぶい赤褐(2.5YR5/3)
第16図 100	F13	2層	青磁陶 口縁部	上CII	直口口縁、厚めの軸。外面口縁部付 近に雷文帯、内面に片切鹿の草花文が 施されている。	-	褐色粒	胎: 灰白(2.5Y8/1) 軸: オリーブ灰(2.5GY 6/1)
第16図 101	F13	2層	青磁皿 底部	-	唇付きから高台内が露出している。 見込みに圏線と草花文?が描かれて いる。粗製品。	底:4.3	褐色粒	胎: 灰白(10YR7/1) 軸: オリーブ灰(10Y6/2)
第16図 102	G13	2層	青花皿 底部	小皿B	唇付き軸剥ぎ。外面高台を斜めに削 り、砂敷きで焼成されたと考えられる。 外面高台部に2条の圏線と唐草文、見 込みに2条の圏線と草花文?が描かれて いる。	底:4.4	黒色粒 褐色粒	胎: 浅黄(2.5Y8/3) 軸: 黒緑灰(10GY8/1)
第16図 103	G13	2層	青花皿 底部	小皿E?	唇付き軸剥ぎ。外面高台部に2条の 圏線、見込みに圏線と草花文?が描か れている。	底:7.3	褐色粒	胎: 浅黄(2.5Y8/3) 軸: 黒緑灰(7.5GY8/1)
第16図 104	F13	2層	青花皿 底部	-	唇付き軸剥ぎ。やや浅い高台。口縁 成形。外面高台部に2条の圏線と文様 の一部有り。見込みに2条の圏線と草 花文有り。焼成良好。	底:6.8	褐色粒	胎: 浅黄(2.5YR8/3) 軸: 黒緑灰(10GY8/1)
第16図 105	G13	2層	瓦製製品	-	4面両面の一部に2本の線条痕や窪 み有り。磨かれた面と粗い調整の面が ある。	-	-	-
第16図 106	F13	2層	石斧	-	上部欠損。全体的に磨き有り。刃部 に使用による欠け有り。	-	-	-
第16図 107	G13	2層	石器片	-	2面砥面。一面にミガキ有り。砥石 か?	-	-	-
第16図 108	F14	2層	擦石 または 砥石	-	上部欠損。表面は研磨されている が、中央付近が親指大に窪んでいる。 裏面にも磨きが施され、左側面に割れ 面、右側面に敲打痕がみられる。	-	-	-
第16図 109	G13	2層	-	-	嘉祐元寶。	直径:2.3	-	-
第16図 110	F13	2層	沖御座 施軸陶器 筒 底部	-	白化粧を施し、上から緑釉を流しか ける。内面は丁字だが、外面は粗い施 釉。唇付き平皿。口縁成形。焼成良好	底:4.4	褐色粒	胎: 浅黄橙(10YR8/4) 軸: 緑灰(5C6/1)
第16図 111	F13	2層	沖御座 施軸陶器 灰軸筒 底部	-	高台がやや「ハ」の字状に開く。外面 は高台脇まで施釉しており、高台から 高台内が露出している。また、見込みも 軸剥ぎである。	底:5.7	黒色粒 褐色粒	胎: 浅黄(2.5Y8/4) 軸: 灰白(N7/)
第16図 112	F13	2層	沖御座 施軸陶器 鉢 口縁部	-	口唇やや平皿。口縁外面が「く」の字 状に若干くぼむ。焼成良好。	-	白色粒 褐色粒	胎: 灰赤(10R5/2) 軸: 外面~口唇、灰褐(5 YR4/2) 内面、黒褐(5YR3/1)
第17図 113	G13	2層	沖御座 施軸陶器 口縁部	-	口唇を鋭く施釉。口唇平皿。	-	白色粒 白帯状 のスジ	胎: 灰赤(10R5/2)及び 暗赤褐(7.5R3/2) 軸: 黒褐(5YR3/1)

第9表 H21 実測遺物観察表⑤

図/ 番号	出土区	出土 層位	遺物 種別	分類	観察事項	復原径 cm	胎土 混入物	色 調
第17図 114	G13	2層	沖罫蓋 無軸陶器 蓋 底部	-	内外面底部指ナゲ直。焼成良好。	底:12.0	褐色粒	胎:内面灰(7.5Y5/1)、 外面橙(2.5YR6/8)
第17図 115	G13	2層	無軸陶器 蓋	-	内外面ナゲ調整。口唇平坦。	-	白色粒 黒色粒	胎:灰(5Y5/1)
第17図 116	F13	2層	沖罫蓋 無軸陶器 胴部	-	内外面ナゲ。内面にクロ痕が残る。 焼成良好で締りが良い。	-	褐色粒	胎:黄灰(2.5Y5/1)
第17図 117	F14	3層	青磁皿 底部	-	全面に施釉。高台内輪剥ぎ。クロ成 形。底部にやや厚みがある。焼成良 好。	底:7.0	褐色粒	胎:灰白(5Y8/1) 釉:オリーブ灰(10Y6/2)
第17図 118	F14	3層	青花碗 底部	-	見込みに2条の圈線と花鳥文?が描 かれている。高台部に圈線有り。また、 高台内に2条の圈線と、文字有り。	-	褐色粒	胎:灰白(2.5Y8/1) 釉:明礬灰(10GY8/1)
第17図 119	F14	3層	青花 小杯	-	直口口縁。外面に圈線と草花文、内 面に圈線が描かれている。	口:4.6	褐色粒	胎:灰白(5Y8/1) 釉:灰白(10Y8/1)
第17図 120	F14	3層	染付碗 口縁部	-	直口口縁。内外面口縁部に圈線有 り。外面に筆描きの文様有り。呉須の発 色は鈍く薄。	口:15.7	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(5Y8/1) 釉:灰白(7.5Y8/1)
第17図 121	F14	3層	樽形陶器 小蓋? 肩部	-	肩部の張りが強く、頸部の屈曲も強 い。外面の釉が一部剥がれている。	-	白色粒 黒色粒 褐色粒	胎:灰(N6/) 釉:にぶい褐(7.5 YR 6/3)
第17図 122	F14	3層	樽形陶器 すり鉢 底部	備前	内外面ナゲ調整後、内面にカキ目が 6条入る。焼成は不良。	底:13.2	白色粒 黒色粒 褐色粒	胎:灰白(10YR8/2)
第17図 123	F14	3層	緑釉段物 底部	-	胴部外面施釉。一部釉が剥がれてい る。内外面ナゲ調整。外面に文様の一部 が描かれている。焼成良好。香合か?	底:4.0	黒色粒	胎:橙(7.5YR7/6) 釉:緑釉
第17図 124	G14	3層	磁器 底部	-	皿付きの幅が広く、高台断面は四角 形を呈す。皿付き外端に面取めがある。	底:8.0	黒色粒	胎:にぶい黄橙(10YR 7/4)
第17図 125	F14	3層	古銭	-	寛永通宝。	-	-	-
第17図 126	F14	3層	簪	-	断面六角形および四角形。真鍮製 か?	-	-	-
第17図 127	F14	3層	沖罫蓋 施釉陶器 底部	-	皿付きから高台内が露出している が、一部釉が残る。胴部は丸みを帯び ている。高台の滑りが良く、幅広い。	底:5.6	褐色粒	胎:淡黄(2.5Y8/4) 釉:灰白(2.5Y8/2)
第17図 128	F14	3層	沖罫蓋 無軸陶器 蓋	-	皿状に成形。上面中央部寄りに2条 の沈線有り。上面は滑り、下面は削り とナゲによる調整。上面のみ施釉で、一 部黒釉の付着有り。	直径:8.0	白色粒 褐色粒	胎:赤褐(10R5/4) 釉:暗赤灰(10R3/1)
第17図 129	F14	3層	沖罫蓋 無軸陶器 底部	-	底部から胴部への立ち上がりはやや 鋭角。間隙や火痕は有り。底部に3足が 付く香炉と思われる。内面ナゲ、外面 ヘラ削り後にナゲ調整。内面のみ施 釉。	底:11.2	白色粒 黒色粒 褐色粒	胎:にぶい赤褐(2.5YR 5/4)~灰色(5Y6/1) 釉:暗赤灰(10R3/1)
第17図 130	G15	表層	カムイナキ 胴部	-	外面、ヘラ状工具による回転調整。 一部甲痕有り。 内面、当て具痕有り。	-	白色粒 褐色粒	胎:灰(N5/)、芯部は にぶい赤褐(2.5YR5/3)



第16図 F-G13・14グリッド遺物実測図①(S=1/3)



第17図 F-G13・14グリッド遺物実測図②(S=1/3)

第6節 平成 22 年度の成果

平成 22 年度は、全体的な包含層のひろがりや南北軸の 3 つの石積みの内容を確認するために A・B 地区それぞれの南北中央軸ならびに A・B 地区の中央東西軸に 9 か所の発掘区を設定した。今年度の調査は堆積層のひろがりや把握することを第一義としたことから、各グリッドを幅 2m で発掘区を設定している。基本的に南北軸は A 地区でグリッドの東側、B 地区でグリッド西側を、東西軸では A・B 地区を通じてグリッド南側に設定している。

1. F5・6 グリッド発掘区

本発掘区は、昨年度発掘した A 地区南北軸 3 か所の北側中間部にあたる F5・6 グリッドに設定した。発掘区は、グリッドの東側で A 地区を縦断する境界石列に沿う形で設定した。

調査は、1 層を掘るとすぐに 2 層の耕作土が検出された。2 層を掘り進めていったところ、包含層などの層序は確認できず、地山面が検出され、地山面には重機のバケット痕が全面にひろがっていたことから、バケット痕の覆土を掘り込み、遺構の検出を試みたが、確認することはできなかった。

[1] 層序

層序は、3 枚の層が確認されている。上記のとおり、本地区では耕作の際の転地返しのための重機のバケット痕が全面にひろがっており、包含層の確認はできなかった。

1 層:薄く全面にひろがっている。

2 層:戦後の耕作土であり、全面に厚くひろがっている。

6 層:地山層。

[2] 遺物 (第 25 図 131~134、第 10 表 131~134、図版 55・56、131~134)

遺物については、グスク時代相当期から近現代までのものが出土している。

1 層からは、グスク土器 18 点、白磁 2 点、青磁 14 点、青花 1 点、磁器(高麗青磁?) 1 点、褐釉陶器 7 点、緑釉陶器 1 点、石材 1 点、沖縄産陶器 7 点(131)、近現代磁器 1 点、青銅製品 1 点、焼土 13 点が出土している。

131 は碗の底部片であり、白色化粧土に透明釉が施されたもので、重ね焼きのためか、見込みを蛇の目刺し、畳付も釉薬が剥ぎ取られている。

2 層からは、グスク土器 123 点、白磁 6 点、青磁 171 点(132・133)、青花 18 点、磁器 2 点、褐釉陶器 73 点、緑釉陶器 2 点、石器・石材 18 点、木製品 1 点、沖縄産陶器 44 点(134)、近現代磁器 7 点、鉄片 15 点、赤瓦 1 点、土壁片? 11 点、焼土 210 点が出土している。

132・133 は青磁碗であり、外面に粗雑な細蓮弁文が施されている。雑な仕上げであり、焼きが弱いいためか、釉薬の発色が悪い。

134 は沖縄産陶器の陶質土器であり、急須の注口基部にあたる。

2. F10・11 グリッド発掘区（第 18 図）

昨年度発掘区の南側中間部にあたる F10・11 グリッドの東側に発掘区を設定した。

本地区では南北軸の境界石列が F11 グリッドの東側に不明瞭ながら確認されていたが、発掘調査をはじめと F10 グリッドまで連なる形で検出された。石列以外の部分には 2 層の耕作土がひろがっていたため、そのまま掘り進めるところ、3 層以降は確認されず、地山面が検出された。地山面からは重機のバケット痕がほぼ全面確認されたほか、小穴を僅かに確認することができた。

[1] 層序

層序は、4 枚の層が確認されている。

1 層: 全面に薄くひろがっている。

2 層: 発掘区全面にひろがっているが、検出された石列に覆いかぶさるように確認されたのみである。

3 層: 石列の下部のみひろがっていた。

6 層: 地山層。

[2] 遺構

遺構には、小穴と石列が確認されている。

(1) 小穴

小穴は、F10 グリッドから 6 基、F11 グリッドから 3 基検出されている。F10 グリッドの 2 基を除いては、本発掘が整備目的ということで、掘り込みを行っていない。F10 グリッドの小穴については、P2 は重機のバケットにより上部を削られているため、その深さについて確認はできなかったが、残る 1 基の P1 の深さは 35cm 程を測る。2 基とも下場レベルがほぼ同一であることから、同様の深さをもっていた可能性が考えられる。検出された小穴は石列周辺からのみであることから、石列が戦後の重機を用いた転地返しの影響を受けていない可能性が考えられる。

(2) 石列

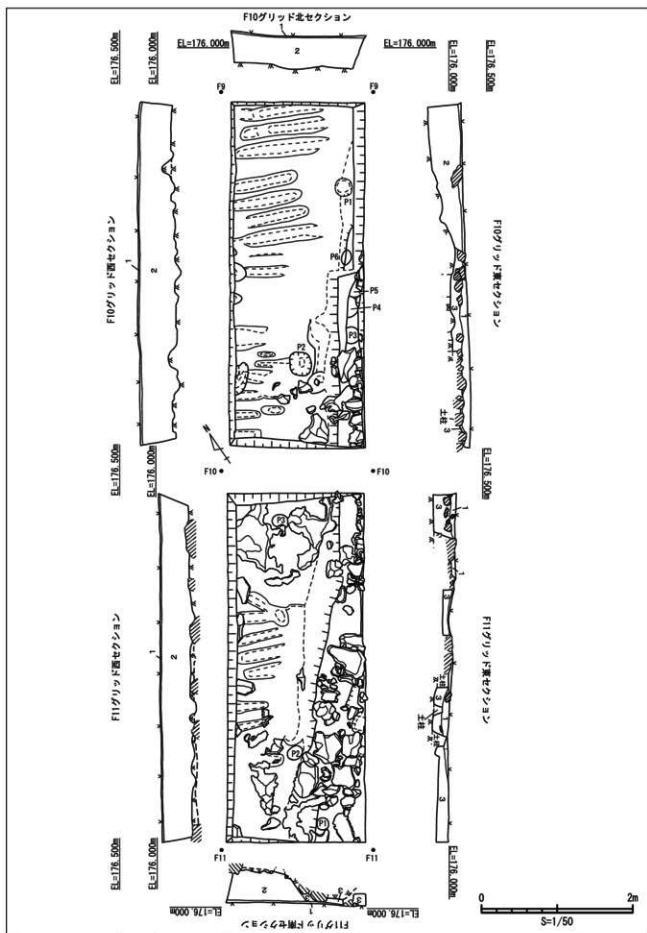
石列は、発掘区の東壁に沿う形で検出された。F11 グリッドでは上部が露出する状態であったが、F10 グリッドでは 1・2 層が 10cm 程覆いかぶさっていた。

石列は、F10 グリッドの半ば過ぎから検出され、北西に斜めにひろがるように F11 グリッドまで延びており、最大 60cm 程の幅を測る。基本的には 1 石のみが列をなしており、規格性のある石材を用いていない。

石列の下部には 3 層がひろがっており、先述したとおり戦後の耕作の影響を受けていないことから、時期を示す根拠となる可能性が高い。

[3] 遺物（第 25 図 135、第 10 表 135、図版 55・56、135）

遺物については、古くは古く時代相当期から近現代までのものが出土している。



第18図 F10・11グリッド平面図及び層序図 (S=1/50)

1層からは、グスク土器 35 点、カムイヤキ 1 点、白磁 6 点、青磁 22 点、青花 17 点、褐釉陶器 15 点、陶器 1 点、石器・石材 2 点、土製品 1 点、獣骨 1 点、海産貝 1 点、陸産貝 1 点、沖縄産陶器 24 点、近現代磁器 1 点、鉄片 2 点、土壁片 4 点、焼土 24 点が出土している。

2層からは、グスク土器 142 点、白磁 24 点、青磁 131 点、青花 77 点(135)、褐釉陶器 64 点、陶器 4 点、石器・石材 15 点、鉄製品 1 点、獣骨 1 点、海産貝 2 点、沖縄産陶器 145 点、近現代磁器 1 点、鉄片 15 点、鉄滓 3 点、赤瓦 1 点、土壁片 3 点、銃弾片 2 点、焼土 84 点が出土している。

135 は青花合子の身の受け口部にあたる。受け口部は両面ともに釉剥ぎが行われている。外面には青色呉須による文様が描かれている。

層序不明からは、青花 1 点が出土している。

3. B・C・D8 グリッド発掘区

A 地区西側の石積み中央を横断する形で発掘区を設定した。

各グリッドで検出状況が異なった。C8 グリッドについては薄く、1・2層を掘り込むとすぐに岩盤が検出される状況であり、B8 グリッドについては 2 層が比較的厚く堆積しているものの、地山面が僅かに検出されるのみで、C8 グリッド同様に岩盤が検出された。D8 グリッドにいたっては、戦後の重機によって岩盤が深く掘削されており、石灰岩の岩盤がポロポロになった状態で検出される状況であった。そのため遺構については、石積み以外を確認することができなかった。

[1] 層序

層序は、3 枚の層が確認されている。

1層:石積み部分以外の全面にひろがっている。

2層:耕作土であり、上記同様にひろがっているが、その堆積は各グリッドによって異なっており、B8 グリッドでは西側に向かうにしたがって厚く堆積しており、最大 20cm 程、C8 グリッドでは岩盤上部のみで 5cm 前後、D8 グリッドでは重機による掘削もあり、東側で最大 40cm 程を測る。層の堆積具合から C8 グリッドの中央部分が元々高まっていたことが確認できる。

6層:地山層。

[2] 遺構

A 地区の西側石積みが確認されている。

調査によって、石積みが残存する場所は、元々石灰岩の高まりがあった場所を利用して石積みを積み上げたことが確認できた。石積みに使用されている石灰岩は、比較的小さいものが使用されている。工法としては、これまでの調査区と違い、内部に石とともに土を詰め込み、両側に石灰岩を積み上げて石積みを造成したものと考えられるが、石積み部分を掘り抜いていないことから、断面形を明確に確認したのではない。

[3] 遺物 (第25図136~139、第10・11表136~139、図版55・56、136~139)

遺物については、グスク時代相当期から近現代までのものが出土している。

1層からは、グスク土器10点、白磁1点、青磁9点、青花1点、褐釉陶器5点、日本産陶器2点、石器1点、獣骨4点、海産貝4点、陸産貝1点、沖縄産陶器14点、焼土10点が出土している。

2層からは、グスク土器138点、カムイヤキ7点、白磁14点、青磁275点(136・137)、青花45点(138)、磁器(高麗青磁?)1点、褐釉陶器94点(139)、黒釉陶器1点、緑釉陶器2点、日本産陶器2点、陶器2点、石器・石材16点、獣骨3点、沖縄産陶器100点、近現代磁器8点、鉄片8点、銃弾片1点、現代遺物1点、焼土71点が出土している。

136は外面口縁部に雷文、その下方に蓮弁文が、内面には印花文が施されている。137は底部片であり、高台は方形を呈するが、畳付が若干斜めに削られている。やや大振りな碗の底部と考えられる。

138は135と同様に合子の身の受け口部にあたり、器形から同一片の可能性も考えられる。

139は漏斗状口縁を呈した瓶の口縁片と考えられる。頸部でほぼ水平に外側に折り、さらに若干内側に窪ませながら垂直に立ち上げている。

4. 18グリッド発掘区 (第19図)

昨年度発掘調査を行ったF・G8グリッドの東側に位置する18グリッドに発掘区を設定した。

調査は、これまでと同様に2層の掘り込みを進めたところ、他の層序を確認することができず、岩盤ならびに地山面に達した。地山面からは僅かに小穴が確認された以外には遺構の検出はみられず、重機のバケット痕が僅かに確認できるのみであった。

[1] 層序

層序は、3枚の層が確認されている。

1層:全面にひろがっている。

2層:1層同様全面にひろがっている。西側が深く60cm程を測り、東側は40cm程である。

6層:地山層。

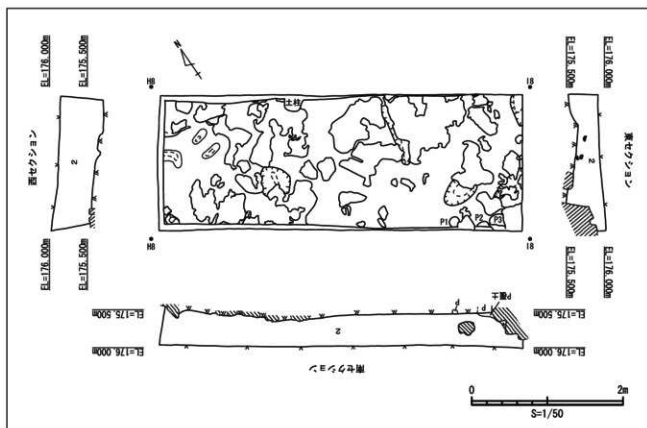
[2] 遺構

小穴が2基検出されている。2基とも岩盤の間から検出されており、戦後の耕作による破壊をも免れたものと考えられる。今回の調査においては、小穴の掘り込みを実施していないため、その詳細については不明である。

[3] 遺物 (第25・26図140~147、第11表140~147、図版55~58、140~147)

遺物については、グスク時代相当期から近現代までのものが出土している。

1層からは、グスク土器11点、白磁2点、青磁8点、青花4点、褐釉陶器13点、陶器2点、沖縄産陶器6点、鉄片1点、土壁片?5点、焼土29点が出土している。



第19図 18グリッド平面図及び層序図(S=1/50)

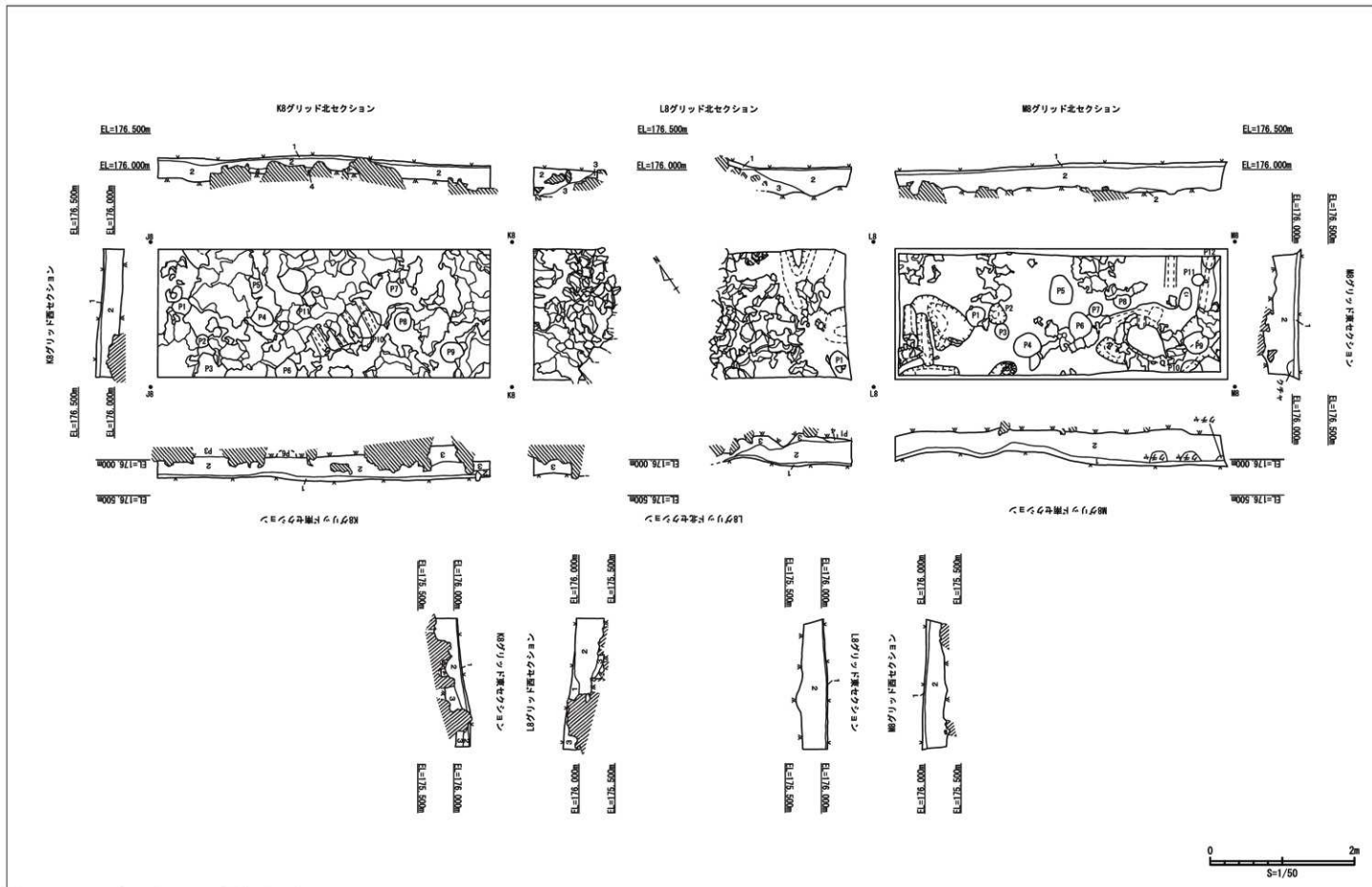
2層からは、グスク土器 79 点(140)、カムイヤキ 8 点、白磁 32 点、青磁 142 点(141~145)、青花 31 点(146)、褐釉陶器 48 点(147)、緑釉陶器 2 点、陶器 3 点、石器・石材 4 点、獣骨 2 点、沖縄産陶器 69 点、近現代磁器 1 点、鉄片 8 点、赤瓦 1 点、銃弾片 3 点、現代遺物 1 点、焼土 192 点が出土している。

140 はグスク土器の胴部大片である。胴部上半部であり、底部から外側に立ち上がり、上部が僅かに丸みをもって内傾している。

141・142 は細蓮弁文碗の口縁片である。142 は剣菱状の蓮弁が施されている。143 は上田編年 CIII 類に該当する。雷文が簡素化され、内面にも草花文が施されている。144 は外反皿の口縁片である。内面に丸彫りの蓮弁文、外面にも蓮弁文が施され、口唇部は窪みがみられることから、稜花を意識したものと考えられる。145 は底部片であり、高台は方形を呈する。見込みに草花文、外面に蓮弁文が施されている。

146 は碗の口縁片である。立ち上がりがきつく、口縁端で外反する薄手の碗である。外面に草花文が描かれている。

147 は褐釉壺の口縁片であり、口縁部を折り曲げ肥厚させている。



第20図 K・L・M8グリッド平面図及び断面図 (S=1/50)

5. K・L・M8 グリッド発掘区（第20回）

A・B地区の境界となる中央石積みを横断する形で3か所のグリッドに発掘区を設定した。

調査においては、石積み部分については手を加えず、石積み手前までを掘り進めることとした。基本的には3グリッドとも2層の耕作土の下層は地山面となっており、明確な包含層は確認されなかった。地山面からは複数の小穴が確認された以外には遺構の検出はみられなかった。

[1] 層序

層序は、5枚の層が確認されている。

1層：全面に薄くひろがっている。

2層：全面にひろがっており、20cm前後の厚さを測る。石積み両側では斜めに入り込んでいる。L8グリッドの一部にクチャの塊が確認されるが、これは転地返しの際に混入したものが塊として残ったものと考えられる。

3層：石積み両側から斜め下方へとひろがっている。戦後の重機使用の際、石積みを壊さないために根元から斜めに掘り下げられたためと考えられる。

4層：K8グリッドの岩盤の間のみから確認されている。重機のおよばなかった場所のみに残ったものと考えられる。

6層：地山層。

[2] 遺構

遺構については、石積みと小穴が検出されている。

(1) 石積み

現状の石積みについては、明瞭な石面をもつものはほとんどみられず、不明瞭ながらも石面がみられるものも方向を一にしていない。工法については、前方に落ちている石を除去したところ、内部に土と石が混在した形で検出されたことから、内部に石と土を詰め込んだ後に両側に石を積み上げたと考えられる。幅は下部で1.5m前後を測り、上部については明確な平坦面をもたず、中央部が尖るような形となっている部分もみられる。高さについては、現況として最高1.5m程を測る。

遺物については、グスク土器3点、青磁4点、褐釉陶器1点、沖繩産陶器1点、焼土2点が石積み内部から出土している。

(2) 小穴

小穴については、K8グリッド9基、L8グリッド1基、M8グリッド12基が検出されている。L8グリッドについては、石積みがあることから、その下層については確認できていない。K8グリッドから検出された小穴は岩盤の間を縫うように検出されており、M8グリッドについては岩盤が比較的グリッド全面にひろがっていることから、重機による転地返しの影響を大きく受けることなく、多数の小穴が残ったものと考えられる。

小穴については、整備目的ということで、ほとんど掘り込みを実施していない。M8 グリッドで1基のみ掘り込んであるが、深さ 8cm を測るものの、上部が戦後の耕作の影響により、大きく改変されたものと想定され、本来の深さとは考えられない。

[3] 遺物（第 26 図 148～152、第 11 表 148～152、図版 57・58、148～152）

遺物については、グスク時代相当期から近現代までのものが出土している。

1 層からは、グスク土器 49 点、カムイヤキ 2 点、白磁 26 点、青磁 49 点(148)、青花 23 点、褐釉陶器 33 点、石材 4 点、獣骨 6 点、陸産貝 4 点、沖縄産陶器 35 点、鉄片 1 点、現代遺物 2 点、焼土 87 点が出土している。

148 は青磁碗の底部片であり、高台は内側半ばから削られ五角形を呈する。外面には蓮弁文が施されている。

2 層からは、沖縄貝塚時代後期土器 1 点、グスク土器 85 点、カムイヤキ 1 点、白磁 47 点、青磁 204 点(149～151)、青花 74 点(152)、磁器 8 点、褐釉陶器 98 点、緑釉陶器 2 点、日本産陶器 3 点、陶器 6 点、石器・石材 17 点、獣骨 1 点、沖縄産陶器 141 点、近現代磁器 7 点、鉄片 19 点、鉄滓？1 点、赤瓦 1 点、銃弾片 2 点、現代遺物 3 点、焼土 168 点が出土している。

149・150 は碗の口縁片であり、蓮弁文が施されている。149 は外面に幅広の蓮弁文が施されている。150 は片切り彫りの蓮弁文が施され、弁先は整えられている。151 は碗の底部片であり、高台は方形を呈し、ハの字状に開いている。

152 は碗の底部片であり、高台は細く、皿付は丸みを帯びている。両面に圏線が巡っている。

6. O・P8 グリッド発掘区（第 21 図）

本地区は、B 地区中央部分に L 字状に設定した。O8 グリッドは南側に、P8 グリッドは西側にそれぞれ設定している。

2 層の耕作土を掘り進めたところ、他の層序は確認できず、地山面が検出された。しかし、地山面の一部で若干濁ったような土色が O8 グリッド北側、P8 グリッド東側から確認されており、本層の評価については面的なひろがりを確認する必要性から、今後の調査に委ねることとした。遺構については、両グリッドともに複数の小穴が確認されている。

[1] 層序

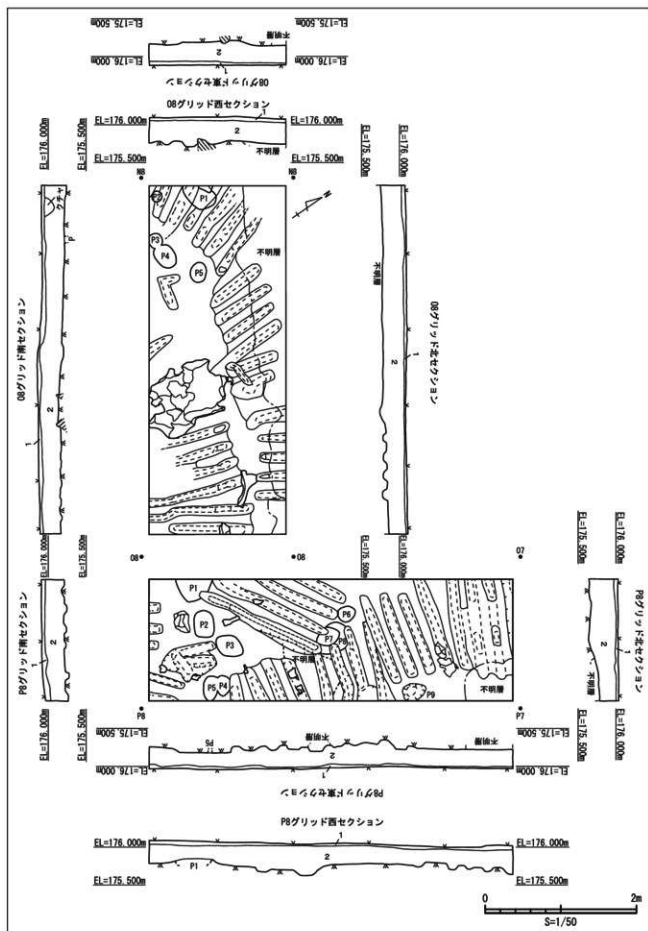
層序は、3 枚の層が確認されている。

1 層：薄く全面にひろがっている。

2 層：全面に 20cm 程の厚さでひろがっている。

不明層：先述のとおり、O8 グリッド北側、P8 グリッド東側にひろがっている。O8 から P8 へのひろがりについては、P8 グリッド部分が重機によって掘り込まれており、確認することはできなかった。

6 層：地山層。



第21図 O・P8グリッド平面図及び層序図 (S=1/50)

[2] 遺構

小穴が両グリッドから検出されている。

O8 グリッドからは5基、P8 グリッドからは9基検出されている。こちらも同様に整備目的であることから、掘り込みを行っていないため、その内容を確認することはできていない。ただ検出された小穴については、重機に重なっているものが少ないことから、重機の影響を受けなかった部分にのみ小穴が残されていたと考えられる。

[3] 遺物

遺物については、グスク時代相当期から近現代までのものが出土している。

1層からは、グスク土器49点、カムイヤキ1点、白磁9点、青磁40点、青花17点、褐釉陶器23点、陶器3点、石器・石材6点、陸産貝1点、沖縄産陶器60点、鉄片3点、現代遺物1点、焼土39点が出土している。

2層からは、グスク土器404点、カムイヤキ6点、白磁51点、青磁390点、青花122点、褐釉陶器162点、黒釉陶器1点、緑釉陶器1点、日本産陶器10点、陶器8点、石器・石材47点、滑石1点、獣骨1点、沖縄産陶器395点、近現代磁器15点、青銅製品1点、鉄片39点、鉄滓?2点、銃弾片1点、現代遺物4点、焼土287点、炭化物3点が出土している。

7. R・S8 グリッド発掘区 (第22図)

本地区は、B地区東側石積み横断する形で2か所のグリッドに発掘区を設定した。

両グリッドとも2層を掘り進めところ、石積み手前から石積み下部にかけて、3層や5層のひろがり確認されている。R8グリッドでは、地山面に多数の重機のバケット痕が検出されたが、S8グリッドでは重機のバケット痕が検出されおらず、戦後の石積み内外での用途の違いがみられる可能性が想定された。石積み以外の遺構については確認されていない。

[1] 層序

層序は、5枚の層が確認されている。

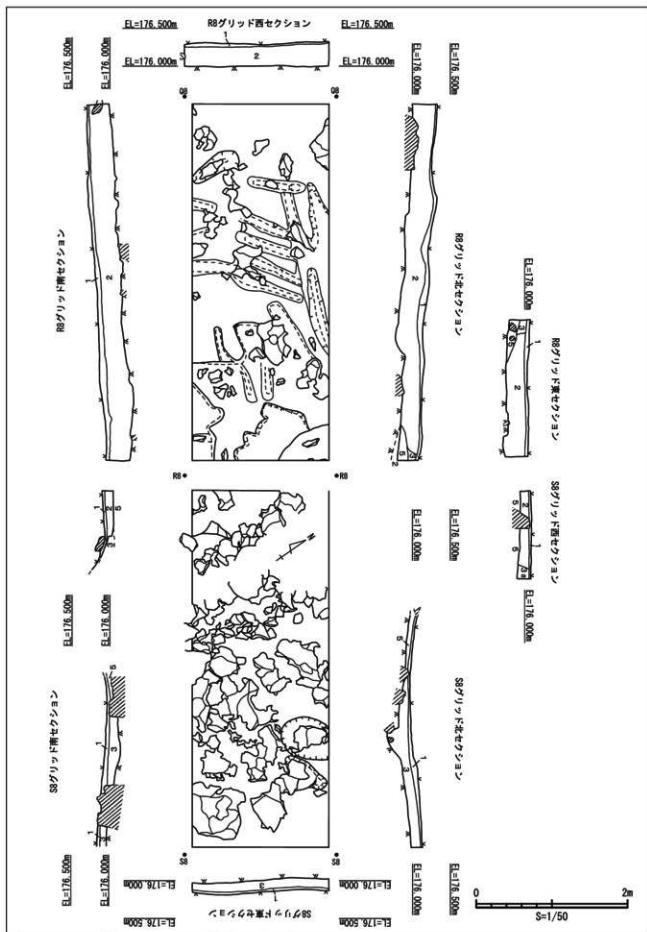
1層:薄く全面にひろがっている。

2層:R8グリッドではほぼ全面に30cm程の深さでひろがっており、S8グリッドは最深で10cm程と浅いひろがりとなっている。

3層:石積み手前からその下部にひろがっている。

5層:3層の下層にひろがっているほか、一部岩盤の間から確認されている。

6層:地山層。



第22図 R・S8グリッド平面図及び層序図(S=1/50)

[2] 遺構

石積みが確認されている。石積みは、S8 グリッドから確認されており、工法については内部に土と石が混在した形で検出されたことから、内部に盛り土を成形した後に両側に石を積み上げたと考えられる。使用する石材については、人頭大を含む大小の石灰岩が積まれているが、石面は下方を向くなど、現況としては整然としておらず、崩れおちている。幅は、下部で1.5m前後であり、上部については不明瞭で、台形状を呈しているが、一部三角形形状を呈している。高さについては、現況として最高1m程を測る。遺物はみられなかった。

[3] 遺物（第26図153、第11表153、図版57・58、153）

遺物については、グスク時代相当期から近現代までのものが出土している。

1層からは、グスク土器1点、青磁1点(153)、青花17点、陶器1点が出土している。

153は外反碗の口縁片であり、口縁部は端反で玉縁状を呈している。

2層からは、グスク土器9点、カムイヤキ1点、青磁11点、青花4点、褐釉陶器6点、石材2点、海産貝1点、沖縄産陶器17点、鉄片1点、焼土12点が出土している。

8. P5グリッド発掘区（第23図）

本地区は、B地区の中央北側の中間部、P5グリッドに設定した。

地表層が薄く、すぐに2層の耕作土が検出された。2層を掘り進めるところ、他の層序は確認されず、地山面のみが検出された。地山面には重機のバケット痕が発掘区のほぼ全面にひろがっており、僅かに複数の小穴が確認されている。

[1] 層序

層序は、3枚の層が確認されている。

1層:全面に1cm程と薄くひろがっているが、グリッド南東側に若干厚く(2~4cm)堆積している。

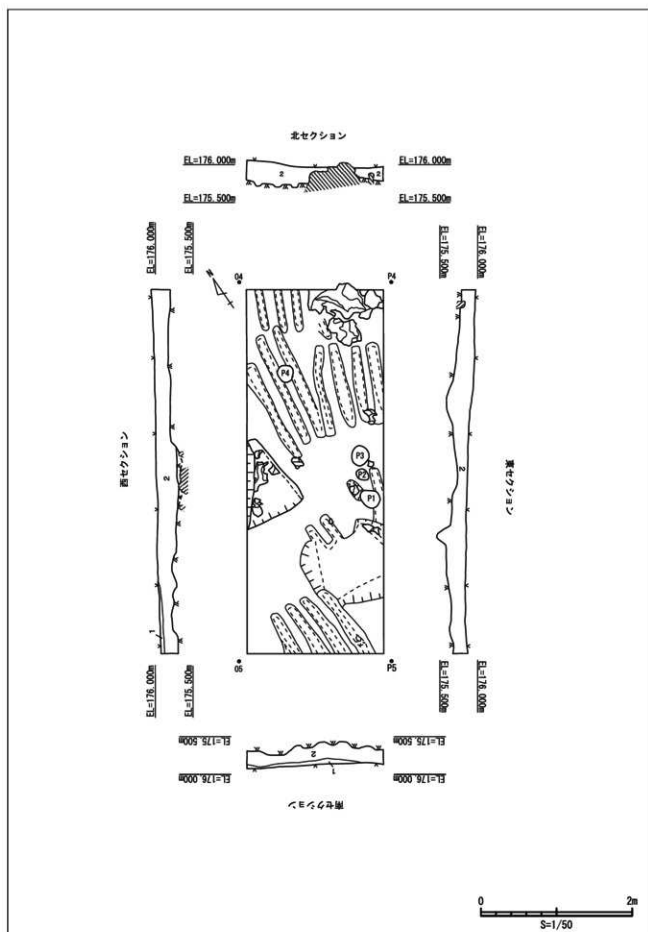
2層:全面に20cm程の厚さでひろがっている。戦後の耕作土であり、下層の地山面には重機のバケット痕が検出されている。

6層:地山層。

[2] 遺構

遺構は、小穴が4基検出されている。検出されている場所は、重機のバケット痕が確認されていない場所であることから、重機のバケット痕が検出された場所にもひろがっていた可能性が考えられる。

小穴については、他と同様に整備目的であることから、掘り込みを行っていないため、その内容を確認することはできていない。



第23図 P5グリッド平面図及び層序図 (S=1/50)

[3] 遺物 (第26図154, 第11表154, 図版57・58, 154)

遺物については、グスク時代相当期から近現代までのものが出土している。

1層からは、グスク土器8点、白磁2点、青磁5点、褐釉陶器1点、沖縄産陶器19点、煙管(陶製)1点、鉄片4点、焼土16点が出土している。

2層からは、グスク土器31点、カムイヤキ1点、白磁6点、青磁11点、青花5点、褐釉陶器4点、沖縄産陶器22点、鉄片7点、鉄鏝?1点、銃弾片1点、現代遺物1点、焼土48点が出土している。

また、隣接地であるO6グリッドから青磁が1点(154)表採されている。

154は青磁皿の底部であり、高台の外側下半が斜めに削られ、五角形を呈する。高台内側から外底は露胎を呈している。

9. P10グリッド発掘区 (第24図)

本地区は、B地区の中央南側石積み手前のP10グリッドに設定した。

発掘を進めると、すぐに2層が確認されており、それ以降の層序は確認されず、地山面ならびに岩盤が検出された。岩盤部以外の地山面には重機のバケット痕が発掘区の全面にひろがっており、僅かに複数の小穴が確認されている。

[1] 層序

層序は、3枚の層が確認されている。

1層:全面に2~6cm程で比較的厚くひろがっている。

2層:全面に20~30cm程の厚さでひろがっている。戦後の耕作土であり、下層の地山面には重機のバケット痕が検出されている。また、壁面での確認であるが、2層内に地表面から掘り込まれた小穴が2基確認されている。

6層:地山層。

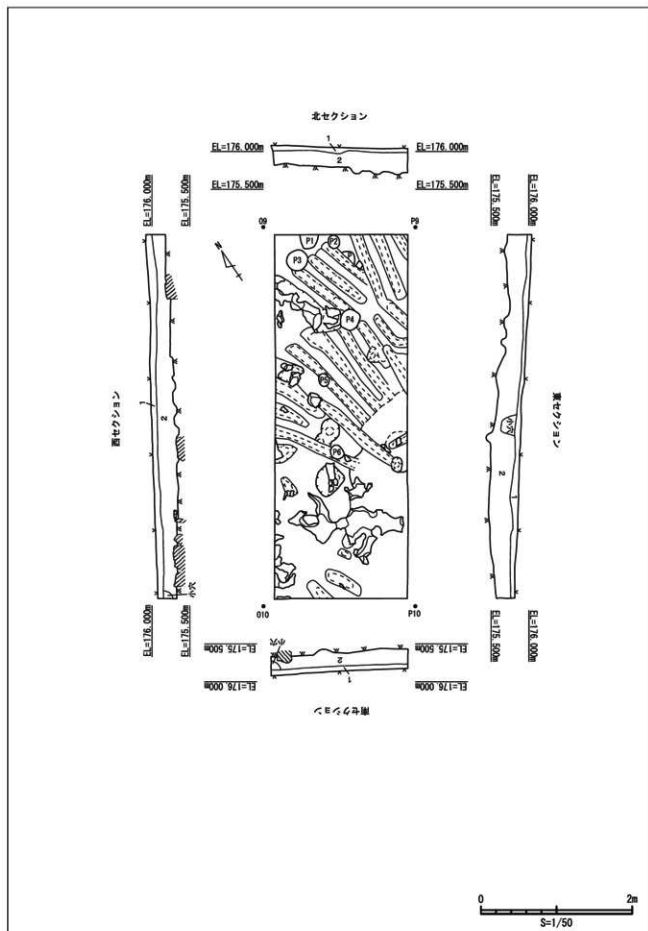
[2] 遺構

遺構は、小穴が6基検出されている。発掘区は、ほぼ全面に重機のバケット痕が確認されており、小穴は重機のバケット痕を縫うように検出されている。バケット痕部分にも小穴がひろがっていた可能性が考えられる。

小穴については、他と同様に整備目的であることから、掘り込みを行っていないため、その内容を確認することはできていない。

[3] 遺物 (第26図155・156, 第11表155・156, 図版57・58, 155・156)

遺物については、グスク時代相当期から近現代までのものが出土している。



第24図 P10グリッド平面図及び層序図 (S=1/50)

1層からは、グスク土器7点、白磁2点、青磁16点、青花7点、褐釉陶器7点、石材1点、海産貝1点、陸産貝1点、沖縄産陶器26点、近現代磁器1点、鉄製品1点(155)、丸釘1点、現代遺物5点、焼土4点が出土している。

155は方形の釘の可能性が考えられる。残存高は12.5cm、幅1.7cm程を測る。

2層からは、グスク土器43点、白磁8点、青磁37点、青花30点(156)、褐釉陶器26点、日本産陶器3点、陶器1点、石材5点、沖縄産陶器56点、近現代磁器2点、鉄片10点、焼土22点が出土している。

156は角皿の口縁片である。腰部で折れ、若干の丸みをもちながら、垂直気味に立ち上がる。外面は無文であるが、内面には草花文が描かれている。

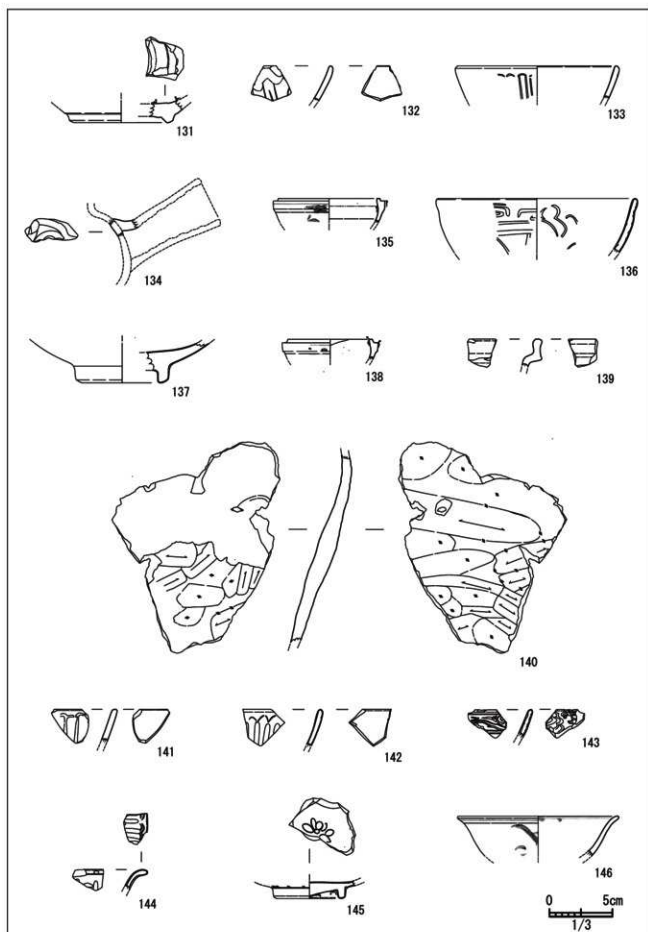
層序不明からは、青花1点、獣骨1点、焼土2点が出土している。

第10表 H22 実測遺物観察表①

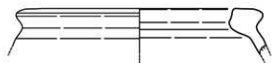
図/ 番号	出土区	出土 層位	遺物 種別	分類	観察事項	復原径 cm	胎土 混入物	色調
第25図 131	F6 ST	1層	沖縄産 施釉陶器 底部	—	見込みを蛇の目軸刺ぎしており、重ね焼き痕?がみられる。畳付きも軸刺ぎしている。	底:7.3	黒色粒 褐色粒	胎:浅黄橙(10YR8/3) 軸:灰白(5Y8/1)の上 一部、灰白(10Y7/1)が 付着
第25図 132	F5	2層	青磁碗 口縁部	—	直口口縁。外面に弁先を省略した線 描蓮弁文か。	—	黒色粒 褐色粒	胎:浅黄橙(10YR8/4) 軸:灰白(5Y8/2)、外面 一部に灰白(5Y7/2)が 付着
第25図 133	F6	2層	青磁碗 口縁部	—	直口口縁。外面の弁先が蓮弁として の単位を意識せずには施されている。	—	黒色粒 褐色粒	胎:浅黄橙(10YR8/4) 軸:灰白(5Y8/2)、外面 一部に灰白(5Y7/2)が 付着
第25図 134	F5	2層	沖縄産 無釉陶器 急須	—	バチ状に開く円筒形の急須の注口と 考えられる。胴部上面に黒印付けか。焼 成やや不良。	—	褐色粒	胎:灰(7.5Y6/1)、外面 橙(5YR7/8)
第25図 135	F11	2層	青花 合子 身 口縁部	—	口縁部を軸刺ぎしている。肩部に2条 の細線とその間に如意雲が描かされて いる。胴部には草花文がみられる。	口:8.0	黒色粒 褐色粒	胎:浅黄(2.5Y8/3) 軸:明緑灰(10GY8/1)
第25図 136	D8	2層	青磁碗 口縁部	上CII	直口口縁。外面口縁部に雷文帯とそ の下部に片写影の幅の広い進弁を持 つ。内面に草花文有り。	口:15.6	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(5Y7/1) 軸:灰オリーブ(5Y5/2)
第25図 137	D8	2層	青磁皿 底部	—	外面高台を斜めに削る。見込みに圈 線有り。	底:6.4	褐色粒	胎:灰白(2.5Y8/1) 軸:オリーブ灰(10Y6/2)

第11表 H22 実測遺物観察表②

図/ 番号	出土区	出土 層位	遺物 種別	分類	観察事項	復原径 cm	胎土 混入物	色 調
第25図 138	D8	2層	青花 合子 身 口縁部	—	口縁部軸刺ぎ。肩部に2条の圈線と その間に斑点有り。	口:6.8	黒色粒 褐色粒	胎:浅黄(2.5Y8/3) 軸:明緑灰(10GY8/1)
第25図 139	D8	2層	褐線陶器 口縁部	—	漏斗状口縁の瓶。口唇部丸く、頸 部が外側に張る形状。	—	黒色粒 褐色粒	胎:灰黄(2.5Y7/2) 軸:黒(10YR2/1)
第25図 140	I8	2層	グスク土器 胴部	—	内外面へら杵とナゲ調整。全体的に アバタ状を呈す。	—	白色粒 黒色粒 褐色粒	胎:橙(5YR6/6)
第25図 141	I8	2層	青磁皿 口縁部	上BIII	直口口縁。全体的に軸が薄く、口唇 部は軸が斜がけしている。外面に片切彫 によって蓮弁文が施される。	—	褐色粒	胎:灰白(2.5Y7/1) 軸:灰オリーブ(7.5Y 5/2)
第25図 142	I8	2層	青磁皿 口縁部	上BIV	口縁部がやや内湾する。細密蓮弁文 が施されており、弁先をへら先で削い ている。	—	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(5Y7/1) 軸:明オリーブ灰(2.5GY 7/1)
第25図 143	I8	2層	青磁皿 口縁部	上CIII	直口口縁。外面口縁部に3条の圈線 と便化した波状の雷文帯。内面口縁部 に草花文が施される。	—	褐色粒	胎:灰白(5Y8/1) 軸:明緑灰(7.5GY7/1)
第25図 144	I8	2層	青磁皿 口縁部	—	口縁部が外反する皿。内面に丸彫り の弁とへら先で弁先を削いた蓮弁文が みられる。	—	褐色粒	胎:灰白(2.5Y8/1) 軸:明オリーブ灰(2.5GY 7/1)
第25図 145	I8	2層	青磁皿 底部	—	高台断面四角形。高台内を蛇の目軸 刺ぎしている。見込みに草花文、外面 高台際にも蓮弁文が施されている。	底:5.2	褐色粒	胎:灰白(5Y8/1) 軸:明緑灰(10GY7/1)
第25図 146	I8	2層	青花碗 口縁部	小B?	端反碗。外面口縁部に圈線と草花文 有り。内面口縁部に2条の圈線と斑点 のような文様有り。呉漆の染色が強い。	口:12.7	褐色粒	胎:灰白(2.5Y8/2) 軸:灰白(2.5Y8/2)
第26図 147	I8	2層	褐線陶器 壺 口縁部	—	口縁部を折り曲げ肥厚させた後、口 唇を平坦に整えている。	口:19.6	褐色粒	胎:灰黄橙(10YR6/2) 軸:にぶい赤褐(2.5YR 4/3)
第26図 148	L8	1層	青磁碗 底部	—	内面施軸。外面は高台内途中まで軸 が掛かると思われる。外面に蓮弁文、 見込みに圈線有り。	底:6.0	黒色粒 褐色粒 灰色粒	胎:灰白(5Y8/1) 軸:灰白(10Y7/2)
第26図 149	K8	2層	青磁碗 口縁部	上BII または B1'	直口口縁。外面口縁部に2条の圈線 と幅の広い蓮弁文有り。	—	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(7.5YR8/1) 軸:オリーブ灰(10Y6/2)
第26図 150	M8	2層	青磁碗 口縁部	上BIV	直口口縁。外面口唇部に圈線が有り 、その下に片切彫の蓮弁文だが、弁 先はへら先による細線となっている。	—	褐色粒	胎:灰白(2.5Y8/1) 軸:灰白(10Y7/2)
第26図 151	K8	2層	青磁碗 底部	—	握付きから高台内が露出。軸は薄く 貫入有り。やや粗い仕上げ。	底:5.2	褐色粒	胎:にぶい橙(7.5YR 7/3) 軸:灰オリーブ(5Y5/3)
第26図 152	K8	2層	青花碗 底部	—	高台断面「ハ」の字状を呈す。握付き を軸刺ぎしており、砂目有り。外面高台 際に1条、高台と見込みにそれぞれ2 条の圈線有り。	底:5.5	褐色粒	胎:灰白(2.5Y8/1) 軸:明緑灰(10GY8/1)
第26図 153	S8	1層	青磁碗 口縁部	上DII	口縁部は外反する。口縁部際に丸み を持ち、軸がやや厚い。内面胴部に圈 線有り。	—	褐色粒	胎:灰白(2.5Y7/1) 軸:オリーブ灰(10Y5/2)
第26図 154	O6	表採	青磁皿 底部	—	高内面から高台内露出。握付きが やや平坦で高台断面四角形。見込みに 圈線有り。	底:7.1	褐色粒	胎:灰白(10YR8/1) 軸:明オリーブ灰(5GY 7/1)
第26図 155	P10	1層	釘	—	頭部が折れている。軸部の横断面は 正方形を呈す。錆がけられている。	残存高: 12.5cm 幅:1.7cm	—	—
第26図 156	P10	2層	青花皿 口縁部	—	6~8角形の器台。胴部に緩やかな角 を残す。内面に草花文が描かれている。	—	褐色粒	胎:灰白(2.5Y8/1) 軸:灰白(5GY8/1)



第25図 H22遺物実測図①(S=1/3)



147



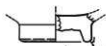
148



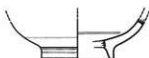
149



150



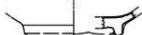
151



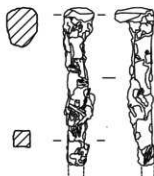
152



153



154



155



156



第26图 H22遺物実測図②(S=1/3)

第7節 平成 23・24 年度の成果

平成 23 年度は、石積みの性格を確認するために、石積みを跨いだ発掘区を 2 か所、石積みと石積み
が途切れた場所で、その連続性を確認するために 1 か所の発掘区を石積み囲いの北側に設置し、石積
み囲い内部の性格を確認することを目的として、A 地区の南東側のグリッド 4 か所に発掘区を設定した。

平成 24 年度は、平成 23 年度に発掘を行った 4 か所の発掘区から検出された小穴から想定される建
物跡のプランにつながる小穴を確認する目的で、発掘区に接する南側と東側に 5 か所の発掘区を設定し
た。

本節では、A 地区南東側の発掘区の成果を面的に記述するために、平成 23・24 年度をまとめて報告
する。

1. D2・3 グリッド発掘区（第 27 図）

本地区は、A 地区の北側石積みの西側、石積みの幅が厚くなっている場所であり、石積みの性格を確
認するために石積みを跨ぐように 6m×2m の範囲で発掘区を設定した。

発掘を進めると、発掘区内側（南側）では 3 層が厚く堆積していたが、外側（北側）では逆に 2 層が厚く、
3 層が岩盤上部や石積みの下部から確認された。全体的に層序の堆積は薄く、最深部で 1m 程であった。
遺構は石積みのみが確認されている。

[1] 層序

層序は、5 枚の層が確認されている。

1 層：発掘区全体に薄く（1～2cm 程）ひろがっている。

2 層：発掘区全体にひろがっているが、石積みの外側に厚く堆積している。

3 層：発掘区全体にひろがっているが、石積みの内側に厚く堆積している。

5 層：地山漸移層。

6 層：地山層。

[2] 遺構

遺構には石積みのみが確認されている。

石積みは、高さ 1.6m 程、幅 3m 程を測り、残存状態は良好である。両側ともに石面が丁寧に整形され
た石材を使用している。石積みの内側は岩盤上部を整地した後に積み上げられており、外側は土と礫を
用いて整地した後に積み上げられている。両側とも基礎部を丁寧に整地した後に積み上げており、石積
みは厚く築かれている。石積み内からの遺物を確認することができなかったことから、造成された時期を
明確に確認することはできなかった。

[3] 遺物（第 30 図 157～161、第 12 表 157～161、図版 69・70、157～161）

遺物としては、グスク時代相当期から近現代までのものが出土している。

1層からは、青磁1点、青花1点、褐釉陶器1点、焼土1点が出土している。

2層からは、青磁1点、小札1点(157)、鉄製品6点、沖繩産陶器1点、現代遺物1点が出土している。

157は籠の小札であり、形態は右下端が破損しているものの長方形を呈しており、糸結び用の小孔が穿たれている。2つが重なる形で出土していることから、使用当時から結ばれていたと考えられる。中央には留め金具のようなものがみられる。

3層からは、青磁3点(158・159)、褐釉陶器2点、刀身茎2点(160・161)、鉄片1点、沖繩産陶器9点が出土している。

158は碗の底部片であり、見込みに圏線と何らかの文様が描かれている。159は碗の外反口縁である。

160・161は刀身茎と考えられる。刃部は欠損しており、断面が長方形を呈する。160は中央に目釘穴がみられる。

2. 12 グリッド発掘区 (第28図)

本地区は、A地区の北側石積みの東側に位置しており、石積みの幅が薄くなっている。D2・3グリッド発掘区同様に石積みを跨ぐように2.5m×2mの範囲で調査区を設定した。

表土除去後、10cm程掘り下げたところで層序の確認をするため、石積み外側(北側)の西側にサブレンチを設定し、掘り進めたところ3層以降の層は確認できず、地山面が検出されたことから、全面的に地山面まで掘り下げた。発掘区は戦後耕作を行う際に、重機を使用した転地返しによって攪乱を受けていたが、石積みに近接する部分では、重機を使用しなかったためか、3層以降の層が確認されている。遺構は、石積みのみが確認できている。

[1] 層序

層序は、土質の違いから細分を行ったため、11枚の層が確認されている。

1層:発掘区全体に薄く(1~2cm程)ひろがっている。

2層:発掘区全体にひろがっているが、土質の違いから2つに細分した。

a:石積造成部分以外で厚く堆積している。戦後の耕作土である。

b:2a層同様に戦後の耕作土である。2a層に比べて粘りがある。

3層:主に石積み内側にひろがっている。土質や色合いから6つに細分した。

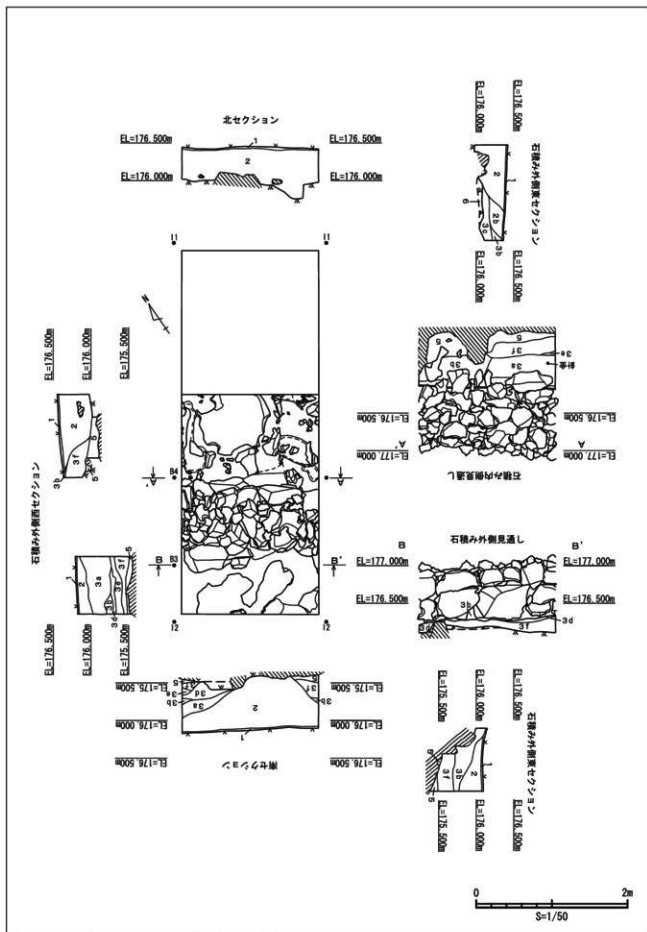
a:暗褐色土。しまりは悪く、ザラザラしている。石積み内側の根石下部付近にひろがっている。

b:暗褐色土。3a層よりしまりはよく、ザラザラしている。本層上部に根石が据えられ、石積みが積み上げられている。

c:暗褐色土。しまりはよく、粘り気がある。

d:明褐色土とにぶい黄褐色土がまだら状に混ざる層。明褐色土の割合が多い。しまりはよく、粘りがある。

e:にぶい黄褐色土。しまりはやや弱く、ザラザラしている。



第28図 12グリッド平面図及び層序図 (S=1/50)

f:明褐色土とにぶい黄褐色土がまだら状に混ざる層。しまりはよく、粘りがある。

3c層～3f層は、石積みを積み上げる前の基礎部であり、版築を行った可能性が考えられる。

5層:地山漸移層。

6層:地山層。

[2] 遺構

遺構には石積みが確認されている。

石積みは、高さ 1.0m程、幅 0.8～1.0m程を測り、残存状況は良好であり、両側ともに石面が丁寧に整形された石材を使用している。3層は上述したとおり石を積み上げるための整地層と考えられ、石積みは3b層から積み上げられているが、内外面ともに根石を据えるための掘り込みのラインは確認できなかった。石積み内からの遺物を確認することができなかったことから、造成された時期を明確に確認することはできなかった。

[3] 遺物

遺物としては、グスク時代相当期から近現代までのものが出土している。

1層からは、沖縄産陶器 1点が出土している。

2層からは、グスク土器 3点、青磁 2点、青花 1点、褐釉陶器 4点、魚骨 2点、赤瓦 1点、焼土 3点が出土している。

3a層からは、青磁 1点、褐釉陶器 2点、沖縄産陶器 2点、赤瓦 4点、焼土 1点、現代遺物 1点が出土している。

3. P2・3 グリッド発掘区 (第 29 図)

本地区は、B 地区の北側石積みが途切れている場所に位置する。石積みが途切れている場所には石灰岩がみられることから、石積みが連なるかを確認するために、6.5m×2mの範囲で発掘区を設定した。

石灰岩がみられる発掘区北側を 10cm 程掘り下げたところ、人頭大や礫の石材が面的に検出されたことから、石積みの基礎部にあたるものと考えられ、東西の石積みが連なると考えられる。発掘区南側からは遺構を検出することはできず、地山面が検出されている。

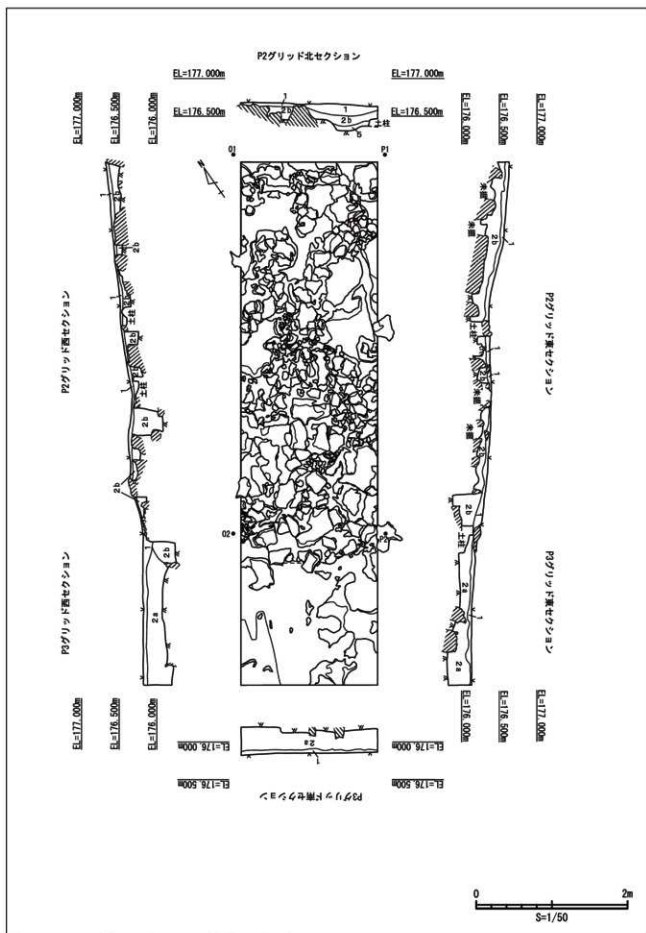
[1] 層序

層序は、4枚の層が確認されている。

1層:発掘区全体に薄く(1～2cm程)ひろがっている。

2層:発掘区全体にひろがっている。土質の違いから2つに細分した。

a:褐色土層。非常に固くしまっており、ザラザラとしている。0.5～1cm 大の焼土を含む。戦後の重機による押圧のためか、固くしまったものと考えられる。



第29図 P2・3グリッド平面図及び層序図 (S=1/50)

b: 褐色土層。少し粘りがあり、2a 層に比べるとしまりは悪い。人頭大や拳大の石が含まれている。2a 層と同様 0.5～1cm の焼土を含む。

5層: 地山層。

[2] 遺構

遺構には石積み基礎部が確認されている。

石積み基礎部は、人頭大や拳大の石または礫を使用して整地し、石積の基礎部として造成したものと考えられる。検出された基礎部の幅はかなり広く、最大幅で 13m を測る。これは、発掘区の東側と西側に所在する石積みの幅と比べても遜色がないことから、両側の石積みと検出された基礎部がつながるものと考えられる。

[3] 遺物（第 30 図 162・163、第 12 表 162・163、図版 69・70、162・163）

遺物としては、グスク時代相当期から近現代までのものが出土している。

1 層からは、グスク土器 2 点、カムイヤキ 1 点、青磁 2 点、褐釉陶器 1 点、磁器 1 点、石材 2 点、沖縄産陶器 6 点、砲弾片 1 点、現代遺物 1 点が出土している。

2a 層からは、グスク土器 2 点、白磁 3 点、青磁 2 点、沖縄産陶器 6 点、焼土 2 点、鉄片 1 点、砲弾片 1 点が出土している。

2b 層からは、グスク土器 2 点、カムイヤキ 1 点、褐釉陶器 1 点、瓦質陶器 1 点、沖縄産陶器 2 点、鉄片 1 点、現代遺物 1 点が出土している。

層序不明からは、グスク土器 1 点、石器片 1 点、玉 1 点(162)、沖縄産陶器 1 点、鉄製品 1 点、赤瓦 1 点が出土している。

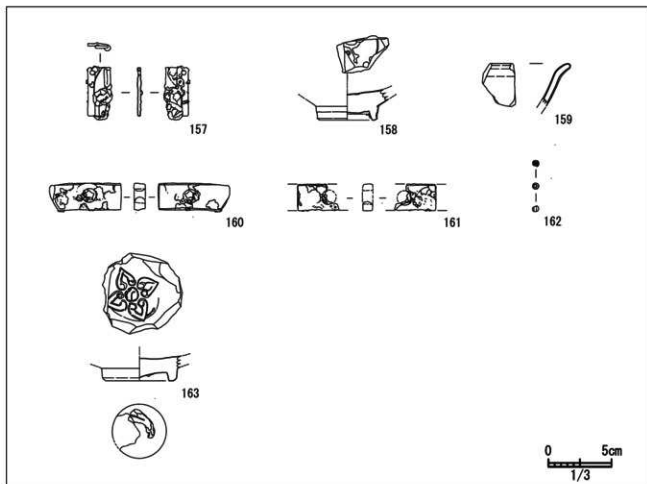
162 はガラス玉であり、青色を呈する。表面に螺旋状の筋がみられ、上下端が若干突出していることから、巻き上げ技法によって製造されたものと考えられる。

また、隣接する O1 グリッドから青磁 1 点(163)が表採されている。

163 は碗の底部片であり、高台は四角形を呈し、見込みに草花文が施されている。

第12表 H23 実測遺物観察表

図/ 番号	出土区	出土 層位	遺物 種別	分類	観察事項	復原径 cm	胎土 混入物	色調
第30図 157	D3	2層	小札	-	右下端は破損しているが長方形を呈している。糸結び用の小孔が開けられている。2つが重なって出土しており、使用当時から接していたものと考えられる。中央に留め金具のようなものがみられる。	-	-	-
第30図 158	D3	3層	青磁碗 底部	上B?	高台内を軸割ぎしている。外面高台際にて圈線有り。見込みに圈線と文様の一部が認められている。	底:4.3	褐色紋	胎:灰白(2.5YR/2) 軸:明オリブ灰(2.5GY 7/1)
第30図 159	D3	3層	青磁碗 口縁部	上DII	口縁部が外反している。軸が厚く、やや鈍い。	-	褐色紋	胎:にぶい黄橙(10YR 7/3) 軸:黄褐(2.5Y5/3)
第30図 160	D3	3層	刀身茎	-	刃部欠損。差込み先端部は長方形を示す。断面は長方形で中央に目釘穴有り。	-	-	-
第30図 161	D3	3層	刀身茎	-	刃部から目釘穴のところまでが欠損している。差込み先端部は長方形を示す。	-	-	-
第30図 162	F3	不明層	玉	-	表面に螺貝状の筋がみられるほか、上下端が若干突出していることから巻き上げ技法によって製造したものと考えられる。	-	-	青～紺色
第30図 163	O1	表土	青磁碗 底部	-	断面四角形の高台を有する。高台内の一部に軸が掛かっておらず、軸の部分に粘土が付着している。見込みに草花文有り。	底:5.4	黒色紋 褐色紋	胎:灰白(2.5YR/2) 軸:明緑灰(10Y7/2)



第30図 H23遺物実測図(S=1/3)

4. H・I10・11(平成23年度)、J10・11、H・I・J12(平成24年度)グリッド発掘区(第31～33図)

本調査区は、A地区南西側の隅に位置しており、石積みに隣接する形で発掘区を設定して調査を行った。

平成23年度はH・I10・11グリッドに発掘区を設定して調査を行った。表土除去後、2層が検出され、さらに掘り進めると地山が検出された。2層は戦後の耕作土であり、重機による転地返しのパケット痕が全グリッドより検出されたが、地山面の岩盤の間を縫うように多数の小穴が検出されている。小穴は柱穴に該当すると思われるものがあり、建物跡と想定される平面プランが確認された。

平成24年度は平成23年度に隣接する形で、J10・11、H・I・J12グリッドに発掘区を設定して調査を行った。前年度に想定された建物跡とつながる小穴を確認することを目的として実施し、建物跡と想定できる平面プランを1基確認することできた。

[1] 層序

層序は、7枚の層が確認されている。

1層:グリッド全体に薄くひろがっている。

2層:グリッド全体に20～25cmと厚く堆積している。

3層:J10・11・12グリッドにひろがっている。土質の違いから2つに細分した。

a:J10・11・12グリッドの石積み付近にひろがっており、重機による転地返しが及んでいないことから、他グリッドに比べて厚く堆積している。

b:J12グリッドで確認されている。J12グリッドの北東角の窪みに限定的に堆積している。3a層より柔らかく、削った感じはザラザラしている。

4層:J10・11・12グリッドの石積み付近や岩盤が検出されていない場所などにひろがっている。

5層:地山漸移層。

6層:地山層。

[2] 遺構

遺構には石積み、建物跡、小穴、土壌が確認されている。

(1) 石積み(第35図164、第13表164、図版83・84・164)

J10・11・12の東側から確認されている。石積みの下部には3層がひろがっていることから、石積みは3層より積み上げられたと考えられる。遺物として、石積みの内からはグスク土器12点、白磁2点、青磁8点、青花1点、褐釉陶器3点、鉄製品1点、鉄片1点、石材2点、獣骨2点、海産貝2点、沖縄産陶器7点、焼土24点、炭化物2点が出土している。建設された時期については、明確ではないが、沖縄産陶器が含まれていることから、遅くとも近世頃には積み上げられていたものと考えられる。

隣接するI13グリッドの石積み中込からは、青磁1点(164)を表採している。

164は碗の底部で高台の外周半ばから斜めに切った五角形を呈する。

(2) 建物跡 (第34図)

建物跡はH・111・12グリッドから検出されている。長軸が北東方向に延びており、検出された規模は東西4.6m程、南北3.9m程を測る。P23、26、29、32、72、100、122、146、159、175、195の小穴で構成されると想定している。

覆土は、黒褐色土又は暗褐色土であり、柱芯が確認できた小穴からはグスク土器2点、不明鉄製品1点、焼土8点が出土している。それ以外の小穴からはグスク土器5点、青磁3点、獣骨5点、魚骨1点、鉄滓1点、沖縄産陶器1点、焼土21点が出土している。大半の小穴からグスク時代相当期の遺物が出土することから、建物跡はグスク時代頃に建てられたと考えられる。

(3) 小穴 (第35図165~174、第13表165~174、図版83・84、165~174)

小穴は340基検出された。戦後の重機を使用した転地返しによって、遺構の上部はすでに掘削されている可能性が高く、現況の深さでの柱穴を確認することは難しく、上述のとおり建物跡は1基のみを確認するに留まった。

小穴の覆土には暗褐色土・黒色土・黒褐色土・にぶい黄褐色土・灰黄褐色土が確認されている。遺物については、暗褐色土からグスク土器18点、白磁2点、青磁4点(166・167)、青花2点、石斧1点、石材2点、鉄片1点、獣骨1点、海産貝3点、沖縄産陶器40点、焼土34点、炭化物2点、現代遺物1点出土している。暗褐色土で柱芯が確認された小穴からはグスク土器1点、玉1点(172)、焼土11点が、掘方が確認された小穴からは焼土2点が出土している。

166・167は皿の口縁片であり、166は外反しており、167はやや丸みをもち直口している。

172は玉で、表面は大半が剥離し、土砂等の付着している。

黒色土からはグスク土器1点、褐釉陶器1点、石材1点、獣骨1点、焼土11点が出土している。

黒褐色土からはグスク土器76点、カムイヤキ1点、白磁7点、青磁14点(174)、青花4点、褐釉陶器7点、日本産陶器1点、刀子1点、角釘1点、鉄製品5点、鉄片1点、鉄滓8点、石製品1点、石材4点、軽石製品1点、軽石1点、玉2点(169・170)、獣骨28点、魚骨10点、海産貝4点、沖縄産陶器30点、土壁片?26点、焼土602点、炭化物19点、近現代磁器1点が出土している。

黒褐色土で柱芯が確認された小穴からはグスク土器14点、白磁2点、青磁3点(173)、青花1点(171)、鉄製品1点、石製品2点、軽石1点、獣骨3点、魚骨2点、土壁?12点、焼土96点、炭化物1点が出土している。掘方が確認された小穴からはグスク土器2点、青磁1点、角釘2点、鉄片1点、石材1点、獣骨1点、焼土15点が出土している。

174は盤の底部片であり、碁筭底を呈している。

169はガラス製の玉であり、透明で翡翠色、縦断面が楕円状、横断面が六角形を呈す。170はガラス製の玉であり、表面が剥離しておりザラザラしている。

173は碗の口縁片であり、口縁に雷文が施されている。

171は碗の口縁片であり、内外面の口縁部に圏線が描かれている。

にぶい黄褐色土からはグスク土器1点、白磁2点、焼土8点が出土している。

灰黄褐色土からはグスク土器1点、鉄滓1点、石材1点、焼土8点が出土している。

土色不明覆土からはグスク土器 9 点、白磁 1 点(168)、青磁 13 点(165)、青花 5 点、褐釉陶器 7 点、青銅製品 1 点、獣骨 1 点、海産貝 1 点、沖縄産陶器 4 点、土壁片? 12 点、焼土 11 点が出土している。

168 は皿の口縁片であり、胴部は丸みを帯び、口縁部は内湾する。

165 は碗の底部片であり、釉が薄く、高台は方形を呈する。

覆土からの出土遺物は、その大半がグスク時代相当期に属する遺物であることから、小穴はグスク時代に掘り込まれたものと考えられる。しかし、近世期の沖縄産陶器などが少なからず含まれていることから、当該時期に掘り込まれた小穴も相当数は存在するものと考えられる。

(4) 土壌

111 グリッドから検出されている。直径が 60cm 程を測り、覆土は暗褐色を呈する。遺物としては石材 1 点、釘片 1 点、焼土 2 点が出土しており、周辺の小穴と同時期頃に位置付けられるものと考えられる。

[3] 遺物 (第 35~38 図 175~226、第 13~16 表 175~226、図版 85~92、175~226)

1 層からは、グスク土器 28 点、カムイヤキ 1 点、白磁 19 点、青磁 34 点(175・176)、青花 31 点(177~180)、褐釉陶器 26 点(181)、黒釉陶器 1 点、緑釉陶器 1 点、鉄絵 5 点、日本産磁器 3 点、日本産陶器 16 点、石斧 1 点、獣骨 2 点、魚骨 1 点、沖縄産陶器 29 点(182)、近現代磁器 2 点、鉄片 1 点、砲弾片 1 点、土壁片? 11 点、瓦 1 点、焼土 25 点が出土している。

175 は碗の直口口縁片であり、口縁部に片切彫りの蓮弁文が施されている。176 は盤の口縁片で、やや外反しており、内面口縁部に線描きの圏線と片切彫りの蓮弁文が施されている。

177 は碗の口縁片であり、外面に 2 条の圏線と草花文が描かれている。178・179 は碗の底部片であり、178 は内面に何らかの文様が描かれ、179 は高台が逆三角形を呈し、内外面に圏線が描かれている。180 は合子の蓋片であり、外面に圏線や如意雲文・花鳥文が描かれている。

181 は壺の胴部片であり、外面に何らかの文様が描かれている。

182 は碗の底部片であり、白化粧土で透明釉が施され、両面にコバルト釉で花文が描かれている。

2 層からは、グスク土器 270 点(183)、カムイヤキ 12 点(184)、白磁 284 点(185)、青磁 332 点(186~193)、青花 312 点(194~202、208)、褐釉陶器 163 点(203、204)、黒釉陶器 7 点(205)、緑釉陶器 14 点(206)、翡翠釉陶器 1 点、瑠璃釉陶器 1 点、鉄絵 4 点、高麗産陶器 7 点(207)、半練土器 1 点(209)、日本産磁器 57 点、日本産陶器 167 点、磁器 5 点、刀身茎 1 点、刀子 2 点(210)、角釘 5 点、鞆 1 点(211)、青銅製品 3 点(218)、古銭 1 点(219)、石斧 4 点(212・213)、石皿 1 点、石製品 6 点(214・215)、滑石製品 2 点(216)、石器 2 点、石材 33 点、玉 1 点(217)、土製品 1 点、獣骨 14 点、魚骨 2 点、海産貝 15 点、陸産貝 3 点、沖縄産陶器 232 点、不明陶器 8 点、不明磁器 1 点、近現代磁器 13 点、鉄製品 11 点、鉄斧 3 点、鉄片 41 点、釘 17 点、鉄滓 5 点、現代遺物 6 点、土壁片? 24 点、砲弾片 9 点、赤瓦 1 点、焼土 243 点、炭化物 12 点、現代遺物 4 点が出土している。

183 は壺形土器の頸部片であり、頸部は緩やかに屈曲し、ナデ肩を呈する。

184 は胴部片であり、外面に粗いナデ、内面にヘラ状工具による粗い調整が行われている。

185 は碗の底部片であり、高台はハの字状を呈し、見込みは釉剥ぎが行われている。

186・187は碗の口縁片であり、186は丸彫りの蓮弁文で、弁先はヘラ先による細線となっており、187は口縁が玉縁状を呈する。188～190・208は碗の底部片であり、188は高台がハの字状を呈し、見込みが盛り上がっている。189は見込みで蛇の目軸剥ぎが行われおり、190は高台外面の一部から高台内が露胎を呈している。191は皿の口縁片であり、口縁部を刻み花弁状を呈する菊花皿である。192・193は底部片であり、192は畳付が軸剥ぎされており、193は高台内が露胎を呈している。

194は青花碗であり、高台は斜めに削られ三角形状を呈し、胴部から丸みをもって直口する。外面に何らかの文様が描かれている。195は碗の直口口縁であり、外面に草花文が描かれている。196・197・208は碗の底部片であり、196は高台が三角形状を呈しており、197は内外面に文様が描かれている。208は高台がハの字状を呈している。198は皿であり、胴部がやや内湾し、口縁で端反りを呈する。199は口縁片であり、端反を呈する。200・201は底部片であり、200は見込みに2条の圈線と草花文、外面胴部に何らかの文様が描かれている。201は胴部が直線状を呈し、外面に芭蕉文が描かれている。202は匙(レンゲ)の柄。断面が三日月状を呈し、上端部に何らかの飾りが貼付されており、内面に草花文が描かれている。

203は壺の口縁片であり、口縁部を内側へ折り曲げ、口唇を平坦に仕上げている。胴部に2条の沈線が施されている。204は底部片であり、やや上げ底状を呈する。底部から立ち上がりの角は明瞭である。

205は碗の口縁片であり、口縁手前で内側に屈曲した後に、外反する。天目様と考えられる。

206は袋物の胴部片であり、外面に何らかの文様が施されている。

207は胴部片であり、外面にロクロ痕が、内面にナデによる調整痕がみられる。

209は壺の胴部片であり、外面に綾杉状の叩き痕が明瞭に残る。混入物が多量に含まれており、器面がザラザラしている。

210は刀子であり、茎部を欠き、身部は直線的で切っ先は尖る。

211は鞘であり、刀の柄の留め具である。菱形を呈し、中央に2つの孔が開けられている。

212・213は磨製石斧片であり、212は両刃であり、刃先のみが出土している。213は片刃であり、使用により刃部が一部欠けている。214は敲き石片であり、基部に敲打痕がみられる。215は砥石片であり、5面使用されている。216は滑石片であり、全面が磨かれており、何らかの使用があったと考えられるが不明。

217はガラス製の玉であり、黒色を呈する。上部に紐で結んだ際の擦痕がみられる。

218はジューパーであり、竿は六角柱となり、先端は六角錐を呈す。

219は中国銭の元豊通宝である。

3a層からは、グスク土器30点、カムイヤキ2点、白磁39点(220・221)、青磁52点(222・223)、青花42点、褐釉陶器34点、黒釉陶器1点、緑釉陶器2点、鉄絵2点、日本産磁器9点、日本産陶器3点、沖縄産陶器54点(224)、不明陶器3点、不明磁器3点、小札1点、角釘3点、鉄製品10点、鉄片6点、鉄滓3点、敲き石2点、石製品5点、滑石製品1点、石材4点、青銅製品3点、獣骨6点、海産貝4点、土壁片?5点、近現代遺物1点、砲弾片1点、焼土10点、炭化物7点が出土している。

220・221は碗の底部片であり、ともに見込みの軸剥ぎが行われている。

222・223は碗の底部片である。222は高台が五角形を呈し、外面に線刻蓮弁文が施されている。223は高台内側が斜めに削られ、三角形状を呈し、見込みに草花文が施されている。

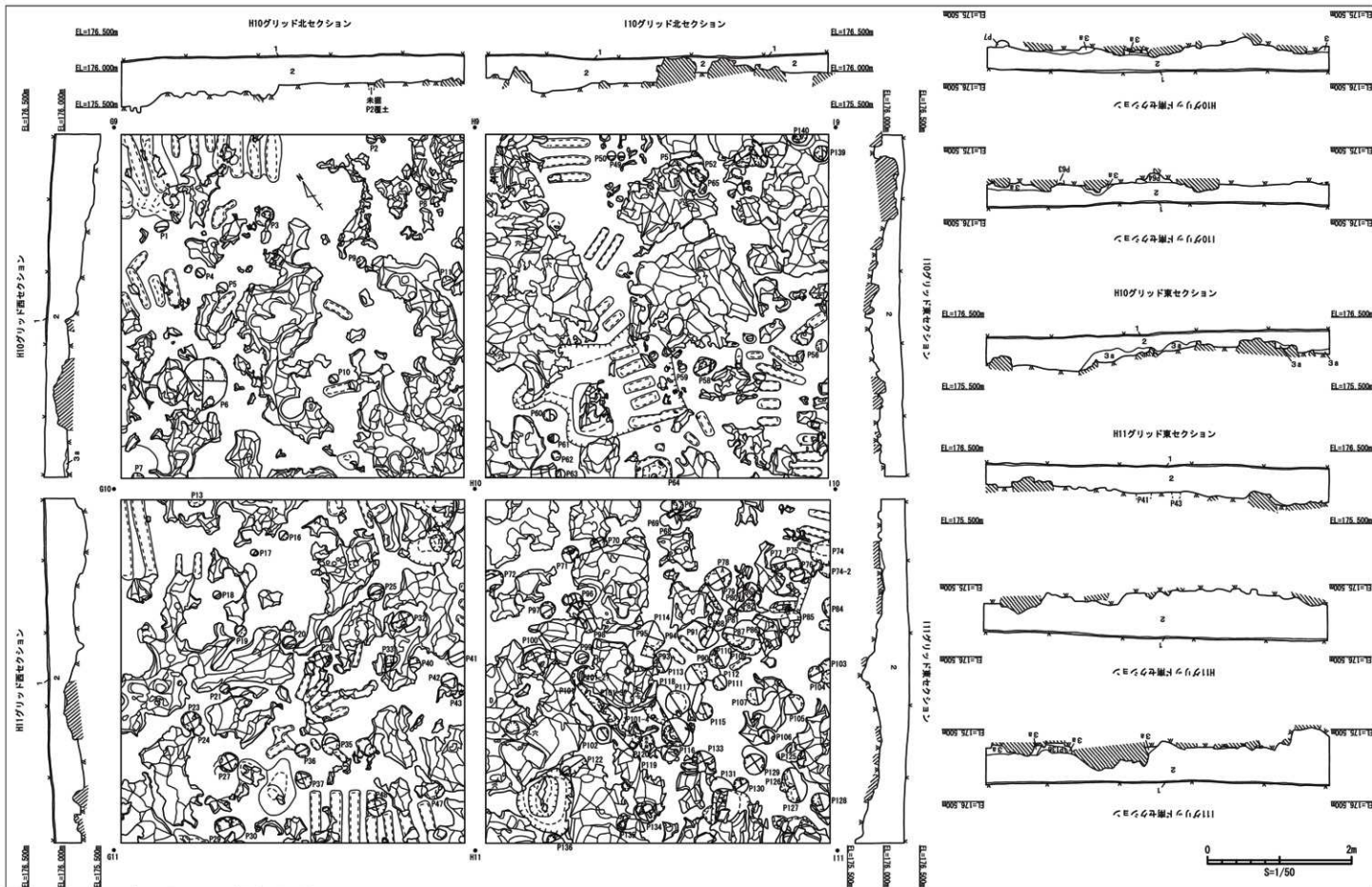
224 は小碗であり、胴部が六角形に面取りされている。

層序不明からは、グスク土器 9 点、カムイヤキ 1 点、白磁 2 点、青磁 20 点(225)、青花 6 点、褐釉陶器 15 点、鉄絵 1 点、日本産磁器 1 点、日本産陶器 2 点、青銅製品 1 点(226)、石器・石材 2 点、獣骨 5 点、海産貝 1 点、沖縄産陶器 12 点、焼土 13 点が出土している。

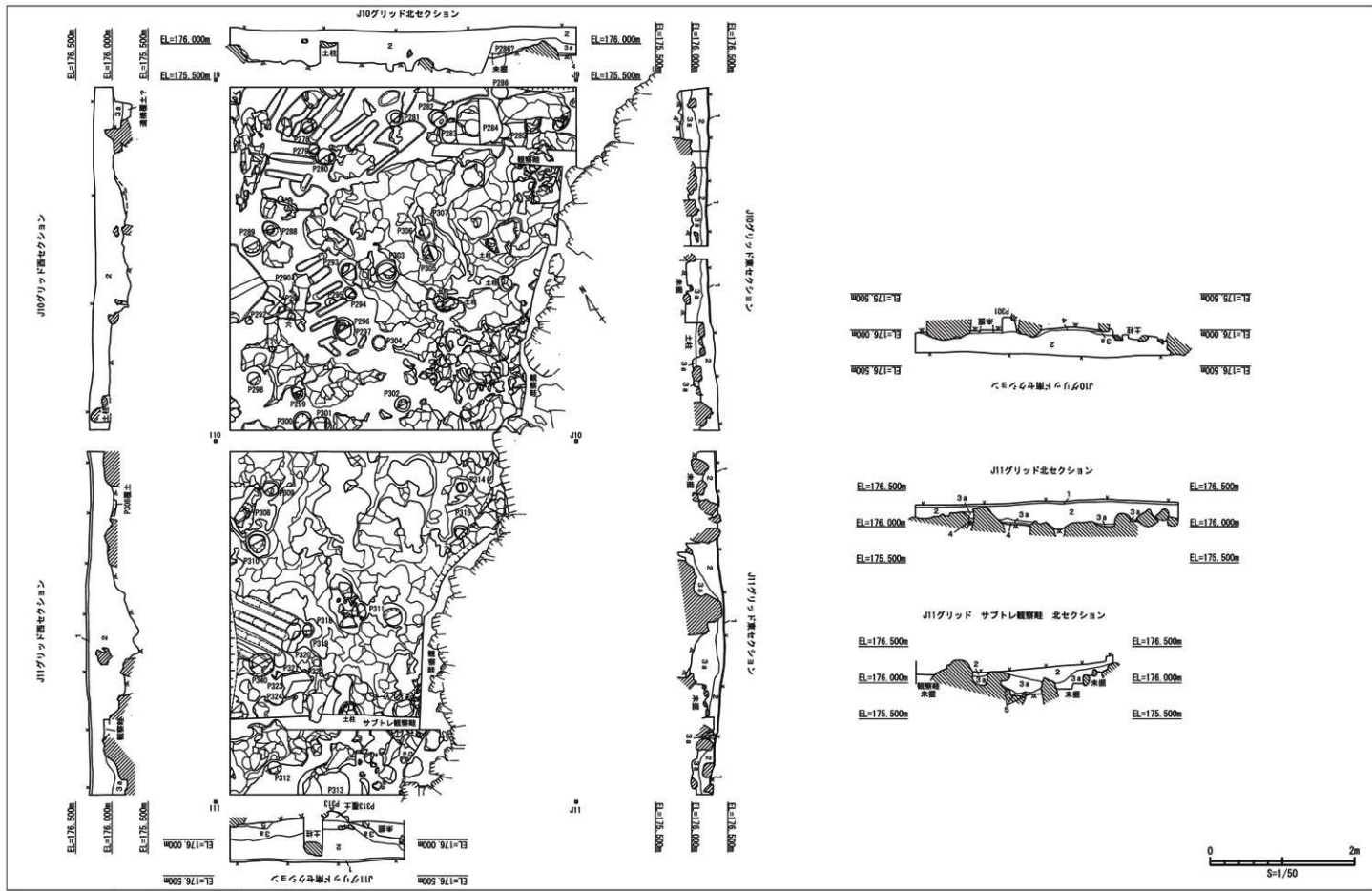
225 は皿の口縁片であり、口縁は外反し、稜花が施されている。

226 は飾り金具であり、先端が二股に分かれており、上部に花文の小穴が開けられている。

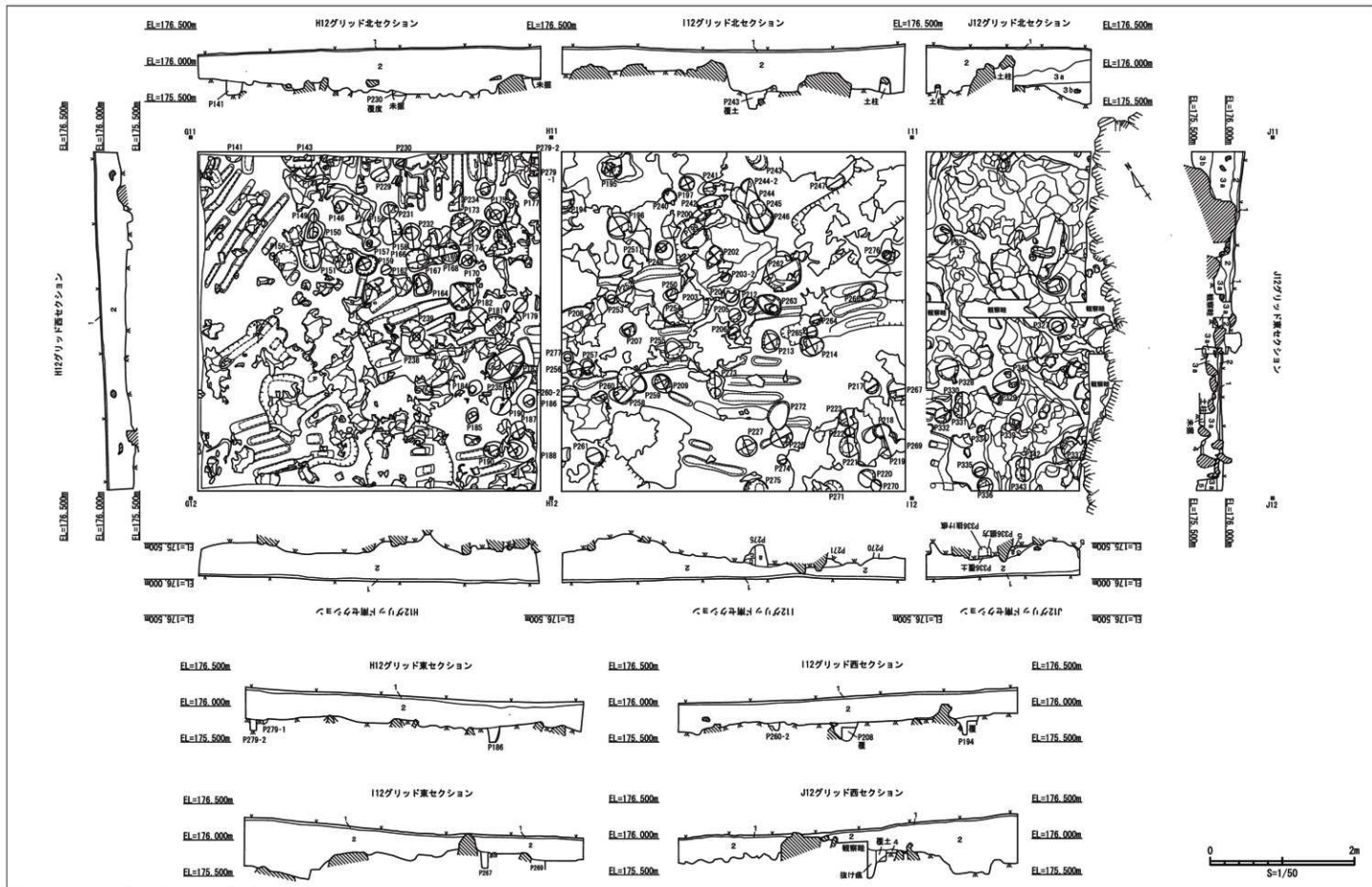
表採遺物として、白磁 1 点、青磁 1 点、青花 1 点、日本産陶器 1 点がみられる。



第31図 H・110・11グリッド平面図及び層序図 (S=1/50)

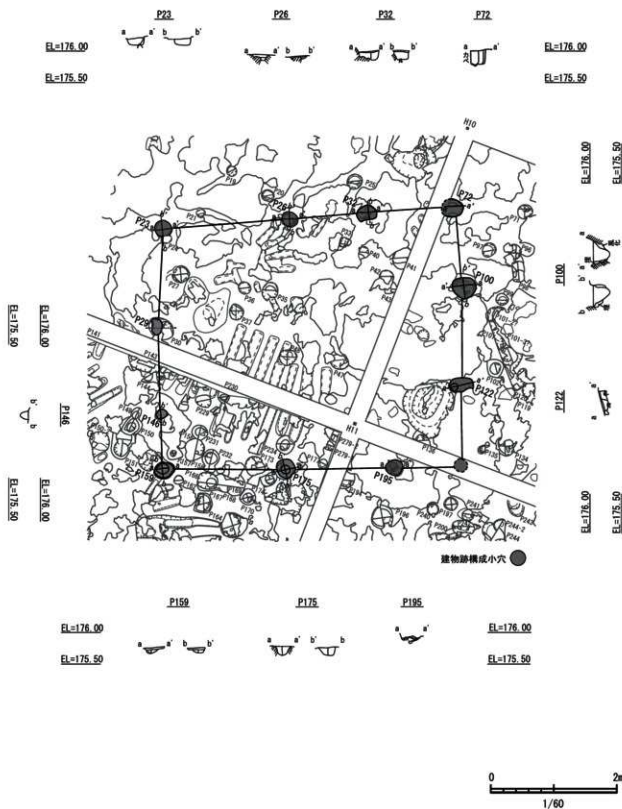


第32図 J10・J11グリッド平面図及び層序図 (S=1/50)



第33図 H・I・J12グリッド平面図及び断面図(S=1/50)

H・111・12 遺構位置・断面図



第34図 建物跡プラン想定図(S=1/60)

第13表 H23-24 実器遺物観察表①

図/ 番号	出土区	出土 層位	遺物 種別	分類	観察事項	復原径 cm	胎土 混入物	色 調
第35図 164	I13	石積 中込内 採集	青磁碗 底部	上AII	高台外面まで施釉後、高台端部周辺 を軸割ぎ。裏胎と施釉の境は赤褐色を 呈す。外面高台を斜めに有る。	底:4.0	白色粒 黒色粒	胎:灰白(10YR/8/1) 軸:オリーブ灰(10Y6/2)
第35図 165	H10	pit7 不明	青磁碗 底部	上DI	軸が薄く、一部外面高台まで軸が掛 かるが、畳付きを軸割ぎ、高台内は露 胎している。	底:5.4	黒色粒 褐色粒	胎:灰(7.5Y6/1)、芯部 はにぶい橙(7.5YR7/3) 軸:灰オリーブ(5Y6/2)
第35図 166	I10	pit38 dca1 暗褐	青磁皿 口縁部	-	やや丸みのある口縁部、胴部で内側 に屈曲しており、内側の稜は明瞭であ る。	口:13.2	白色粒 黒色粒	胎:にぶい黄橙(10YR 7/4) 軸:灰オリーブ(5Y6/2)
第35図 167	I11	pit121 暗褐	青磁皿 口縁部	-	外面胴部下半から裏胎、一部軸割 がみられる。	口:10.0	白色粒	胎:にぶい橙(7.5Y6/4) 軸:灰オリーブ(5Y6/2)
第35図 168	H12	pit172 不明	白磁皿 口縁部	森C	口縁部は内湾する。腰部が膨らんで いる。	口:9.0	黒色粒	胎:灰白(5Y8/1) 軸:灰白(5Y7/1)
第35図 169	H12	pit182 黒褐 色	管玉	-	縦断面が楕円状、横断面が六角形を 呈す。	-	-	橙、一部乳白色が混じる
第35図 170	H12	pit190 黒褐色	ガラス 製品? 玉	-	表面が剥離しておおざらざらしてい るが、上部・下部の孔の境が若干尖っ ていることから巻きつけ技法により制作 されたと思われる。	-	-	白色、一部青色が付着
第35図 171	I12	pit217 (柱芯)黒 褐色	青花碗 口縁部	-	内外面の口縁部に圈線有り。	口:12.0	褐色粒	胎:灰(10Y8/1) 軸:灰白(7.5Y7/1)
第35図 172	J10	pit287 (柱芯) 暗褐色	ガラス製品 玉	-	表面は大半が剥離し、土砂等の付着 で汚れている。螺旋状の筋が観察でき る。	-	-	白濁
第35図 173	J10	pit289 (柱芯) 黒褐色	青磁碗 口縁部	上CII	外面口縁部に雷文帯有り。	口:13.3	黒色粒 褐色粒 一部 白色粒	胎:浅黄橙(7.5Y8/4) 軸:黄橙(2.5Y5/3)、外 面の一部分が灰白に染変
第35図 174	J11	pit369 黒褐色	青磁盤 底部	-	高台内の帯まで施釉。基筒底に近い 底部を有する。	底:10.8	白色粒 黒色粒 褐色粒	胎:明焼灰(7.5Y7/2) 軸:オリーブ灰(10Y6/2)
第35図 175	J11	1層	青磁碗 口縁部	上BIII	直口口縁、口縁部に比べて胴部の器 厚が薄い。口縁部に圈線が有り、その 下こ片々置の蓮弁文有り。	口:11.6	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(10Y8/2) 軸:明焼灰(7.5Y8/1)
第35図 176	I10	1層	青磁盤? 口縁部	-	口縁部がやや外反する。内面口縁部 に線描きの圈線と片切彫の蓮弁文有 り。	-	褐色粒	胎:灰白(2.5Y8/1) 軸:オリーブ灰(10Y6/2)
第35図 177	H11	1層	青花碗 口縁部	-	直口口縁、内面口縁部に圈線有り。 外面は口縁部に2条の圈線と草文が描 かれている。	口:15.8	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5Y8/1) 軸:灰白(10Y8/1)
第35図 178	H11	1層	青花碗 底部	-	見込みや高台内側と比べて高台外面 の軸が厚い。内面に文様の一部分が描 かれている。	-	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5Y8/2) 軸:灰白(10G7/1)
第35図 179	H11	1層	青花碗 底部	-	高台断面逆三角形を呈す。畳付き軸 割ぎ、縁部の稜須で見込みに2条の圈 線有り。また、外面胴部2条の圈線と 文様の一部、高台にも圈線がみられ る。	底:6.2	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5Y7/1) 軸:灰白(5GY8/1)
第35図 180	I10	1層	青花 合子 蓋 口縁部	-	口唇部と内面口縁部を軸割ぎしてい る。外面に圈線と如意雲、花鳥文が 描かれている。	口:7.5	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5Y8/1) 軸:灰白(5GY8/1)
第35図 181	J11	1層	褐陶器 有文銅器	-	内面に当て具痕、外面にへら状工具 による調整がみられる。	-	黒色粒 褐色粒	胎:にぶい黄橙(10YR 6/4) 軸:灰オリーブ(5Y5/3)

第14表 H23-24 実測遺物観察表②

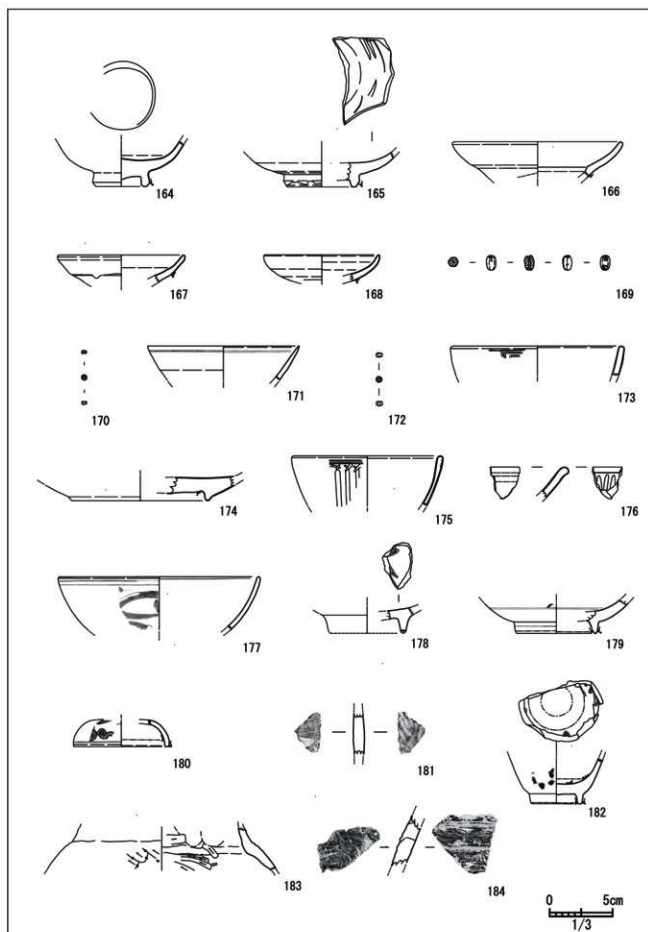
図/ 番号	出土区	出土 層位	遺物 種別	分類	観察事項	復原径 cm	胎土 混入物	色調
第35区 182	I10	1層	神楽座 施輪陶器 底	-	黒付き輪刺ぎ。高台内蛇の目輪刺ぎ。全体的に輪が粗い。内外面にコンパクトで花文が施される。貫入有り。	底:4.0	白色粒 黒色粒	胎:にぶい黄橙(10YR 7/3) 輪:灰白(10YR/2)
第35区 区版 183	J10	2層	グスク土器 胴部	-	頸部は緩やかに屈曲し、ナゲ肩である。内外面とも粗いナゲと指圧で仕上げている。内面は朱塗り、外面一部にも朱が残る。	-	褐色粒	胎:橙(5YR7/6)
第35区 184	I11	2層	カムイナキ 胴部	-	外面粗いナゲ。内面はヘラ状工具による粗い調整。一部、指押さえたナゲ。	-	白色粒 褐色粒	胎:灰(N5/)
第36区 185	J10	2層	白磁碗 底部	-	高台断面「ハ」の字状。見込みを輪刺ぎしている。外面は胴部下半から高台内が露出しており、高台を斜めに削っている。	底:4.8	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5YR/1) 輪:灰白(NR/)
第36区 186	H10	2層	青磁碗 口縁部	上BIII	丸彫りの蓮弁文だが、弁先はヘラ先による細線が施される。	-	褐色粒	胎:灰白(2.5YR/1) 輪:オリーブ灰(10YR/2)
第36区 187	J11	2層	青磁碗 口縁部	上DII	玉縁口縁碗。いわゆる佐敷タイプ。内面胴部に文様の一部が描かれている。	口:16.0	白色粒 黒色粒 褐色粒	胎:灰白(10YR7/1) 輪:灰オリーブ(5Y4/2)
第36区 188	I10	2層	青磁碗 底部	-	外面は高台の一部に輪が掛かず、豊付きから高台内は露出している。高台内のヘラ削りがやや粗く、高台断面を「ハ」の字状に成形している。見込みが盛り上がる。貫入有り。	底:5.9	黒色粒	胎:浅黄橙(10YR8/4) 輪:灰白(7.5Y7/2)
第36区 189	I12	2層	青磁碗 底部	-	見込みは蛇の目輪刺ぎ。外面高台から高台が露出しており、一部に輪が付着する。外面高台を斜めに削る。	底:6.8	黒色粒 褐色粒	胎:にぶい黄(5YR7/4) 輪:灰白(7.5Y7/2)
第36区 190	I12	2層	青磁碗 底部	-	外面高台は一部輪が掛かっていない箇所有り。豊付きから高台内が露出している。	底:4.5	褐色粒	胎:にぶい黄(5YR7/4) 輪:灰黄(2.5Y6/2)
第36区 191	I11	2層	青磁皿 口縁部	-	菊花皿。口縁部を菊み花弁状にしている。内外面に丸彫りの蓮弁文を施している。	-	褐色粒	胎:浅黄(2.5Y7/3) 輪:灰オリーブ(5Y5/2)
第36区 192	I12	2層	青磁皿 底部	-	豊付き輪刺ぎ。見込みには圈線と草花文がみられ、外面には蓮弁文がみられる。	底:6.2	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5YR/1) 輪:明緑灰(7.5GY7/1)
第36区 193	H11	2層	青磁皿 底部	-	内面高台から高台内は露出している。高台は低く、外面高台を斜めに削り仕上げている。見込みと高台間に圈線有り。	底:5.6	褐色粒	胎:灰白(2.5YR/2) 輪:オリーブ灰(10Y5/2)
第36区 194	J10	2層	青花碗 口～底部	-	内外面胴部まで施輪。見込み、外面胴部下半から露出している。高台内面を斜めに削る。外面胴部に具須(明緑灰)で文様を指す。	口:12.8 底:5.0	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5YR/1) 輪:灰白(5Y7/1)
第36区 195	H12	2層	青花碗 口縁部	小B?	直口口縁。内面口縁部に圈線有り。外面口縁部に圈線と胴部上半に山水文?が描かれている。呉須の発色は鈍い。	口:14.2	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5Y7/1) 輪:灰白(5Y7/1)
第36区 196	H11	2層	青花碗 底部	-	外面胴部下半から高台内が露出している。外面高台を斜めに削る。外面胴部に圈線有り。	底:6.7	黒色粒 褐色粒	胎:浅黄(2.5YR/4) 輪:灰白(2.5YR/2)
第36区 197	H11	2層	青花碗 底部	-	高台は露出している。外面高台に圈線が有り、貫入はほぼなし。内面は見込みに圈線と草花文が有り、細かい貫入もみられる。	-	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5YR/1) 輪:明緑灰(10GYR/1)
第36区 198	H12	2層	青花皿 口～底部	小B2	豊付き輪刺ぎ。高台から胴部がやや内湾し、口縁が盛られている。見込みに2本の圈線と草花文の一部が描かれている。	口:11.5 底:6.6	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5YR/1) 輪:明緑灰(10GYR/1)

第15表 H23-24 実部遺物観察表③

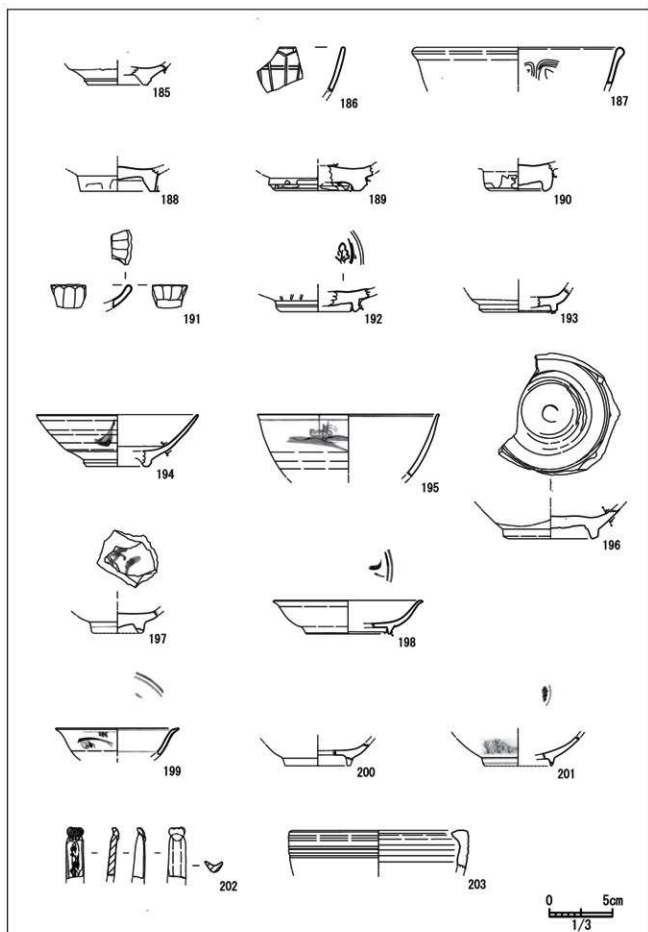
図/ 番号	出土区	出土 層位	遺物 種別	分類	観察事項	復原径 cm	胎土 混入物	色 調
第36図 199	I12	2層	青花皿 口縁部	小B1	口縁部文様。内面口縁部に2条の 圓線有り。外面胴部二唐草文有り。	口:9.6	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(5YR/1) 釉:明緑灰(10GY8/1)
第36図 200	H10	2層	青花皿 底部	-	見込みに2条の圓線と草花文。外面 胴部に文様の一部が描かれている。高 台縁、高台にもそれぞれ圓線有り。	-	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5YR/1) 釉:明緑灰(10GY8/1)
第36図 201	I11	2層	青花皿 底部	小C	広く開いた胴を持つ。外面胴部に色 蕉葉文、高台に2条の圓線有り。見込みに 圓線と草花文有り。	-	褐色粒	胎:灰白(2.5YR/2) 釉:明緑灰(10GY8/2)
第36図 202	J10	2層	青花 匙	-	匙(レンゲ)の柄。横断面三日月状。 端部に脚を付。上面端部が内側に圓 線と中央に唐草文が描かれている。	-	褐色粒	胎:灰白(2.5YR/2) 釉:明緑灰(10GY8/1)
第36図 203	H12	2層	褐釉陶器 口縁部	-	碗形碗か?口縁部の粘土を内側へ 折り曲げ、口唇を平坦に仕上げている。 外面胴部に2条の沈線。内面胴部 にカキ目有り。	口:13.6	黒色粒 褐色粒	胎:黄灰(2.5Y6/1) 釉:外面黒褐(5YR 3/1)、内面灰褐(5YR 4/2)
第37図 204	H10	2層	褐釉陶器 底部	-	やや上げ底状の底部。底部から胴部 への立ち上がりは角が明瞭である。	底:14.2	白色粒 黒色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5Y7/1)、 底部にぶい橙(10YR 7/3)
第37図 205	I11	2層	黒釉陶器 口縁部	天目?	口縁部は逆「く」の字状に組ま れている。外面胴部下半まで施されている。	-	-	胎:にぶい橙(5YR6/4) 釉:黒釉、錆釉
第37図 206	J10	2層	緑釉陶器 胴部	-	外面に文様の一部が施されており、 緑釉で施されている。胴部と文様の一 部は黄釉で色付をしている。内面ナ デ。	-	黒色粒 褐色粒	胎:浅黄橙(10YR8/3) 釉:緑釉、黄釉
第37図 207	J11	2層	高麗陶器? 胴部	-	外面はクロコ痕がみられる。内面ナ デ調整。	-	白色粒 黒色粒 褐色粒	胎:灰(5Y6/1)
第37図 208	H12	2層	青花 底部	-	高台漸開「ハ」の字状。外面は腰部 下から高台内まで覆胎している。高台 内の骨がやや粗い。	底:4.0	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5YR/2) 釉:灰白(5GY8/1)
第37図 209	J11	2層	半施土器 胴部	-	内面は丁寧なナデだが、混入物が 多量で表面がザラつく。外面はヘラ状 工具で特徴的な凹を強調している。	-	白色粒 黒色粒 褐色粒	胎:浅黄橙(7.5YR8/4)
第37図 210	J11	2層	刀子	-	切先と基部と欠。全面に錆ぶれが 広がり肥大しているが、峰部は直線的と 思われる。	-	-	-
第37図 211	H11	2層	青銅製品 鞍	-	刀の柄の留め具として使用されたも の。菱形を呈し、中央に2つの孔が開 けられている。	-	-	-
第37図 212	H10	2層	石斧片	-	上部欠損。3面に磨きかける。	-	-	-
第37図 213	H10	2層	石斧片	-	上部欠損後に磨き有り。石斧としての 使用後に転用と思われる。刃部に使用 時の欠けがみられる。上部にも剥離有 り。	-	-	-
第37図 214	H11	2層	磁石	-	上部欠損。磁き痕有り。	-	-	-
第37図 215	I12	2層	磁石片	-	下部欠損。5面磁面。携帯用磁石と思 われる。前面に骨粉痕がみられ、一部、 決りの痕がみられる。	-	-	-
第37図 216	I12	2層	滑石製品	-	石鏡口縁部。口縁部がやや内湾し、 口唇平坦。内外面に二次加工時と思わ れる削り痕有り。穿孔による破断面が1 か所みられる。	-	-	-
第37図 217	H11	2層	玉	-	上部にヒモの擦痕のような痕がみら れる。下部の孔の周りが磨かれている。	-	-	にぶい黄褐色

第16表 H23・24 実測遺物観察表④

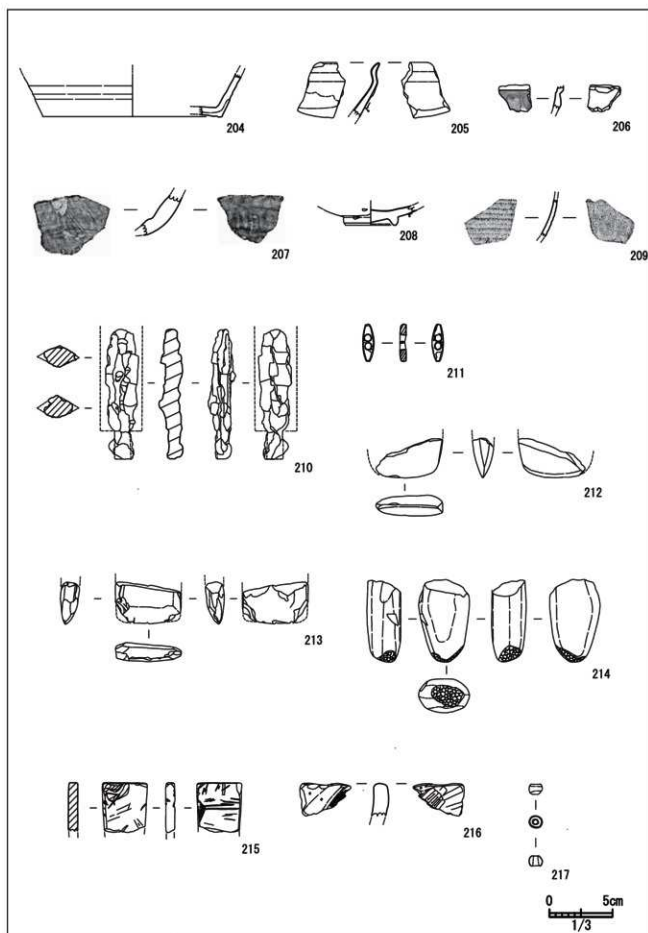
図/ 番号	出土区	出土 層位	遺物 種別	分類	観察事項	復原径 cm	胎土 混入物	色調
第38図 218	J10	2層	ジーファー	—	平は六角柱となり、先端は六角錐を呈す。ジーファーと思われるが、カブが欠損し、折れ曲がっているため、全長や首線の細口は不明。	—	—	—
第38図 219	H10	2層	古銭	—	元豊通宝と考えられる。	—	—	—
第38図 220	J10	3層 dot23	白磁碗 底部	—	高台断面四角形。見込みと外面縁部以下は露胎している。	底:5.9	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5Y8/1) 軸:灰白(5GY8/1)
第38図 221	J12	3層 dot24	白磁碗 底部	—	見込みを軸割定してあり、畳付きから高台内寄は露胎している。高台外面を粗織に斜めに削る。	底:4.8	白色粒 黒色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5Y8/1) 軸:明輝灰(10BG7/1)
第38図 222	J12	3層	青磁碗 底部	上BIV	畳付きまで施釉。一部畳付きを越え、外底まで釉だれ。高台外面を斜めに削る。外面に横刻の連弁文か。畳付きに重ね焼き痕有り。貫入有り。	底:4.8	白色粒 黒色粒	胎:灰白(2.5Y7/1) 軸:明輝灰(7.5GY7/1)
第38図 223	J11	3層 dot4	青磁碗 底部	—	畳付きから高台内寄は露胎している。見込みに圓線と草花文が描かれている。	底:4.6	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(5Y7/1) 軸:オリーブ灰(10Y6/2)
第38図 224	J11	3層 dot7	神楽座 施釉陶器 小碗	—	外反口縁。外面に六角形の面取りを施す。白化粧をし、全面に施釉後、見込みを軸の目軸割ぎし、畳付きも軸割ぎしている。貫入有り。	口:8.3 底:3.7	—	胎:浅黄橙(10YR8/3)
第38図 225	J10	3層 dot29 掘瓦2 重地層?	青磁皿 口縁部	—	腰折れ外反皿。口縁部は模花。内面口縁部に圓線有り。	底:10.8	黒色粒 褐色粒	胎:灰白(2.5Y7/1) 軸:オリーブ灰(2.5GY 6/1)
第38図 226	I12	重機 覆土	青銅器 飾の金具	—	先端が二股に分かれている(八双金物?)。孔が楕形。下部がやや袋状を呈す。	—	—	—



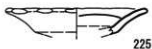
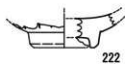
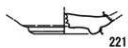
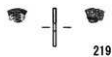
第35图 H23・24遺物実測図①(S=1/3)



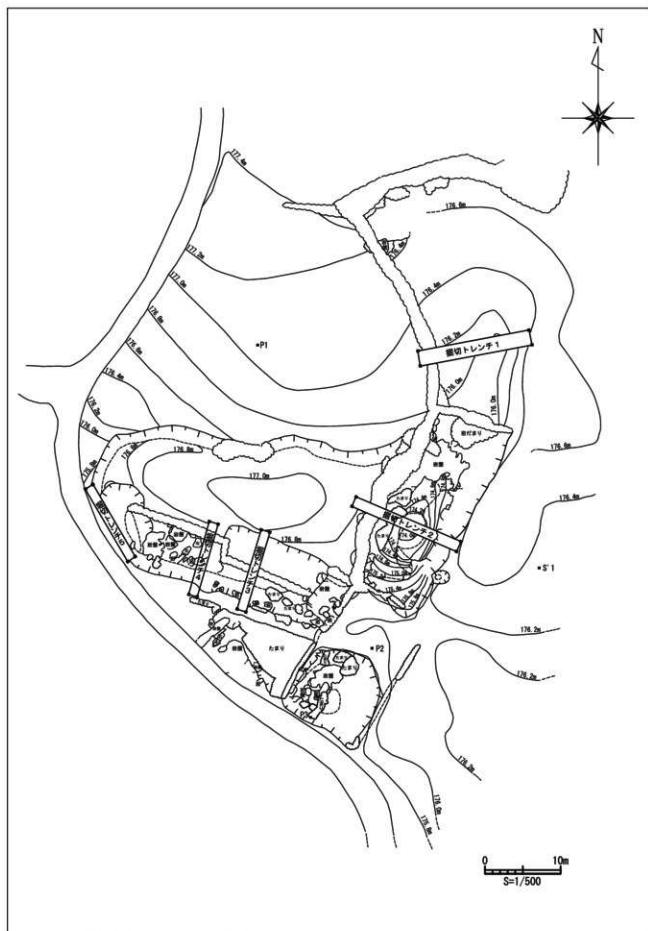
第36図 H23・24遺物実測図②(S=1/3)



第37図 H23・24遺物実測図③(S=1/3)



第38図 H23・24遺物実測図④(S=1/3)



第39図 堀切状遺構周辺平面図 (S=1/500)

第8節 平成 25 年度の成果

堀切地区は、糸数城跡正面(東側)から東へ約 130mの地点にあり(第 3 図)、糸数城跡と蔵屋敷跡を画すように穿たれている。平面プランは L 字状を呈し、南北軸は幅 10m程、長さ 50m程、東西軸は幅 5~8m程、長さ 40m程の規模を測る。断面形は毛抜堀状の空堀となっており、法面の勾配は約 40 度となっている。

同地区は、これまでに遺構の帰属時期が判然としていなかったため、暫定的に糸数城跡との関係性から堀切状遺構と称しているが、過去の聞き取り調査によれば、太平洋戦争末期の沖縄戦において、旧日本軍が地元住民を動員し、蔵屋敷跡周辺で戦車壕を構築させたとの証言が得られている(『糸数アブチラガマ』p.17、『玉城村史』第 6 巻 戦時記録編)。

そこで今年度は、これまで未詳となっていた堀切状遺構の築造された時期及び性格を把握するための調査を実施した。調査区は、南北軸に 2 か所、東西軸に 2 か所、東西軸延長部の道路側に 1 か所を設定した(第 39 図)。

1. 堀切トレンチ 1 (第 40 図)

本地区は、南北軸堀切状遺構の北側に位置しており、堀切状遺構が北側へ延びていくのかを確認する目的として、15m×2mの範囲で発掘区を設定した。

表土除去後、トレンチ南側にサブトレンチを設定し、層序の確認を行った。2 層を掘り下げると、石積みの東側で堀切状遺構の法面と考えられる層が確認できた。さらに掘り下げたところ、1.2m前後で地山面が検出された。西側法面付近の地山面からは、小穴が確認されている。また、石積み西側では、クチャ層を取り除くと旧表土が現れた。旧表土を掘り下げると、礫混じりの層となったので、石積みの基礎部と判断し、掘り下げを止めた。

[1] 層序

本調査区では、8 枚の層が確認されている。石積みを境として、東側と西側で異なる層序が確認されている。

1層: 黒褐色土層。表土であり、耕作放棄後の堆積層。石積み東側では粘りがなく、しまっており、石積み西側では少し粘りがみられ、柔らかい。

2層: 耕作土。質的に多少の違いがみられたため、3 つに細分した。

- 灰オリーブ色土に暗灰黄色土や褐色土が混ざる層。粘りがあり、しまっている。耕作のためにクチャを客土している。石積みから西側にひろがっている。
- 明褐色土に暗褐色土やにぶい黄褐色土がまだらに混ざる層。耕作土または埋土。堀切状遺構を埋めた後、耕作によって攪乱されている。堀切状遺構を埋める際に押圧したか、固くしまっている。石積みから東側にひろがっている。
- 褐色土ににぶい黄褐色土や暗褐色土が混ざる層。堀切状遺構を埋める際、大小様々な石材を混ぜながら埋めたと思われる。層内よりプラスチック片や塩ビ製品等の現代遺物が含まれていることか

ら、戦後になって埋められたものと考えられる。石積みから東側にひろがっている。

3層: 明褐色土に暗褐色土やにぶい黄褐色土が細かく混ざり、全体的に褐色を呈す。粘りはほとんどなく、サラサラしている。堀切状遺構がつくられた後、風雨等により、削られた法面等の土が流れ込んだ層と考えられる。石積みから東側にひろがっている。

4層: 暗褐色土またはにぶい黄褐色土層。粘りはほとんどなく、サラサラしている。細かい焼土や土器小片を含む。本層には礫が多く入っていることから、石積みの基礎部と判断した。石積みから西側にひろがっている。

5層: 地山風化土。東側法面と掘底の一部に残る。東側法面は暗褐色土に明褐色土がひろがっている。少し粘りがあり、しまっている。掘底はクチャと明褐色土が混ざり、粘りがある。

6層: 地山層。粘りがあり、しまっている。東側法面は明褐色土に鉄分やマンガンが多く含まれ、西側法面に比べて少し黒っぽくみえる。

[2] 遺構

遺構には、堀切状遺構、石積み、小穴が確認されている。

(1) 堀切状遺構

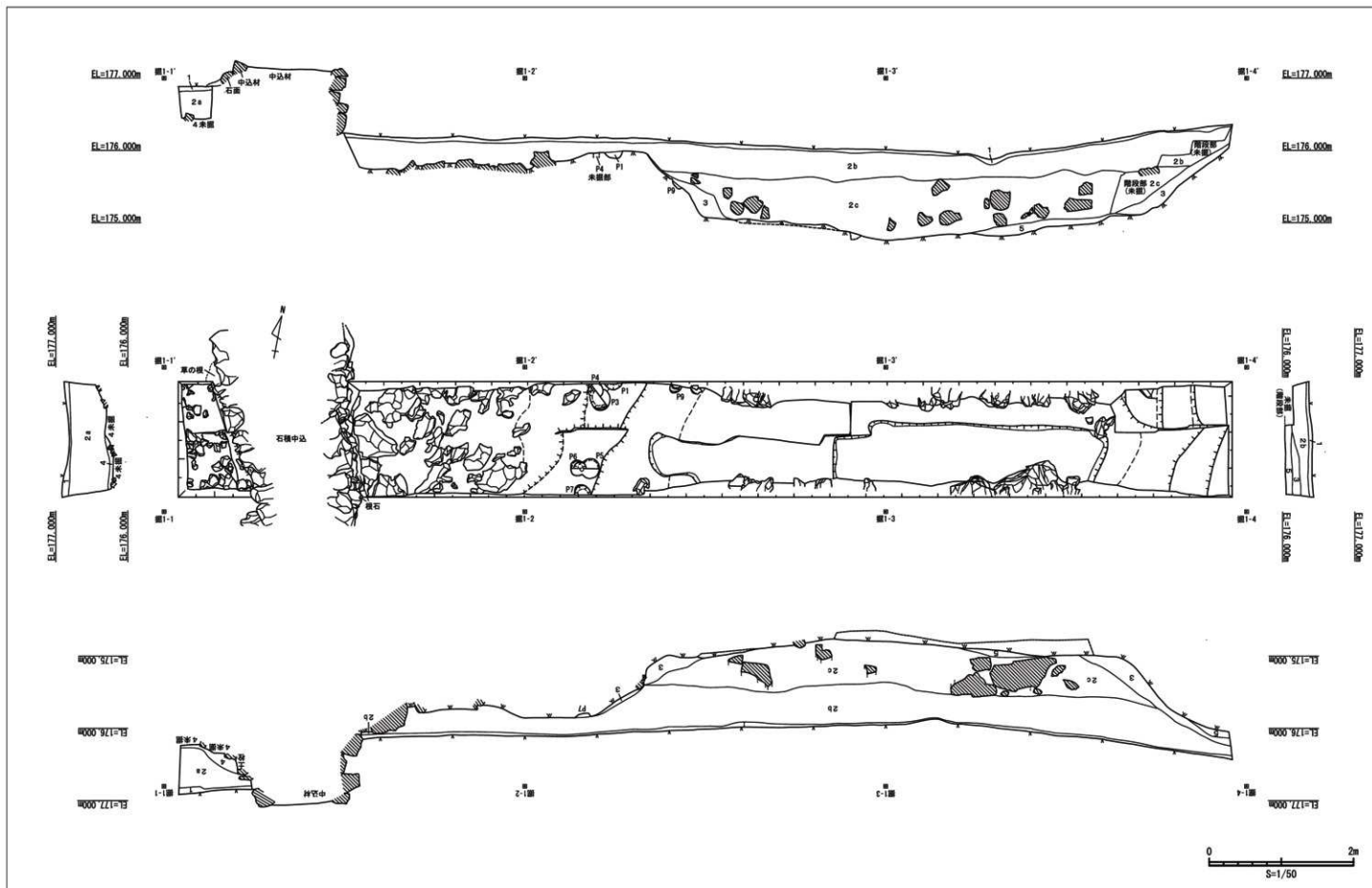
石積みの東側に位置している。堀切状遺構を埋める際の客土中からは、現代遺物であるプラスチック片や塩ビ製品等が出土するため、戦後に埋められたものと考えられる。また、堀切トレンチ1-2杭と1-4杭付近より、堀切状遺構の法面と考えられる層が確認された。断面観察からすると、形態は毛拔堀状に掘り込まれている。堀切上端の幅は 8.1m程、深さ(垂直壁高)はトレンチ東側から掘底面まで 1.6m程となっている。

さらに、堀切状遺構の北側への延び方としては、石積みに沿って緩やかに曲がるのではなく、北東方向へまっすぐ延びることが想定される。

(2) 石積み

石積みは、南北軸堀切状遺構の西側に沿う形でみられる。内外面及び中込材ともに琉球石灰岩を用いている。堀切状遺構の掘り出した土を利用し、その盛土の両側に石を積みあげて築かれたと考えられる。石積みは、高さ 1m程、幅 1.5~1.9m程を測り、自然石もしくは粗く加工された面をもった石が積まれており、残存状態は比較的良好である。石積みの西側には、戦後に耕作を行った際、客土としてクチャが持ち込まれており、その下部には沖縄産陶器が出土する 4層が潜り込んでいる。

石積みの基礎となる根石は、4層の基盤層の上から据えられている。石積みを挟んで東側と西側で堆積層の状況が異なり、両者を比較検証したところ、西側にオリジナルの層序が残っていると考えられる。このような状況から 4層は、蔵屋敷地区の礫混じりの土盛りの基礎である 3層と同一層序であると考えられる。



第40図 堀切トレンチ1 平面図及び層序図 (S=1/50)

(3) 小穴 (第45図227、第17表227、図版111・112、227)

小穴は22基検出されている。P4はP3を切った状態で検出された。大きさは、P3が幅30cm、P4が幅20cmで、深さは共に15cm程を測る。覆土は、P3は2層が確認でき、上層が黒褐色土、下層が褐色土となっており、P4は暗褐色土である。遺物としては、P3の黒褐色土より簀1点(227)、焼土3点、褐色土よりグスク土器1点、P4より焼土2点が出土している。P9は暗褐色土に明褐色土が少し混ざる。堀切状遺構を造成した後、法面等の土が流れ込んだと考えられる3層の下部から検出されている。

[3] 遺物 (第45図228～231、第17表228～231、図版111・112、228～231)

遺物としてはグスク時代相当期から近現代までのものが出土している。

1層からは、グスク土器4点、沖縄産陶器1点が出土している。

2a層からは、グスク土器14点、カムイヤキ1点、白磁1点、青磁10点、青花1点(228)、褐釉陶器1点、石材1点、勾玉1点、沖縄産陶器3点、鉄片2点、金属製品2点、葉莢1点、鎌?1点、ガラス瓶1点が出土している。

228は基筒底の小杯の底部片であり、底部から胴部へ開き気味に立ち上がる。

2b層からは、グスク土器61点、カムイヤキ3点、白磁4点、青磁62点(229)、青花15点(230)、褐釉陶器28点、石器1点、獣骨4点、海産貝1点、沖縄産陶器28点、近現代磁器5点、鉄片1点、金属製品1点、角釘1点、銃弾2点、砲弾片1点、焼土8点、現代遺物3点が出土している。

229は青磁碗の底部片であり、見込みと外面体部下半から高台内が露胎を呈している。

230は青花の底部片であり、畳付から高台内面途中までが露胎を呈している。

2c層からは、グスク土器30点、カムイヤキ4点、白磁3点、青磁19点、青花5点、褐釉陶器4点、黒釉陶器1点、刀子1点、石材2点、獣骨1点、海産貝1点、沖縄産陶器9点、近現代磁器1点、鉄片6点、金属製品2点、砲弾片1点、葉莢1点、針金1点、瓶2点、現代遺物5点、焼土2点、不明3点が出土している。

3層からは、グスク土器26点、白磁1点、青磁7点(231)、青花2点、褐釉陶器2点、沖縄産陶器3点、鉄滓1点、金属製品3点、青銅製品1点、針金1点、石材1点、焼土28点が出土している。

231は碗の底部片であり、高台外面の一部から畳付きと高台内が露胎を呈しており、見込みには草花文が描かれている。

4層からは、グスク土器8点、白磁1点、青磁1点、青花2点、沖縄産陶器1点、焼土6点が出土している。

2. 堀切トレンチ2 (第41図)

本地区は、南北軸堀切状遺構の中央付近に位置しており、15m×1.4mの範囲で発掘区を設定した。表土除去後、2層を80cm程掘り進めた。礫の含有量等の違いによって2層に細分を行ったものの、共に現代遺物が出土することから、戦後の耕作に伴う攪乱層であることが確認できた。さらに、西側法面上に位置する石灰岩については石面が確認できず、法面から掘底にかけてみられる石灰岩についても、表土

または 2b 層上に位置することが確認できた。そこで、石灰岩を除去し、掘り進めたところ地山面が検出されたため、掘り下げを終了した。

[1] 層序

本調査区は、石積みの東側と西側で層序が異なり、堀切トレンチ 1 と同一の層序になると判断された。しかし、各層とも土質の違い等から、さらに細分することが可能であったことから、12 枚の層が確認されている。

1 層: 表土層。質的に多少の違いがみられたため、2 つに細分した。

a: 暗褐色土。耕作放棄後の堆積土である。

b: 全体的に褐色を呈し、堀切状遺構が埋められた後に堆積した層。一部、石積みから崩れ落ちた石が入り込んでいる。流れ込み層のため、しまりは悪く、柔らかい。石積みから東側にひろがっている。

2 層: 耕作土又は埋土層。質的に多少の違いがみられたため、3 つに細分した。

a: 明褐色土や褐色土がまだら状に混ざる耕作土層。粘りがあり、少ししまりがある。石積みから西側にひろがっている。

b: 全体的に明赤褐色土を呈す。堀切状遺構を埋めるために使用された土である。一部しまりがあるものの、全体的にしまりは悪く、本層よりプラスチック製品などの現代遺物が出土している。石積みから東側にひろがっている。

c: 褐色土と一緒に大小様々な石が混ざり合わさった雑混じり層。本層より軍刀と考えられる鉄製品が出土している。堀切状遺構を埋めるために石を投げ込んだためか、埋め方が粗く、所々に大きな隙間がみられる。石積みから東側にひろがっている。

3 層: 明褐色土ににぶい黄褐色土が細かく混ざり、全体的に褐色を呈す。堀切状遺構が埋められる前に流れ込んだ堆積層。しまりはほとんどなく、サラサラしている。石積みから東側にひろがっている。

4 層: 石積みの東側と西側で異なることから細分した。

a: にぶい黄褐色土層。小石や拳大の礫を含む。粘りは少しあり、柔らかい。石積みを築く前に地固めとして小石や礫を混ぜて整地した層。石積みは、その上に積み上げられたと考えられる。石積みから西側にひろがっている。

b: 褐色土層。少し粘りがあるが、しまりは弱い。柔らかくサラサラしている。石積みから東側にひろがっている。

5 層: 褐色土層。しまりは弱く、柔らかくサラサラしている。

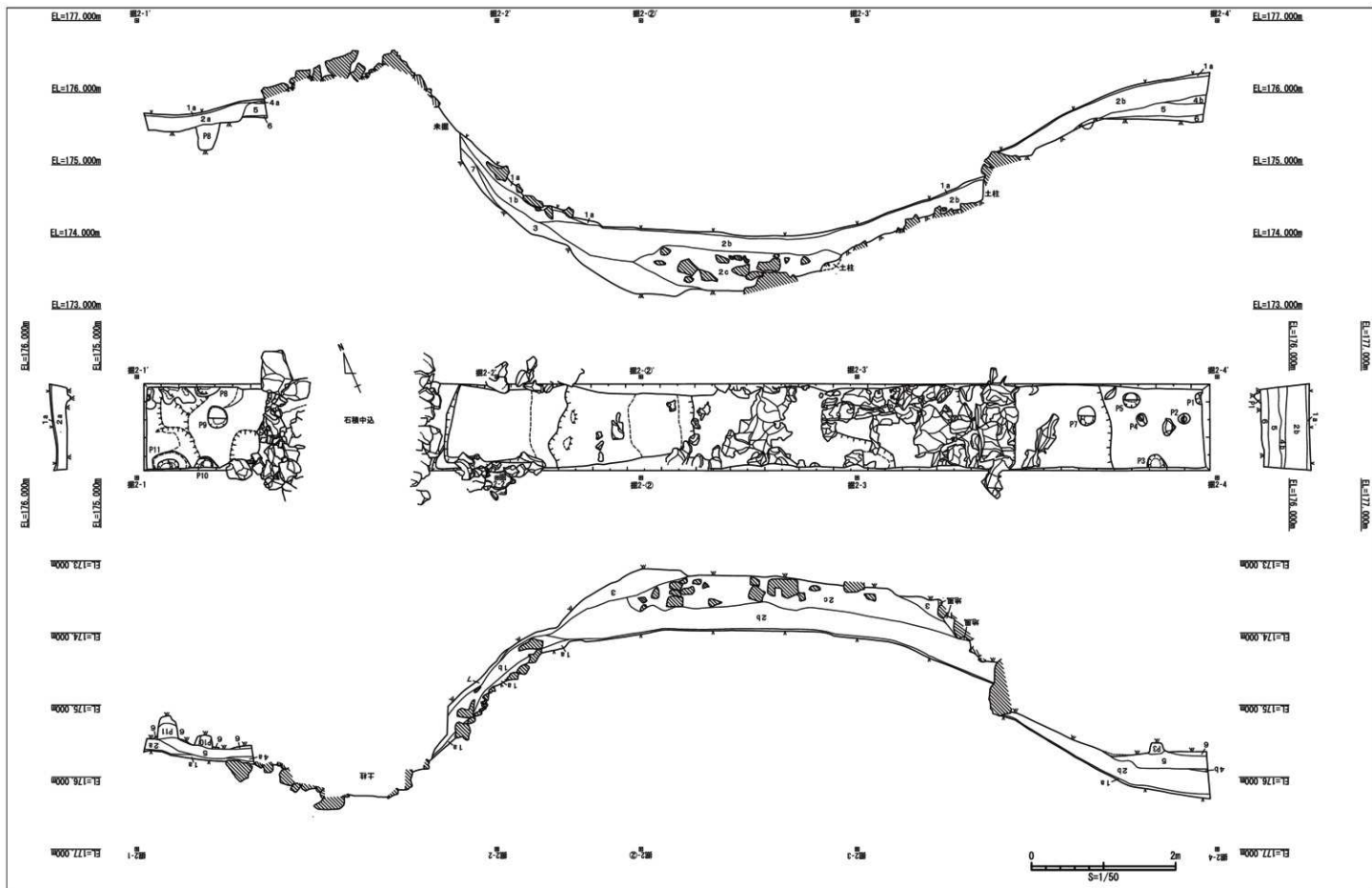
6 層: 褐色土層。地山漸移層。5 層に比べ、粘りがあり、しまっている。

7 層: 明赤褐色土層。地山風化土。

8 層: 明褐色土層。地山層。

[2] 遺構

遺構には、堀切状遺構、石積み、小穴が確認されている。



第41図 堀切トレンチ2 平面図及び層序図 (S=1/50)

(1) 堀切状遺構

石積みの東側に位置しており、堀切状遺構の中で最も深く掘り込まれている。堀切状遺構を埋める際の埋土は、プラスチック片や塩ビ製品等の現代遺物とともに、大小様々な石のほか、軍刀と考えらえる鉄製品が共存していることから、戦後に埋められたものと考えられる。また、3層からも缶片や砲弾片が出土している。掘底は、岩盤が露出して凸凹となっているが、地ならしするため平坦に整地した可能性も考えられた。また、断面観察からすると、形態は毛抜堀状に掘り込まれている。堀切上端の幅は9m程、深さ(垂直壁高)は石積側上端から掘底面まで2.2m程、トレンチ東側から掘底面まで2.7m程となっている。さらに、トレンチ2の南側にも一部、窪地になっている場所がみられることから、堀切状遺構がさらに南側へ続いていると考えられ、南北軸堀切状遺構は南側の丘陵端部の崖まで延び、糸数城跡と蔵屋敷地区を切る目的で造られた可能性が高いと考えられる。

(2) 石積み

石積みは、南北軸堀切状遺構の西側に沿う形でみられる。本トレンチにおいても、石積みの東側と西側では層序が異なっている。石積みは、堀切状遺構造成時に掘り出した土を利用した盛土の両側に石を積みあげて築かれたと考えられる。石積みは、高さ70～80cm程、幅2.2m程を測り、自然石もしくは粗く加工された大小さまざまな石が雑に積まれている。これは、本来積まれていた石積みが、東側の堀切状遺構に崩れ落ちてしまい、石積み中込石が露出した状態である可能性も考えられる。西側の4a層は小石や礫を含み、石積みを築く前に地固めとして小石や礫を混ぜて整地し、その上に石を積んでいたと考えられることから、トレンチ1の4層と同様、石積みの基礎部と考えられ、蔵屋敷地区の3層と同一層序であるとされる。

さらに、トレンチ東側斜面上にも高さ20～80cm程、幅20～60cm程の石材4個を1列に配した石列状のものがみられるが、これが南北に連続するかについては未調査のため確認できていない。

(3) 小穴

小穴は11基検出されている。その多くは、大きさ10～20cm前後であり、P11が最大で50cm程を測る。深さは4～40cm前後を測る。覆土は、P10は暗褐色土、P11は2層が確認でき、上層が黒褐色土、下層が褐色土である。遺物としては、P11の黒褐色土よりグスク土器10点、焼土18点、炭化物1点が出土している。小穴は、堀切状遺構内では検出されず、トレンチの東側平場と石積み西側平場に集中して、検出されている。

[3] 遺物 (第45図232～236、第17表232～236、図版111・112、232～236)

遺物としては、グスク時代相当期から近現代までのものが出土している。

1a層からは、グスク土器1点、青磁1点、褐釉陶器1点、沖繩産陶器1点、近現代磁器1点が出土している。

1b層からは、グスク土器6点、青磁1点、褐釉陶器1点、石斧1点、沖繩産陶器1点、焼土4点が出土している。

2a層からは、グスク土器6点、青磁2点、古銭1点が出土している。

2b層からは、グスク土器29点、カムイヤキ2点、白磁2点、青磁4点、青花5点、褐釉陶器5点、不明陶器1点、石片2点、刀子?片2点、沖縄産陶器8点、鉄片4点、釘?4点、砲弾片1点、焼土10点、現代遺物4点が出土している。

2c層からはグスク土器3点、白磁1点(232)、青磁5点、褐釉陶器4点、沖縄産陶器2点、近現代磁器1点(233)、砲弾片3点、軍刀1点(234)、鉄片1点、不明土製品1点、現代遺物2点が出土している。

232は碗の底部片であり、見込みに施釉が施され、外面は胴部下半から高台内が露胎している。

233は近現代に製作された湯飲みである。

234は戦時中に使用された軍刀と思われる。

3層からは、グスク土器1点、角釘1点(235)、鉄片3点、砲弾片?3点、焼土1点、現代遺物56点が出土している。

235は頭部が折られた角釘であり、頭部と端部が錆びくれている。

4b層からは、グスク土器21点、カムイヤキ1点、白磁1点、青磁11点(236)、青花2点、褐釉陶器4点、沖縄産陶器6点、焼土2点、炭化物1点が出土している。

236は碗の底部片であり、高台内は釉剥ぎされている。

5層からは、グスク土器14点、カムイヤキ1点、白磁1点、青磁4点、青花2点、褐釉陶器4点、小札2点、沖縄産陶器6点、焼土7点が出土している。

6層からは、グスク土器3点、カムイヤキ1点、青磁2点、褐釉陶器2点、鉄製品1点、鉄滓1点、焼土3点、炭化物3点が出土している。

3. 堀切トレンチ3 (第42図)

本地区は、東西軸堀切状遺構の東側に位置しており、11m×1.2mの範囲で発掘区を設定した。石積みがトレンチ中央部の堀切状遺構の法面下方に連なっている。表土除去後、北側法面からは小穴が検出され、南側法面は攪乱を受けていない状況が確認できた。掘底と想定されるところからは、礫混じり層が検出された。その後、西側にサブトレンチを設定し、北側法面と掘底の礫混じり層の掘り下げを行った。掘底にある石積みは3層の上から積み重ねられていることから、戦後につくられたものと考えられる。

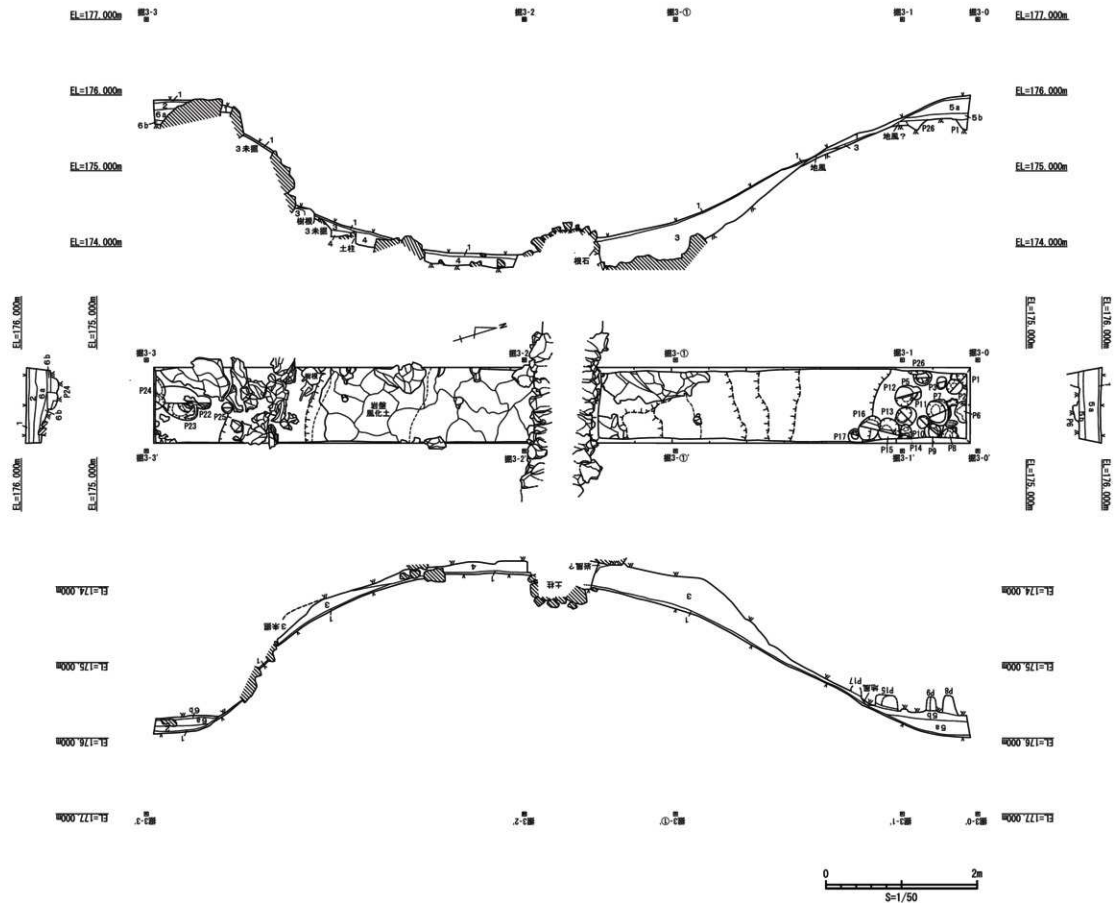
[1] 層序

本調査区では、8枚の層が確認されている。

1層:暗褐色土層。表土層。

2層:明褐色土とにぶい黄褐色土、暗褐色土がまだら状に混ざる層。少し粘りがあり、しまりは悪い。堀切状遺構の上端ぎりぎりまで耕作をしていたと考えられる。

3層:全体的に明褐色土よりくすんだ色合いを呈す流れ込み層。少し粘りはあるが、しまりは悪く、ホロホロしている。地表面を斜めに切って堀切状遺構が造られているため、風雨により削られた地表面の土が流れ込んで堆積したと考えられる。しまり具合などから、戦後に堆積した層と考えられる。



第42図 堀切トレンチ3 平面図及び層序図 (S=1/50)

- 4層:褐色土層。砂利状の小石や小さな礫を多く含む。粘りがあり、少ししまっている。石積み北側の掘底は岩盤が露出するため、掘底をある程度なめらかに整地するための層である可能性が考えられる。
- 5層:にぶい黄褐色土層。質的に多少の違いがみられたため、2つに細分した。
- a:粘りはほとんどない。しまりは弱く、柔らかく、ザラザラしている。細かい焼土を含む。
- b:にぶい黄褐色土に明褐色土が混ざる層。上部に比べて少し粘りがある。一部しまっているところはあるが、全体的にしまりは弱く、柔らかく、ザラザラしている。
- 6層:石積みから南側にひろがっている層。質的に多少の違いがみられたため、2つに細分した。
- a:暗褐色土層。粘りがあり、しまっている。5層に比べてなめらかである。細かい焼土を少量含む。グスク時代並行期の層と考えられる。
- b:明褐色土ににぶい黄褐色土が混ざる層。明褐色土の割合が多い。粘りがあり、しまっている。
- 7層:明褐色土層。地山層。石積み南側は岩盤風化土がひろがる。

[2] 遺構

遺構には、堀切状遺構、石積み、小穴が確認されている。

(1) 堀切状遺構

堀切状遺構の層序を確認してみると、南側上端ではグスク時代に帰属すると考えられる層が確認されている。一方、北側上端では近現代磁器が出土していることから、石積みの北側と南側で異なっていることが確認できた。また、南側は他のトレンチと同様に流れ込み層となっているが、北側の4層はトレンチ2と同様に岩盤の凸凹を地ならしし、平坦に整地をしたと考えられる。その形態は、南北軸状堀切遺構と同様に毛抜堀状に掘り込まれている。また、掘り出した土を利用し、本来石積みがあったと思われる北側平場に、盛土を行ったと考えられる。堀切上端の幅は9m程、深さ(垂直壁高)は2.3m程となっている。堀切状遺構の東側は、南北軸堀切状遺構にぶつかると延び、T字状に堀切があった可能性も考えられる。

(2) 石積み

石積みは、東西軸堀切状遺構の法面東側下部に、東西に連なる形でみられる。石積みは、高さ30～45cm程、幅80cm程を測り、自然石もしくは粗く加工された面を持った石で積まれており、残存状態は比較的良好である。基礎となる根石は3層から据えられている。石積みは堀切状遺構の最も窪んだ部分に位置しており、これは本来後述するトレンチ4の石積み同様、北側上端にあったものが、何らかのきっかけで堀切下まで崩れ落ちてしまい、戦後に落ちた石を利用して、再び積み直されたものと考えられる。

(3) 小穴 (第45図237、第17表237、図版113・114、237)

小穴は26基検出されている。その多くは、大きさ10～30cm前後で、深さ4～30cm前後を測る。遺物としては、P8の暗褐色土よりグスク土器3点、青磁1点、焼土6点が出土している。P13の覆土は暗褐色土に明褐色土が少し混ざっており、グスク土器1点(237)、褐釉陶器1点、焼土2点が出土している。ま

た、P24は2層が確認でき、上層の黒褐色土よりグスク土器1点、獣骨小片1点、炭化物1点、下層の暗褐色土より炭化物1点が出土している。小穴は、トレンチ2と同様、堀切状遺構内では確認できず、トレンチの北側平場と南側平場で検出されており、特に北側平場に集中している。建物跡等のプランは確認できなかった。

237は内面の一部が煤けた底部片である。

[3] 遺物 (第45図 238~239, 第17表 238~239, 図版 113・114, 238~239)

遺物としては、グスク時代相当期から近現代までのものが出土している。

1層からは、グスク土器11点、白磁2点、青磁2点、青花5点、褐釉陶器5点、鉄球1点(238)、鉄片2点、金具1点、焼土2点が出土している。

2層からは、グスク土器2点、カムイヤキ1点、鉄片1点、葉葵2点、焼土2点が出土している。

3層からは、グスク土器13点、カムイヤキ1点、白磁3点、青磁6点、褐釉陶器1点、沖縄産陶器4点、砲弾片1点、焼土7点が出土している。

4層からは、グスク土器1点、褐釉陶器1点、鉄製品1点が出土している。

5a層からは、カムイヤキ1点、グスク土器18点、白磁1点、青磁8点、褐釉陶器2点、勾玉1点(239)、砥石1点、沖縄産陶器1点、近現代磁器1点、鉄片2点、鉄滓2点、焼土2点が出土している。

239はガラス製の勾玉片であり、青色を呈する。

5b層からは、グスク土器8点、白磁3点、青磁11点、褐釉陶器1点、鉄鏝1点、鉄滓1点、沖縄産陶器1点、近現代磁器1点、鉄片3点、焼土1点が出土している。

6a層からは、カムイヤキ1点、グスク土器10点、青磁2点、沖縄産陶器1点、獣骨1点が出土している。

6b層からは、グスク土器1点が出土している。

4. 堀切トレンチ4 (第43図)

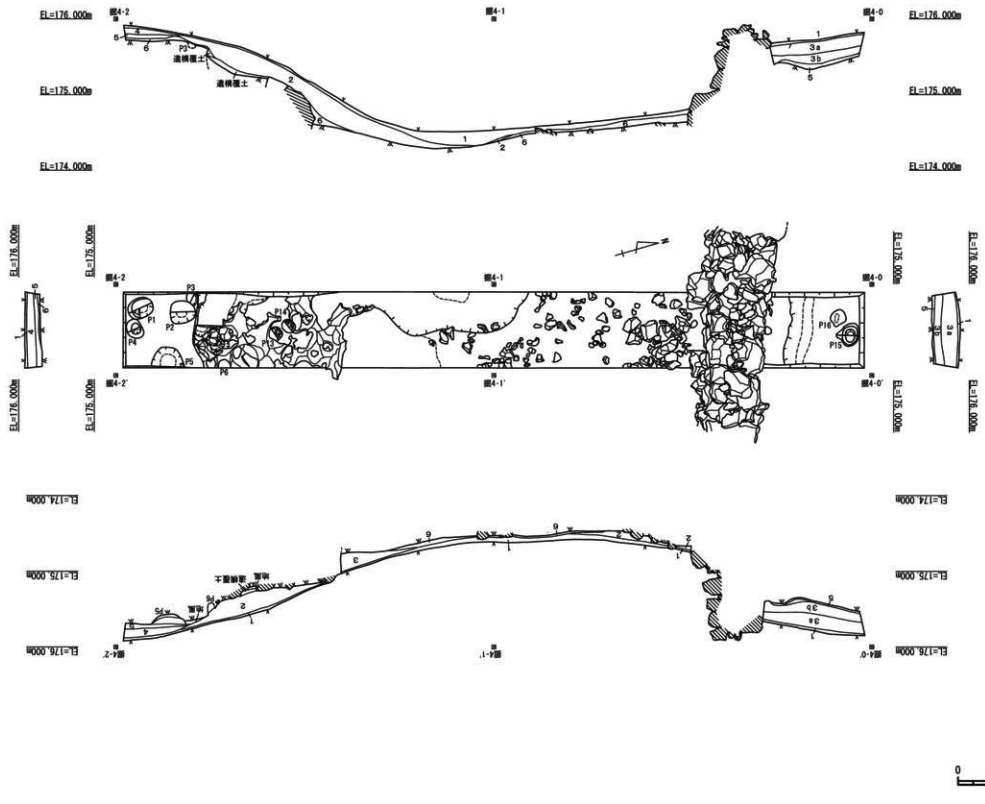
本地区は、東西軸堀切状遺構の西側に位置しており、10m×1.2mの範囲で発掘区を設定した。表土を除去し、掘り進めたところ、石積み北側では焼土が多く含まれており、南側法面ではグスク土器等の遺物が多く出土した。その後、西側にサブトレンチを設定し、掘り進んで行った。堀切状遺構の堆積層は薄く、トレンチ3同様に20cm程で地山面が検出したことから、これをトレンチ全体にひろげて地山面を検出した。南側平場と法面から複数の小穴が検出された。

[1] 層序

本調査区では、7枚の層が確認されている。

1層:暗褐色土層。表土。耕作放棄後に堆積した層。掘底西セクション沿いは厚く堆積している。

2層:暗褐色土や明褐色土がまだらに混ざる層。少し粘りがあり、しまっている。堀切状遺構を掘り込んだ後に流れ込んだ土、または掘底との高低差を補う目的で埋められたと考えられる。



第43図 堀切トレンチ4 平面図及び層序図 (S=1/50)

3層:褐色土層。焼土の含有量の違いで2つに細分した。

a:1~2cm 大の焼土を多く含む。少し粘りがあり、しまっている。焼土を多く含むことから、火を使用する行為が行われていた可能性が考えられる。

b:少し粘りがあり、しまっている。含まれる焼土が少量である点を除けば、両者における差はさほどないと考えられる。

4層:にぶい黄褐色土層。少し粘りがあり、柔らかい。

5層:暗褐色土層。明褐色土が少量ではあるが細かく混ざるため、上層より明るくみえる。しまりは弱く、柔らかい。

6層:明褐色土ににぶい黄褐色土が少し混ざる層。粘りがあり、しまっている。地山への漸移層。掘底の同層は礫が含まれるため、色は鈍く褐色を呈す。掘底は礫が多いため岩盤風化土またはこの層に礫を敷き詰め押圧した可能性も考えられる。

7層:明褐色土層。地山層。

[2] 遺構

遺構には、堀切状遺構、石積み、小穴が確認されている。

(1) 堀切状遺構

南北軸堀切状遺構と同様、その形態は毛拔堀状に掘り込まれている。堀切状遺構の掘り出した土を利用した盛土の両側に石を積みあげて石積みが築かれたと考えられる。堀切上端の幅は7.5m程、深さ(垂直壁壁高)は1.4m程となっている。東西軸堀切状遺構には、南北軸のように堀切を埋めた埋土等の層序はみられなかった。

(2) 石積み

石積みは、東西軸堀切状遺構の西側に位置している。石積みは、高さ0.4~1.2m、幅0.8~1.1mを測り、自然石もしくは粗く加工された面を持った石が積まれており、残存状態は比較的良好である。基礎となる根石は堀切状遺構側の礫が含まれている6層に据えられている。石積の根石付近からは、グスク土器6点と焼土1点が出土している。石積みの北側と南側で層序が異なっており、他のトレンチ同様、石積みの内側(北側)に元々の層序が残っていると考えられる。石積みは、トレンチ3周辺で堀切下に崩れ落ちてしまっているが、本来は、南北軸堀切状遺構まで直線的に延びていたと想定される。

(3) 小穴 (第45図240、第17表240、図版113・114、240)

小穴は16基検出された。その多くは、大きさ10~30cm前後で、深さは4~30cm前後である。P1の覆土は黒褐色土に明褐色土が混ざっており、遺物はグスク土器3点、焼土4点、炭化物1点が出土している。P2の覆土も同様に黒褐色土に明褐色土が混ざっており、遺物はグスク土器7点、焼土10点、軽石1点が出土している。P7の覆土は暗褐色土に明褐色土が混ざっており、遺物はグスク土器22点、青磁1点、褐釉陶器1点、獣骨9点(240)、魚骨1点、焼土14点、炭化物1点、軽石2点、鉄滓2点が出土し

ている。

240はイノシシの左肩甲骨であり、解体時の切痕が確認できる。

なお、堀切状遺構内では小穴の確認ができず、トレンチの南側平場と法面で検出されている。また、僅かだが石積み北側平場からも検出されている。建物跡等のプランは確認できなかった。

[3] 遺物（第45・46図241～248、第17・18表241～248・図版113・114、241～248）

遺物としては、グスク時代相当期から近現代までのものが出土している。

1層からは、グスク土器27点、白磁1点、青磁12点、青花1点、褐釉陶器4点、刀子1点、砥石1点、沖繩産陶器6点、焼土3点、現代遺物1点が出土している。

2層からは、グスク土器168点(241～245)、カムイヤキ3点、白磁7点(246・247)、青磁38点(248)、青花3点、褐釉陶器17点、石材4点、土製品2点、獣骨24点、焼骨1点、海産貝2点、沖繩産陶器10点、鉄滓10点、鉄片10点、焼土5点が出土している。

241は底面の立ち上がりが内側に閉じた状態で、丸みを保持しながら胴部へ移行する底部片である。242は口縁部が内湾しており、口唇部外端に丸みを持つ。243は外面に当て具痕が残り、244は内外面とも指ナデ調整の胴部片である。245は底面からの立ち上がりが外側に大きく開いた状態で、若干丸みを持たせながら胴部へ移行する底部片である。

246と247は白磁で、246は外反する八角杯、247は外面が露胎を呈する底部片である。

248は釉が厚く、口縁部が外反している。

3a層からは、グスク土器27点、カムイヤキ2点、白磁1点、青磁10点、青花1点、石材1点、軽石1点、沖繩産陶器2点、鉄滓3点、鉄片1点、鎌？片1点、焼土172点が出土している。

3b層からは、グスク土器7点、白磁1点、青磁5点、褐釉陶器2点、鉄滓3点、焼土26点が出土している。

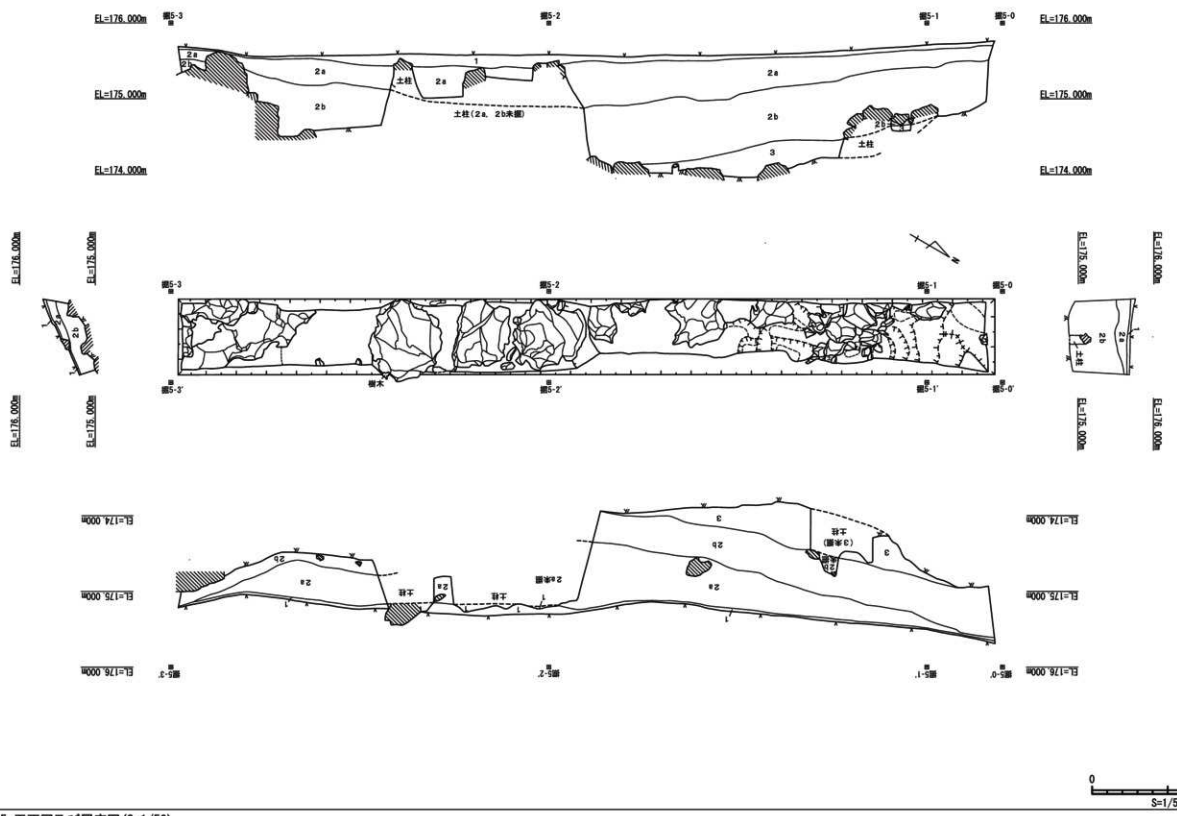
4層からは、グスク土器5点、カムイヤキ1点、白磁1点、青磁2点、褐釉陶器2点、沖繩産陶器1点、鉄滓1点、焼土1点が出土している。

5層からは、グスク土器2点、白磁1点、青磁1点、鉄製品1点が出土している。

層序不明からは、グスク土器2点、青花2点、褐釉陶器1点、黒釉陶器1点、獣骨1点が出土している。

5. 堀切トレンチ5（第44図）

本地区は、東西軸堀切状遺構の延長部で、現在使用されている道路に接する場所に位置しており、堀切状遺構の西側への伸びを確認するため、11m×1.2mの範囲で発掘区を設定した。表土から2b層までには、ビニールやガラス片、空き缶等の現代遺物が散見されることから、道路敷設の際に投棄されたものと考えられる。また、2a層から2b層にかけて石列が検出された。明確な堀切状遺構は確認できず、遺構は石列のみであった。トレンチ東側で1m程、西側で1.6m程掘り下げを行い、地山面を検出した後、発掘作業を終了した。



第44図 堀切トレンチ5 平面図及び層序図(S=1/50)

[1] 層序

本調査区では、5枚の層が確認されている。

1層:暗褐色土層。表土層。道路敷設後の堆積層。

2層:礫混入層。質的に違いがみられたため、2つに細分した。

a:道路敷設のため、路盤材として使用された層。砂やコーラル、拳大から人頭大の石材を含む。北セクションからトレンチ中央付近まで窓ガラスの破片が大量に投棄されている。その他塩ビ製品やコード類等の現代遺物を含まれている。

b:暗褐色土に一部明褐色土が混ざる層。拳大の礫を含み、クチャが少し混ざる。本層と3層の境界から農業用の堆肥袋が出土していることから、戦後に溝を埋めるために客土したと考えられる。

3層:褐色土層。クチャ質の土が細かく入る。一部しまりが良いところもあるが、全体的にしまりは悪く、ホロホロとしている。溝を造った後に流れ込んだか、溝を掘るときに岩盤が表れたため、ある程度なめらかにするために整地した可能性がある。本トレンチの西側へのみひろがっている。

4層:明褐色土層。地山層。トレンチ東側は岩盤風化状を呈す。

[2] 遺構

明確な堀切状遺構は確認できなかったが、石列らしきものが確認できた。西側壁より東に向けて、2層から検出されている。使用された石材は他のトレンチの石積みと同様であり、整形は粗雑で徹底しないが、面取りは行われている。石列の東半分は2a層の上に乗っており、石列のそばに堆積する2b層からガラス片が出土していることから、戦後に造成されたものと考えられる。

しかし、本トレンチの周辺も、層の堆積具合から窪んでいたことが確認されていることから、堀切の延長部であった可能性を想定することができ、南北軸堀切状遺構と同様に、西側の丘陵端部の崖まで延び、糸数城跡が所在する平場を切っていたと考えられる。

集落が形成されていた近世に堀切を造る必要性がないと考えられることから、堀切状遺構は近世以前に造られた堀切を、戦中に戦車壕として活用するために、再度深く掘り下げたものと考えられることができる。このことから、東西軸、南北軸に延びる堀切状遺構は、丘陵地に立地する糸数城跡の弱点である東側に広がる平坦地からの防御のために造られたものであった可能性が高いと考えられる。

[3] 遺物 (第46図 249~261、第18表 249~261、図版 115・116. 249~261)

遺物としては、グスク時代相当期から近現代までのものが出土している。

2a層からは、グスク土器1点、青磁2点、沖縄産陶器5点、近現代磁器1点、鉄製品4点、焼土1点、現代遺物4点が出土している。

2b層からは、グスク土器135点(249・250)、カムイヤキ2点、白磁4点、青磁81点(251~254)、青花4点、褐釉陶器27点(255)、日本産陶器1点、敲き石2点、石材4点、鉄鏃2点(256・257)、刀子?2点、角釘?1点、獣骨2点、海産貝2点、陸産貝1点、沖縄産陶器12点(258・259)、鉄滓1点、鉄製品7点、砲弾片2点、葉莢1点、焼土17点、現代遺物10点が出土している。

249 は底面からの立ち上がり内側に閉じるタイプであり、250 は外側に大きく開くタイプで、丸みを保持しながら胴部へ移行する底部片である。

251～254 は碗の口縁片であり、251 は外反口縁であり、252 は無文直口口縁である。253・254 は底部片であり、253 は畳付きから高台内が露胎を呈しており、内面胴部に何らかの文様が描かれている。254 は高台内側と高台内を釉剥ぎしているが、その境目に釉薬が一部残っている。

255 は褐釉陶器の壺で、口縁部を外側へ折り曲げ肥厚させている。

256・257 は鉄鏝で、256 は鏝身が菱形を呈しており、257 は全体的に錆ぶくれが生じている。

258・259 は碗の底部片であり、258 は白釉、259 は外面に褐釉が施されている。

3層からは、グスク土器6点、青磁2点(260・261)、陸産貝1点、沖縄産陶器1点、鉄滓1点、不明金属片1点、焼土2点が出土している。

260 は底部片で、高台内が露胎を呈し、赤変しており、261 は胴部片で、外面に細描蓮弁文が施されている。

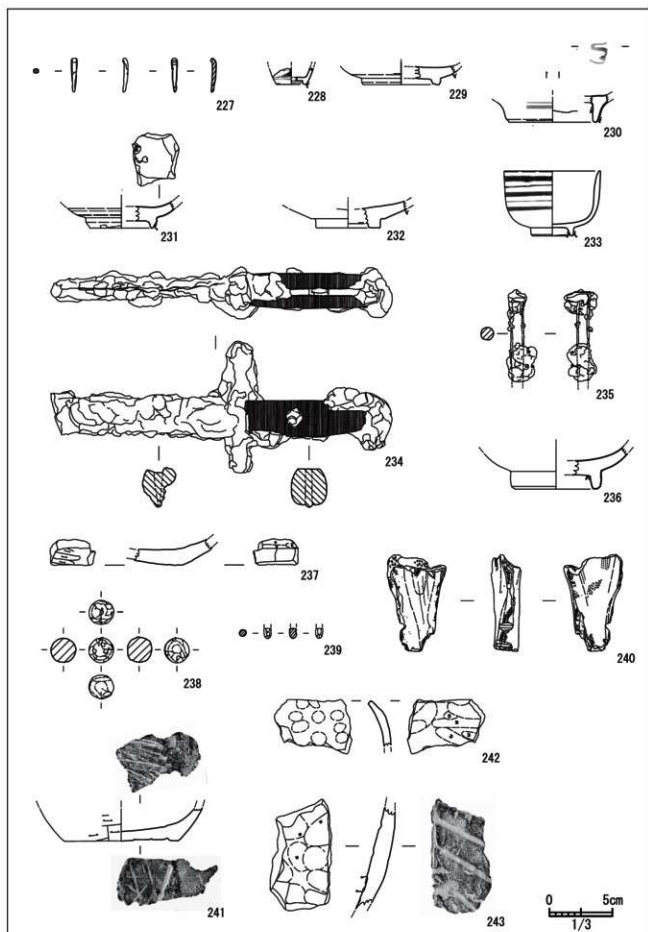
4層からは、グスク土器が2点出土している。

第17表 H25 実測遺物観察表①

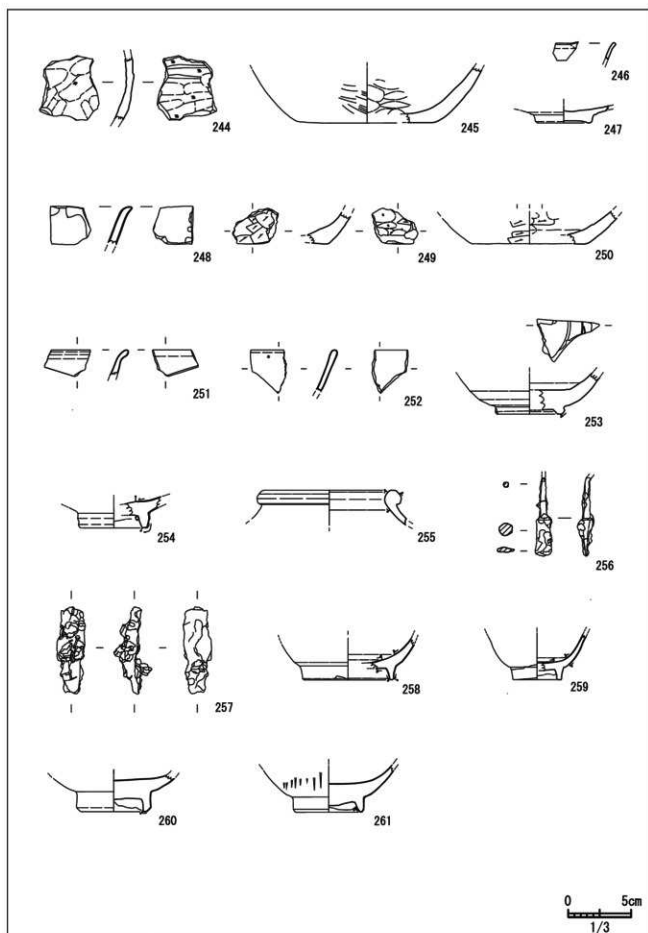
図/ 番号	出土区	出土 層位	遺物 種別	分類	観察事項	復原径 cm	胎土 混入物	色 調
第45図 227	掘レ1	p83 覆土	簪	—	断面が四角形を呈する。簪の頭からカブの部分か?	—	—	—
第45図 228	掘レ1	2a層	青花 小杯 底部	—	基功底の底面、底部から胴部へ少し開き気味に立ち上がる。髷付きから高台が丸胎。外面に2条の細線と文様の一部が描かれている。	底:2.3	褐色粒	胎:灰白(2.5YR/2) 釉:灰白(5GY8/1)
第45図 229	掘レ1	2b層	青磁碗 底部	—	見込みと外面胴部下半から高台内が露胎している。高台が低く、断面は「ノ」の字状である。	底:6.0	黒色粒 褐色粒	胎:淡黄(2.5YR/4) 釉:灰黄(2.5Y7/2)
第45図 230	掘レ1	2b層	青花 底部	小B	高台がやや高く、断面は三角形を呈す。髷付きから高台外面途中まで露胎している。外面に2条の細線、見込みに草花文が描かれている。	底:6.9	褐色粒	胎:淡黄(2.5YR/3) 釉:明緑灰(10GY8/1)
第45図 231	掘レ1	3層 dot2	青磁碗 底部	上B?	高台外面の一部から髷付き、高台内が露胎している。高台外面を斜めに削る。見込みに草花文が描かれている。貫入有り。	底:5.0	白色粒 黒色粒 褐色粒	胎:灰白(10YR7/1) 釉:オリブ灰(10Y6/2)
第45図 232	掘レ2	2c層	白磁碗 底部	—	高台断面四角形。髷付きが平坦で高台の内削りは浅い。見込みに施軸が施され、外面は胴部下半から高台内が露胎している。	底:5.0	褐色粒	胎:灰白(2.5YR/1) 釉:明緑灰(10GY8/1)
第45図 233	掘レ2	2c層	近現代 磁器 湯飲	—	髷付き軸刺ぎ。外面にコバルトで3条の細線と、その間に2条の茶色の細線。	底:3.1	—	胎:白色 釉:透明釉
第45図 234	掘レ2	2c層	鉄製品	—	戦時中の軍刀。	—	—	—
第45図 235	掘レ2	3層	角釘	—	頭部と端部が錆びくれている。頭部が一方に折れる角釘。	—	—	—
第45図 236	掘レ2	4b層	青磁碗 底部	—	高台断面がやや四角形を呈す。高台内軸刺ぎ。貫入有り。	底:6.5	黒色粒 褐色粒	胎:淡黄(2.5YR/3) 釉:灰白(10Y7/1)
第45図 237	掘レ3	p813	グスク土器 底部	底I	内面ナデ、外面ヘラ削り、内面の一部染める。	—	白色粒 黒色粒 褐色粒	胎:浅黄橙(10YR8/4)、 外面橙(2.5YR6/8)
第45図 238	掘レ3	1層	鉄球	—	重さ27.6g。	直径:2.0	—	—
第45図 239	掘レ3	5a層	ガラス 製品 勾玉	—	欠損している。穿孔を1つ有する。	—	—	青色
第45図 240	掘レ4	p87	獣骨	—	イノシシ?の左脛甲骨。解体時の切痕有り。	—	—	—
第45図 241	掘レ4	2層	グスク土器 底部	底II	内面底部刷毛目状とナデ調整。外面底部に染め。外面ナデ。	底:9.0	白色粒 黒色粒	胎:にぶい黄橙(10YR 7/4)
第45図 242	掘レ4	2層 dot15	グスク土器 口縁部	鍋目b	口唇部外端に丸みを持つ。内面指押さえ後ナデ。外面指押さえ。煤が付着している。	—	黒色粒	胎:にぶい橙(7.5YR 7/4)
第45図 243	掘レ4	2層 dot42	グスク土器 胴部	—	内面当て具痕が残る。外面指押さえ、ナデ。外面下部に煤が付着している。	—	黒色粒 褐色粒	胎:にぶい黄橙(10YR 7/3)
第46図 244	掘レ4	2層 dot50	グスク土器 胴部	—	内外面指ナデ。	—	白色粒 黒色粒	胎:橙(7.5Y7/6)
第46図 245	掘レ4	2層 dot33	グスク土器 底部	底I	外面ヘラ削り。内面ナデ後に指押さえ。	底:10.0	白色粒 黒色粒 褐色粒	胎:橙(2.5Y6/6)

第18表 H25 実測遺物観察表②

図/ 番号	出土区	出土 層位	遺物 種別	分類	観察事項	復原径 cm	胎土 混入物	色 調
第46図 246	掘-4	2層 dot18	白磁碗 口縁部	-	外反する八角杯と思われる。	-	白色粒 黒色粒 褐色粒	胎: 淡黄(2.5YR/3) 軸: 灰白(5Y8/1)
第46図 247	掘-4	2層 dot48	白磁 底	-	内面施釉、外面露胎。高台は低く、 削りが浅い。貫入有り。	底: 4.0	黒色粒	胎: 浅黄橙(10YR8/4) 軸: 灰白(10YR8/2)
第46図 248	掘-4	2層 dot36	青磁 口縁部	上DII	口縁が外反する。軸が薄い。	-	黒色粒 褐色粒	胎: 淡黄(2.5YR/3) 軸: 濃い明オリブ 灰 (2.5GY7/1)
第46図 249	掘-5	2層	グスク土器 底部	底II	内面指ナデ。外面へラ削り。外面は 燻かいている。	-	白色粒 黒色粒 透明粒	胎: 灰白(10YR8/2) 軸: 灰オリブ(7.5 YR 6/2)
第46図 250	掘-5	2層	グスク土器 底部	底I	内面指押さえ、へラ削りが残る。外 面へラ削り。	-	白色粒 褐色粒	胎: にぶい黄橙(7.5 YR 7/4)
第46図 251	掘-5	2層	青磁碗 口縁部	上D1	外反口縁碗。貫入有り。	-	白色粒 黒色粒	胎: 灰白(2.5YR/1) 軸: 灰オリブ(7.5 Y 6/2)
第46図 252	掘-5	2層	青磁碗 口縁部	-	無文直口口縁碗。粗めの軸で、表面 がざらつく。	-	白色粒 褐色粒	胎: 浅黄橙(10YR8/3) 軸: 灰白(5Y7/2)
第46図 253	掘-5	2層	青磁碗 底部	-	畳付きから高台内露胎。高台外面を 斜めに削り、畳付きが平坦。底部の削 りが浅い。見込み口縁部有り。内面脚 部こ文様の一部が削れている。貫入 有り。	底: 5.2	黒色粒 褐色粒	胎: にぶい黄橙(10YR 7/2) 軸: オリブ黄(5Y6/3)
第46図 254	掘-5	2層	青磁碗 底部	-	高台内側と高台内を軸割ぎしてい るが、その境目に一部軸が残る。高台 断面「ハ」の字状。貫入有り。やや粗 い仕上げ。	底: 5.3	白色粒 褐色粒	胎: 灰白(10YR8/2) 軸: 灰白(5Y7/2)
第46図 255	掘-5	2層	褐釉陶器 壺 口縁部	-	口縁部は外面へ折り曲り肥厚させ ている。外面は口唇部から胴部方向に 施釉。内面は口唇部下から口縁部の範 囲に僅かに施釉が残る。	口: 10.4	白色粒 黒色粒 褐色粒	胎: 灰白(10YR8/2) 軸: 黒褐(7.5YR/3)
第46図 256	掘-5	2層	鉄鍔	-	鍔身が変形を示す。刃先が欠けたい る。身部と茎部の境目に抉り有り。錆 ぶくれが生じている。	-	-	-
第46図 257	掘-5	2層	鉄鍔片	-	全体が錆びにくくみられるが、茎 部1か所、身部に2か所錆状のふく らみみられる。	-	-	-
第46図 258	掘-5	2層	沖崎窯 施釉陶器 碗 底部	-	化粧土を施し全面に施釉後、見込み と高台内を蛇の目軸割ぎしている。畳 付きも軸割ぎ。高台断面三角形。貫入 有り。	底: 7.0	黒色粒 褐色粒	胎: にぶい黄橙(10YR 7/4) 軸: 灰白(2.5Y8/2)
第46図 259	掘-5	2層	沖崎窯 施釉陶器 碗 底部	-	内面は化粧土を施し、軸を掛けた後 に見込みを蛇の目軸割ぎしている。外 面は胴部まで施釉。畳付きは化粧土が みられ、浅黄橙色を呈す。	底: 3.8	黒色粒	胎: 灰白(10YR7/1) 軸: 外面 黒褐(7.5 YR 3/2)、内面 灰白(7.5 Y 7/2)
第46図 260	掘-5	3層 dot1	青磁碗 底部	-	外面は畳付きを超えて高台内面塗 中まで軸が掛かり、高台は露胎して いる。高台外面を斜めに削る。また、 高台内は赤変している。貫入有り。	底: 5.2	白色粒 黒色粒	胎: 灰白(10YR8/2) 軸: 灰オリブ(7.5 Y 6/2)
第46図 261	掘-5	3層 dot2	青磁碗 底部	上BIV	畳付きから内面高台途中まで施釉。 高台内は露胎しているが、一部軸が掛 かっている。外面に細描蓮弁文が削れて いる。貫入有り。	底: 5.2	白色粒 黒色粒 透明粒	胎: にぶい黄橙(10YR 7/2) 軸: オリブ 灰(10Y5/2)



第45図 H25遺物実測図①(S=1/3)



第46図 H25遺物実測図②(S=1/3)

第3章 まとめ

今回の調査は、蔵屋敷地区における史跡の整備に向けた事前調査であり、所在する2つの石積み囲いを中心とした蔵屋敷跡並びに堀切状遺構の性格を把握する目的で行われた。

1. 蔵屋敷跡

本地区は、集落としてグスクを支えた人々が生活を営んだ場所とされており、明治時代まで集落がひろがっていたことから、その住居跡の確認や糸数城跡の蔵屋敷跡とされる2つの石積み囲いの性格を確認することを目的として調査を行った結果、現存する2つの石積み囲いのほか、多くの小穴を確認することができた。小穴の中からは建物跡と想定される平面プランを1基確認することができている。

石積み囲いについては、一部崩れているものの、南北に所在する石積みについては残存状況が比較的良好で、石面も丁寧に整形されたものが使用されている。それに比べて東西に所在する石積みについては、石面の方位が統一されておらず、残存状態が悪い傾向がみられた。その工法についても2通りみられる。共に基盤部を整地した後、両側に石面を整えた石材を積み上げ、内部に中込石を詰めて積み上げたものと、中込部を盛土成形した後、両側に石面を整えた石材を積み上げたのがみられた。前者が南北に所在する石積みに、後者が東西に所在する石積みに該当するものと考えられる。

建物跡については、先述のとおり、軸を北東方向に向けて検出された。建物跡は、石積みの手前から確認されており、さらに周辺からも多くの小穴が検出されたことから、複数の建物があったことが想定できる。しかし、本地域が明治時代に集落が移転して以降、耕作地として使用され、さらに戦後の機械力による耕作地の転地返しが行われた結果、地下に埋藏されていた多くの遺構が破壊されてしまい、集落のひろがりを確認することが困難な状況となっていることが確認できた。

遺物については、グスク土器、カムイヤキ、中国産陶磁器、沖縄産陶器などが出土している。最も多数出土したものが中国産陶磁器であり、続いて沖縄産陶器、グスク土器の順となっている。その多くが小片での出土ではあるものの、実数との差異は少ないと考えている。中国産陶磁器の中では青磁が最も多く、続いて褐釉陶器、青花と続いている。青磁は上田編年のⅡ類以降(14世紀後半～15世紀前半)が多数を占めており、褐釉陶器、青花も15世紀前半から出土するようになってくる。

本地域に関しては、遺物の出土状況から考えると、遅くとも14世紀頃に成立したと考えられ、14世紀後半以降、伝承に伴う集落が展開していったのではないかと考えられる。これは、小穴からの出土遺物の大半が当該時期に該当することから想定される。しかし、現存する石積みの成立時期については、なお不確定な部分が多い。現存する石積みの周辺からは、戦後の機械力を用いた痕跡がみられないことから、それ以前に成立していたことは確認できるが、明確にグスク時代までに遡ると考えられるのは、A地区の北西側のみであり、同じ工法で積み上げられている南北に所在する石積みについては、同時期の可能性が高いと考えられる。東西に所在する石積みについては、工法などから想定して建設時期が異なり、若干遅れて積み上げられた可能性も考えられる。

2. 堀切地区

堀切地区は、糸数城跡と蔵屋敷跡の集落を隔絶するように所在しているものの、その帰属年代については判然としていないことから調査を行った。

調査地における堀切状遺構については、堀切トレンチ 5 を除いた全てから毛抜堀状に掘り込まれていることが確認された。その幅は 8m 前後、深さは 2m 程を測る。糸数城跡側の先端部分には石積み積み上げられており、防御を意識したものと考えられる。石積みは堀切を掘った際に出た土を利用し、盛土造成を行った後に両側より石を積み上げていたと考えられる。石積みの高さは 1m 前後を測り、高い場所では 1.5m 程と容易には越えられない高さとなっている。

堀切は、南北軸と東西軸の 2 方向に L 字状に所在しているが、調査の結果、この 2 つがつながり T 字状を呈する可能性が考えられた。南北軸の南側と東西軸の西側については、そのまま崖まで延びていると考えられ、糸数城跡への進入を阻止する役割を担っていたことが想定される。また、平地が続く北側については、北東側に真っ直ぐ延びていくことが想定されており、その延長線上に所在する石積みまで延びていた可能性が考えられる。

遺物については、蔵屋敷跡と同様の出土状況となっており、中国産陶磁器が最も多く、グスク土器、沖繩産陶器と続いており、その年代についても中国製磁器の年代から蔵屋敷跡と同時期に相当するものと考えられる。

堀切状遺構については、掘底の堆積土が浅く、遺物の出土もほとんどみられないことから、太平洋戦争中に行われた戦車壕構築の影響により、それ以前の遺物が掘り返されたことで移動した可能性が考えられ、構築された時期を想定することは難しいが、同時期に建設されたと考えられる石積みの状況から、蔵屋敷跡での成果と同時期に建設された可能性が高いと考えられる。

3. まとめ

調査の成果として、蔵屋敷跡と堀切地区については、同時期に成立したと考えられ、蔵屋敷地区は 14 世紀頃、遅くとも 14 世紀後半には集落としての営みが行われていたと考えられる。

蔵屋敷地区の成立時期と糸数城跡のそれを比較すると、若干遅れる形で成立したことになることから、より詳細な成立時期についての調査が今後も望まれる。しかし、堀切状遺構がグスク時代に帰属する可能性がより高くなったことは大きな成果といえ、戦車壕については既存の堀切を活用したものであったと考えられる。

糸数城跡は、東側に高い城壁を積み上げ、その前方に堀切を設けることで、防御性の低い地域であり、糸数城跡の弱点ともなっている東側の防備を固めていたことを確認することができた。しかし、堀切を南側と西側では崖まで延ばし、地続きとなる平地を切っただけのもの、北側の平地が続く地域について、糸数城跡への進入をどのように防いだのかという問題を確認していくことが今後の課題である。一つの可能性として、堀切状遺構が延びるとされる北側には、現在使用している道路脇の高い石積みまで延びていたと考えられており、その道向かいには根石グスクが所在していることから、現在の道路がグスク時代の頃より使用されていた場合は、石積みと根石グスクを利用して、糸数城跡への進入者に対応したとも考えられる。今後、根石グスクを含めた周辺地域の調査を実施することで、糸数城跡の東側からの進入者の防

御方法を確認していくことが必要となる。

蔵屋敷跡については、集落が形成された時期と石積み囲いの関連性について、さらなる調査の必要性が考えられる。集落が形成された平地の多くは、戦後の機械力による耕作地の転地返しによって、堆積層や遺構を含めた埋蔵文化財が壊されているため、集落の全容を確認することが難しい状況である。石積み周辺に関しては、機械力を用いた転地返しの影響があまりみられないことから、戦前に建設されたことが確認されており、調査の結果、石積みの建設時期はグスク時代まで遡る可能性が想定されているが、現在残る石積み囲いが糸数城跡とともに存在していたかを判断するまでにはいたっていないので、その点を確認するための詳細な調査の必要性があり、この結果に基づいて、集落の形成時期と石積み囲いの関連性が明らかになっていくものと考えられる。

【引用・参考文献】

玉城村 『糸数アブラガマ(糸数塚)』

玉城村役場 2004 『玉城村史』第6巻 戦時記録編

玉城村教育委員会 1986 『玉城村の文化財要覧』

1977 『国指定史跡保存管理計画書報告書 糸数城跡』

1991 『糸数城跡－発掘調査報告書Ⅰ－』玉城村文化財調査報告書 第1集

1995 『玉城村の遺跡－詳細分布調査報告書－』玉城村文化財調査報告書 第2集

2000 『糸数城跡整備実施計画書』

南城市教育委員会 2014 『国指定 島添大里城跡保存管理計画書』

2015 『玉城城跡－史跡整備に伴う発掘調査報告書－』南城市文化財調査報告書第17集

2015 『玉城城跡－整備事業報告書－』南城市文化財調査報告書第18集

2016 『史跡佐敷城跡 保存管理計画書』

常間嗣一 2012 『琉球グスクの研究』

上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

森田勉 1982 「14～16世紀の白磁の形式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

大宰府市教育委員会 1994 『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類－』

山本信夫 2004 「中国陶磁器の分類と編年」

瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座真充・松原哲志

2007 「沖縄における貿易陶磁研究」『沖縄埋文研究』5 沖縄県立埋蔵文化財センター

圖 版



図版 1. TP1完壁状況 (南側より)



図版 2. TP2調査区設定状況 (北西側より)



図版 3. TP2完壁状況 (北側より)



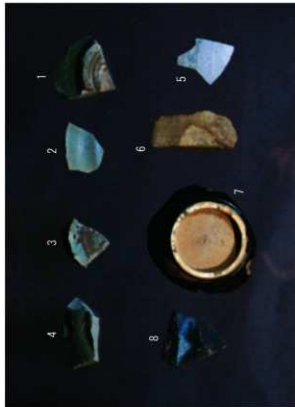
図版 4. TP3完壁状況 (東側より)



図版5. TP4発掘状況（西側より）



図版6. TP5発掘状況（北東側より）



図版7. H19 出土遺物 表



図版8. H19 出土遺物 裏



図版9. 02・3グリッド完掘状況（南西側より）



図版10. 02グリッド完掘状況（北西側より）



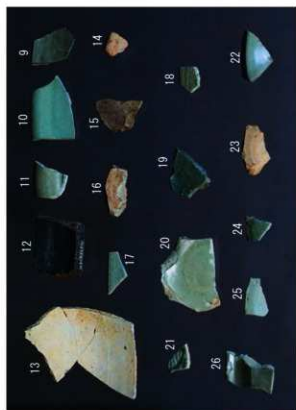
図版11. 03グリッド完掘状況（南西側より）



図版12. 03グリッド完掘状況（北東側より）



図版13. H20 出土遺物① 表



図版14. H20 出土遺物① 裏



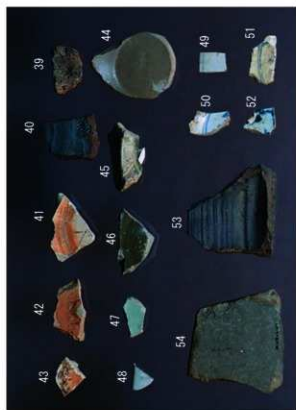
図版15. H20 出土遺物② 表



図版16. H20 出土遺物② 裏



図版17. H20 出土遺物③ 表



図版18. H20 出土遺物③ 裏



図版19. F2・3グリッド完掘状況（北東側より）



図版20. F2グリッド完掘状況（南東側より）



図版21. F3グリッド完掘状況（南西側より）



図版22. F2・3グリッド埋め戻し状況（北東側より）



図版23. F 2・3グリッド出土遺物 表



図版24. F 2・3グリッド出土遺物 裏



図版25. F・68グリッド完掘状況（北西側より）



図版26. F8グリッド完掘状況（南西側より）



図版27. 68グリッド完掘状況（北西側より）



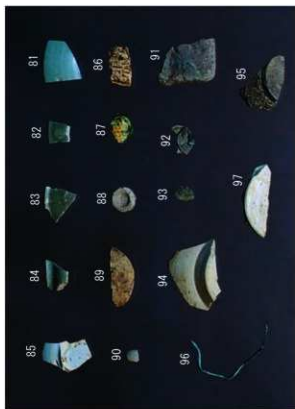
図版28. 68グリッド完掘状況（北東側より）



図版29. F・68グリッド出土遺物① 裏



図版30. F・68グリッド出土遺物① 裏



図版31. F・68グリッド出土遺物② 裏



図版32. F・68グリッド出土遺物② 裏



図版33. F・G13・14グリッド完備状況（南西側より）



図版34. F13グリッド完備状況（北東側より）



図版35. F13グリッド完備状況（北西側より）



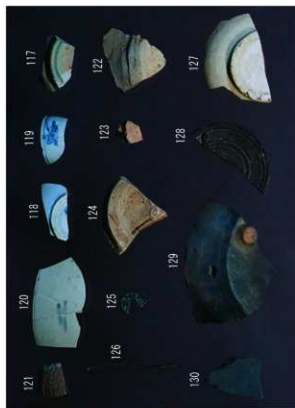
図版36. G13グリッド完備状況（北東側より）



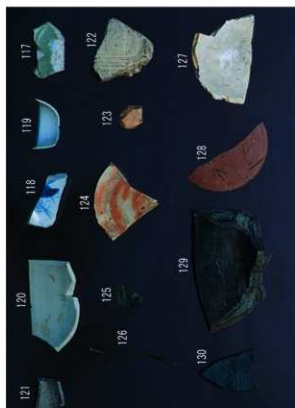
図版37. F・G13・14グリッド出土遺物① 裏



図版38. F・G13・14グリッド出土遺物① 裏



図版39. F・G13・14グリッド出土遺物② 裏



図版40. F・G13・14グリッド出土遺物② 裏



図版41. F10グリッド完掘状況 (南西側より)



図版42. F11グリッド完掘状況 (南西側より)



図版43. F18グリッド完掘状況 (北東側より)



図版44. K8グリッド完掘状況 (南東側より)



図版45. L8グリッド完壁状況（北東側より）



図版46. L8グリッド石積み状況（南東側より）



図版47. M8グリッド完壁状況（南東側より）



図版48. 0・P8グリッド完壁状況（南東側より）



図版50. P8グリッド完掘状況 (南西側より)



図版52. S8グリッド完掘状況 (南西側より)



図版49. 08グリッド完掘状況 (南東側より)



図版51. R8グリッド完掘状況 (南西側より)



図版53. P5グリッド完壁状況（南西側より）



図版54. P10グリッド完壁状況（南西側より）



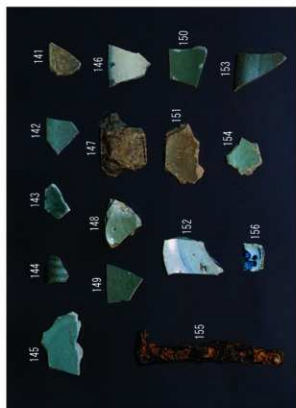
図版55. H22 出土遺物① 裏



図版56. H22 出土遺物① 裏



図版57. H22 出土遺物② 表



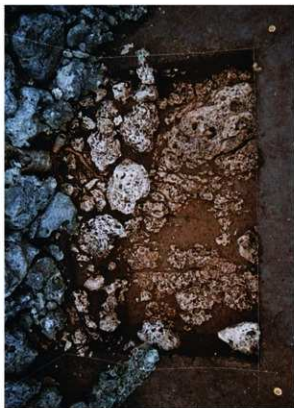
図版58. H22 出土遺物② 裏



図版59. D2グリッド設定状況（北軍側より）



図版60. D3グリッド設定状況（南西側より）



図版61. D2グリッド完掘状況（北東側より）



図版62. D3グリッド完掘状況（南西側より）



図版63. I2グリッド完掘状況（北東側より）



図版64. I2グリッド完掘状況（南西側より）



図版65. 12グリッド石積み内側西セクション（南東側より）



図版66. 12グリッド完壁状況（北東側より）



図版67. P2・3グリッド完壁状況（北東側より）



図版68. P2・3グリッド完壁状況（南西側より）



図版69. H23 出土遺物 表



図版71. H・I・J10・11・12グリッド発掘状況（南西側より）



図版70. H23 出土遺物 裏



図版72. H・I・J10・11・12グリッド発掘状況（北西側より）



図版74. H10グリッド完張状況



図版76. H10グリッド完張状況



図版73. H11グリッド完張状況



図版75. H11グリッド完張状況



図版78. 112グリッド劣態状況



図版80. J11グリッド劣態状況



図版77. H12グリッド劣態状況



図版79. J12グリッド劣態状況



図版81. J10グリッド発掘状況



図版82. H・I・J10・11・12グリッド発掘状況



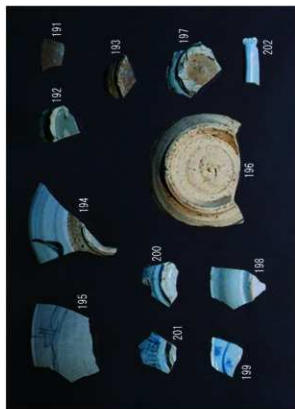
図版83. H23・24 出土遺物① 表



図版84. H23・24 出土遺物① 裏



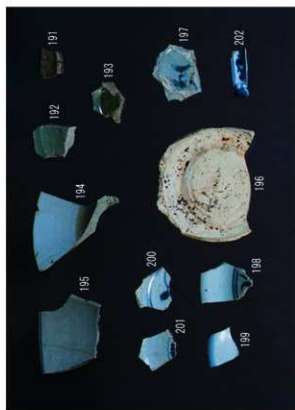
圖版85. H23・24 出土遺物② 表



圖版87. H23・24 出土遺物③ 表



圖版86. H23・24 出土遺物② 裏



圖版88. H23・24 出土遺物③ 裏



圖版89. H23・24 出土遺物④ 表



圖版91. H23・24 出土遺物⑤ 表



圖版90. H23・24 出土遺物④ 裏



圖版92. H23・24 出土遺物⑤ 裏



図版93. 堀切トレンチ1完掘状況（南西側より）



図版94. 堀切トレンチ1完掘状況（北東側より）



図版95. 堀切トレンチ1完掘状況（東側より）



図版96. 堀切トレンチ1完掘状況（西側より）



図版97. 堀切トレンチ2発掘状況（東側より）



図版98. 堀切トレンチ2発掘状況（西側より）



図版99. 堀切トレンチ2石積み下部，東セクション



図版100. 堀切トレンチ3発掘状況（北側より）



図版101. 堀切トレンチ3完壁状況（南東側より）



図版102. 堀切トレンチ3石積み下部 南セクション



図版103. 堀切トレンチ3石積み下部 北セクション



図版104. 堀切トレンチ4完壁状況（北東側より）



図版105. 堀切トレンチ4完掘状況（南東側より）



図版106. 堀切トレンチ4石積み下部 北セクション



図版107. 堀切トレンチ4石積み下部 南セクション



図版108. 堀切トレンチ5石列検出状況（南東側より）



図版109. 掘切トレンチ5完掘状況（西側より）



図版110. 掘切トレンチ5完掘状況（東側より）



図版111. H25 出土遺物① 裏



図版112. H25 出土遺物① 裏



圖版113. H25 出土遺物② 裏



圖版114. H25 出土遺物② 裏



圖版115. H25 出土遺物③ 裏



圖版116. H25 出土遺物③ 裏

報告書抄録

ふりがな	いとかずじょうあと							
書名	糸数城跡							
副書名	-蔵屋敷地区発掘調査報告書-							
巻次								
シリーズ名	沖縄県南城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第19集							
編著者名	津波陽子、横山幸平、山里昌次							
編集機関	沖縄県南城市教育委員会 文化課							
所在地	〒901-1292 沖縄県南城市大里字仲間 807							
発行年月日	西暦 2017年3月28日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ′ / ″	° / ′ / ″		m ²	
糸数城跡 (蔵屋敷地区)	南城市 主 城 字糸数 小字 竹の口原	472158				平成18年度 ～ 平成25年度	約650m ²	史跡整備 に伴う遺 構確認調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
糸数城跡 (蔵屋敷地区)	城跡	グスク時代	石積み ピット状遺構 土壇 堀切状遺構		グスク土器 カムイヤキ 中国産陶磁器など		発掘調査の成果に 基づいた整備事業 を実施していく。	
要 約	平成18年度から平成25年度にかけて、糸数城跡の東側にひろがる蔵屋敷地区の発掘調査を実施した。調査は、史跡整備に伴う事前の遺構確認調査である。 発掘調査では、2つの石積みに囲われた範囲を中心に実施し、石積み、ピット状遺構、土壇、堀切状遺構などが確認された。本地域は、戦後に畑地として使用されたため、上部が重機によって攪乱され、優良な包含層の検出が難しかったものの、石積み下部にはプライマリーな包含層が存在することが分かったほか、多数のピット状遺構から、一部地域では住居プランの想定も可能であった。							

沖縄県南城市文化財調査報告書第19集

系数城跡

— 蔵屋敷地区発掘調査報告書 —

発行日 2017（平成29）年3月
発行 沖縄県南城市教育委員会
〒901-1292 沖縄県南城市大里字仲間807
TEL (098)946-8990
印刷 有限会社 南風原印刷
〒902-0073 沖縄県那覇市上間571-1
TEL (098)834-1616